HARMONIX PART2
TEARED
©TatshMusicCircle2020

HARMONIX PART2-1『TEARED』

イクスの朝はここ一週間ですっかり様変わりしていた。

朝目覚めると、焼きたての甘い香りが鼻腔をかすめる。調理されている材料は日によって違っていて、卵だったり、ソーセージだったり、あるいはパンだったりもする。匂いに釣られて目を覚ますと、ジュウゥ、とフライパンの上で油が焼ける音が耳に飛び込んでくる。耳を澄ませると包丁がトントン、とまな板に振るわれる音も聞こえてきて、朝の訪れを告げてくる。

朝ごはんを作ってくれているエレノアナに挨拶をすると、彼女はいつも決まって朗らかに挨拶を返してくれる。

「おはようエレノアナ」

「あ、おはようございますイクスさん！朝ごはん、もうちょっとでできますから待っていてくださいね！」

「あ、ああ……」

待っていてくれと言われても、何もやらないのも落ち着かず、自分の身支度を整えたイクスが向かう先はレイラのところだ。放っておくと昼過ぎまで眠るレイラを叩き起こし、朝食の席につかせ、三人でエレノアナの手料理を囲んでようやく一日がはじまる。

実家にいるかのような安心感だな、とイクスはここ毎朝目覚める度に自分の頬が緩むのを感じていた。イクスが生家で朝食の香りに起こされたことなどなかったのだが、それ以上にしっくりとくる表現が見つからなかった。

仲間二人と旅をはじめ、訪れた新しい毎日は驚くほどにイクスの肌になじんだ。何気ない朝の目覚めでさえも不思議と心が躍る。朝起きてすぐ洗面台に向かうと少しばかり口元がほころんだ自分の顔と目が合って、イクスは困ってしまう。悪いことではないが、戸惑いも大きい。自分が今までとは別の人物になってしまうのではないかという感覚すらあって、それを嘆くべきなのか喜ぶべきなのかわからない不安もあった。

決して、今までが不幸な人生であったなどとイクスは思わない。両親は共働きで構われる時間は少なかったものの、別に仲が悪いわけでもなく、仕事も――今は職場ごとなくなってしまったが――目立ちはしないが特に不満もなかった。目立った欠点もないがとりたてて特徴もない平凡な家に生まれ、平凡に育ち、堅実な職を選んだ普通の男。それが一週間前までのイクスだ。

あの時、もしも双子の少女エレナとノアナの手を取らなかったら。ジェノサイド社に追われる二人を衝動的に助けなければ、自分は今頃何をしていただろうか。気持ちが落ち着きはじめた今、ふとした瞬間にそんなことを考えてしまう己をイクスは止められなかった。少女たちを、エレノアナを助けたことに後悔はまったくない。ただ、ふわふわとした思考がなんとはなしに考えてしまうのだ。もし今もまだ自分がジェノサイド社の社員だったら、いったい今頃何をしていたのだろうか、と。

きっかけは、新聞でジェノサイド社のその後の顛末を知ったことだ。ジェノサイド社が崩壊して一週間。ビッグ・カンパニーであるジェノサイド本社の倒壊が騒ぎにならないはずもなく、あちこち蜂の巣を突いたような大騒ぎとなった。元々街全体のライフラインをジェノサイド社が支えていたため、社の崩壊と共に街の住人全体の生活が滞ってしまい、暴動寸前の緊迫感が街中に漂った。あまりの混乱に、未だ破壊されたジェノサイド本社の瓦礫の撤去すらはじまっていないらしい。

イクスの最大の難敵であったジェノサイド社の幹部フィランダーは本社を全壊させた“事故”の責任を取る形で地位を落としたと聞く。非道な行為を行っていたとは言え、ジェノサイド社の

中核を担っていた人物だ。彼なしの社の建て直しは難航を極めるだろう。
　実際、全社員が自宅待機を命じられて以降、ジェノサイド社再建の指揮者すら未だ決まる気配もない。多くの幹部は逃げ出し、残る者も戸惑うばかり。新聞では再建の見通しなしとまで書かれていた。事実上の壊滅だ。
　元ジェノサイド社の社員として、イクスもかつての同僚たちの行く末に思うところがないわけではない。もし、己が同じ立場だったらどうしただろうかと想像を巡らせてしまう。
　最後まで社の立て直しを信じて、自宅で待機し続けるだろうか。それともどこかで見切りをつけて新しい職を探しただろうか。仕事もせずに自宅に居るイクスを両親は何というだろうか。問い詰めるだろうか、それとも大変だったね、と慰めてくれるだろうか。
　どうだろう、と考えるイクスだが答えはちっとも得られない。生活も、共に居る者も、生きる目的も、あらゆるものが変わってしまったせいだろうか。たかだか一週間前の自分が思い出せなかった。
　もし自分がまだジェノサイド社員だったら、という想像すら今のイクスにはもうできない。それは不思議なような、不安なような、それでいてどこか幸福な気分だった。
「イクスさん……イクスさん！」
「……うん？」
　エレノアナに肩を叩かれて、ぼんやりとイクスは振り向いた。
「イクスさん、朝御飯どうでした？魚のホイル焼きはじめて作ったんですけど……」
　イクスが口を開くよりも前に横から現れたレイラがエレノアナの肩を叩く。
「もう、バッチリ！！すごい美味しかったよ！」
「もうっ、レイラさんからは何回も聞きました！」
　レイラに褒められたエレノアナは困った顔をしているが、口元は緩んでいる。見ているイクスの心まで穏やかになり、幸せな気持ちに満たされた。
「エレノアナちゃーん、私、今度はムニエルが食べたいなー？」
「ムニエルかぁ！やったことないけど楽しそう……って、そうじゃなくてイクスさんに聞いてるんです！！」
　燃えるような赤髪と自信に満ち溢れた笑みが美しいレイラに、神秘的な翡翠の瞳に色鮮やかな感情を踊らせるエレノアナ。
　麗しい二人の少女に注目されてしまい、イクスは弱り果てた。視界も眩しいが、返答も悩ましい。
　エレノアナの作る手料理はどれも美味だ。食事の度に内心では褒め称えているのだが、今まで戦闘に明け暮れてきたイクスではエレノアナの料理を絶賛するための良い言い回しが見つからない。結果的にいつもありきたりな感想になってしまうのが最近のイクスの悩みだった。
「美味しかったよ。いつもありがとう」
「むぅ。イクスさん、いつもそれです」
「いや、本当に全部美味しいんだよ」
　それなら良いんですけど、とむくれながらも照れるエレノアナ。一秒一秒ごとに変わる彼女の豊かな表情は見ていて飽きない。
「でも、イクスさん大丈夫ですか？最近ちょっとぼーっとしているような」
　瞳を揺らして心配そうな視線を向けるエレノアナにイクスはかつて守り抜いた双子の名残を見つける。ジェノサイド社から連れ出した双子、エレナとノアナもイクスが些細なかすり傷を負っただけでもひどく悲しんだ。
　双子の名残を見つける度にエレノアナは確かにエレナとノアナであるのだと実感させられ

る。その度に新鮮な喜びと、慣れ親しんだものに対する安堵がイクスの中に沸き上がった。今までの人生にはなかった暖かな感情にまだ慣れることができず、戸惑いも同時に込み上げてくる。
「イクスさん？」
「いや……」
　なんか不思議な気分で……、と滑りそうになった口を慌てて閉じる。いつまでも呆けているわけにはいかない。代わりに別の話題をエレノアナとレイラに打ち明けた。
「これからどうしようか考えててさ。マテリアルになった人を解放するにしても、まずマテリアルを見つけなきゃいけないだろう？」
　旅の途中でいくつかの街に寄ったイクスたちだが、未だに一つもマテリアルを発見できていなかった。人間を素材として作るマテリアルはジェノサイド社とコネクションを持つ限られた人間しか手にできない貴重品だ。そう簡単に見つかるものではない。
「どうやってマテリアルを見つけるか、ですね……うーん」
「そこら辺に落ちてるものじゃないもんね。そうね……あっ、そうだ！」
　レイラが急に手を打った。研究員時代から愛用している情報端末を取りだし、何事かを操作すると青白い光と共に何千枚もの書類が空中に映し出された。レイラの指が動く度にプロジェクションされた半透明の書類がパラパラとめくられる。
「これは？」
　イクスが問いかけると、顔も上げずにレイラが答える。
「念のため内部情報抜いといたんだ、ジェノサイド社の」
「いったい、いつの間にそんなこと……」
「キュアを探してるとき、ついでにちょちょっとね。この中にきっと……あった！顧客リスト！！」
　数千とあった書類のほとんどが消え、わずか数十枚が残る。レイラがさらに指を動かすと顔写真つきの購入者データが一人ずつ拡大されて表示された。どれも身なりの良い服装で、ジェノサイド社の重要顧客と言われて納得が行く。
「どう？マテリアルを買った人のところなら、何か手がかりがありそうじゃない？」
「すごいです、レイラさん！！この人たちのところに行けばいいってことですね！」
「この人たちが俺たちに会ってくれるかはわからないけどね」
「それは行ってみないとわかりませんよ、イクスさん」
「そうだな……。レイラさん、ここから一番近いところに住んでる顧客のデータは出せますか？」
「はーい。ちょっと待ってね」
　程なくして品の良さそうな老紳士のデータが表示される。
　名はロード。購入件数は一件。数ヶ月前にマテリアルを一つ買い上げた以外にジェノサイド社との取引はない。細身のスーツで身なりを整えているが、きつく結ばれた口元とレンズを睨み付ける目元が偏屈そうに見えた。
「いい人だと良いですね」
　人間の悪意を知らなさそうな笑顔でエレノアナがイクスに同意を求めた。対照的にレイラは皮肉げに肩をすくめる。
「どーだか。顧客の中には素材の正体を知ってて買ってるやつもいるはずだよ。この人がどっちかは知らないけどね」

　他の顧客情報をパラパラと表示させるレイラ。一定間隔で変わる顔写真をイクスも眺めてみるが、人の良し悪しなどわかりそうにもない。だが財力を持つ者特有の気配とでも言えるような、似通った雰囲気は確かに感じられた。
　移り変わる写真を眺めていると、ふと、気配の違う顔写真が映りイクスは声をあげた。
「あっ。レイラさん、この子もマテリアルの購入者ですか？」
　可憐な少女だった。柔らかな白髪と黒いゴシックドレスに覆われた華奢な造形は少女人形を思わせる。ファインダーを挑発的に睨み付ける紫の瞳が蠱惑的だ。造りものめいた可愛らしさと攻撃的な魔性が合わさり、危うげなアンバランスを感じさせた。
　他の購入者とは一線を画す鋭い雰囲気が少女にはある。また、他の顧客データとは異なり名の記載がない。
「ううん、この子は警戒対象ね」
「「警戒対象？」」
　エレノアナとイクスの声が揃う。
「マテリアルの顧客を襲って、マテリアルを奪い回ってる子だね。顧客に警戒対象として注意喚起してたみたい」
「マテリアルを奪うって……どうして？」
　エレノアナが戸惑い気味に問う。
「さあ……本人に聞いてみないとねぇ。転売をしているわけじゃなさそうだけど」
　パッとまた写真が別の人物に切り替わる。そこで謎の少女についての話題も途切れた。
「……マテリアルを奪う女の子、か……」
　少女がマテリアルの顧客を襲うのならば、どこかで戦うこともあるかもしれない。少女のたおやかな手足を見ると、とても戦えるようには見えない。しかし、ただの少女と切り捨てられない不穏な何かが彼女にはあった。
　カメラを睨み付ける少女の瞳にイクスは妙な胸騒ぎを覚えた。

「お悩みですか、イクスさん？」
　ひょこりとエレノアナがイクスの顔を覗きこんだ。イクスの前には黒いドレスの少女が浮いている。レイラの情報端末を借りて襲撃者の情報の詳細を眺めていたのだが、何もわからずに煮詰まっていたところだった。
「一応、戦うことになるかもしれないと思って調べてたんだけど。ジェノサイド社も詳しくは把握してないみたいだな」
「その割にはさっきからずーーっと同じところ見てません？」
「バレちゃったか……。これから危険なこともあるだろうからしゃんとしなきゃって思ってるんだけどね。なんか気が抜けちゃって」
　たった一週間で鈍ってしまったのかと言われると少し違う。これから訪れるかもしれない危険から目をそらしてしまっているような、浮き足だった感覚だ。
「俺がしっかりしなきゃいけないのに……この体たらくじゃなぁ」
「大丈夫ですよ！イクスさんは一人じゃないです！私もレイラさんも居ますよ」
「女の子に守られるのも格好悪いだろう？」
「ふふ、イクスさんはかっこよくて強いですもんね」
「そ、そこまで言われると照れるけど……」
「でも、悩みすぎるのはダメです。煮詰まったときは休憩ですよ」

図ったように芳ばしい匂いがイクスの鼻腔を掠めた。挽きたての豆の甘い香り。コーヒーだ。イクスが悩んでいる間にエレノアナが淹れてくれたらしい。
「見えない明日を心配するより、今日一日を大事に、です！イクスさん、ほらコーヒーでも飲んで！」
「ああ……ありがとう」
淹れたてのコーヒーが注がれたマグカップを受け取ると、台所の方からレイラの声が飛んだ。
「砂糖とミルクもあるけどーー？」
「大丈夫です」
「おんやぁ？」
朝食の後片付けをしていたレイラがわざとらしい声をあげて覗きに来た。猫なで声のような、独特な声色にイクスはぎくりと身を強張らせる。この声色はからかいにくる前兆だ。
「イクスくんってば、いつの間にブラックで飲めるようになったのかなぁ？コーヒー苦手だったはずなのにぃ？」
「に、苦手じゃないですよ……」
「でもずっと砂糖もミルクもダバダバ入れてたじゃん」
「眠気覚ましに一気飲みしてたので。ミルクを入れた方が冷えて飲みやすいんです」
「ふふふっ、強がっちゃって」
「……強がってないです」
ニヤニヤと近づいてくるレイラから顔をそむけるイクス。嘘は言っていないはずなのだが何故か言い訳をしている気分になり、思わずすねたような口調になった。
「……えっ。イクスさんってコーヒー……お嫌いだったんですか……？」
「え？」
不安げに揺れる声に慌ててイクスは振り向く。エレノアナの目が悲しみを湛えていた。
「私、もしかして無理させていましたか……？」
「あ、いや！！本当にコーヒーは好きなんだ！嘘じゃないよ！！」
「エレノアナちゃんの淹れてくれるコーヒーがでしょ？」
「わ、私の？」
「ちょっ、まぜっかえさないでくださいレイラさん！」
エレノアナの涙は引っ込んだが、まずい方向に話が進んでいる気がする。慌ててレイラの口をふさごうとするイクスだが、するりと逃げられてしまう。
「恋人の手料理で嫌いなものを克服できました〜、ってよく聞く惚気よね」
恋人！？と、イクスとエレノアナが声を揃えた。
「「か、からかわないでくださいレイラさん！！」」
「ほら息ぴったり！ああ、若い二人がうらやましい〜」
楽しそうなレイラにイクスはがくりとうなだれた。
「レイラさんも若者ですよね……はぁ」
「あはは、ごめんごめん！！」
完全にからかわれてしまっている。だがカラリと笑うレイラを見れば怒る気力もなくなり、脱力する他ない。
「そ、それにしても、大きい車ですね！こんなに大きい車があるなんて知りませんでした」
エレノアナが示しているのは三人が旅の足として利用しているキャンピングカーだ。三人が寝

泊まりしても十分な余裕がある程の広さで、キッチンやトイレ、風呂まで完備されている。ジェノサイド社から離れる際にどこからともなくレイラが調達してきたものだった。
　あからさまな話題転換だが、レイラもそれ以上追い詰める気はないらしく素直に応じる。
「この車はね、ママが私にくれたの」
「ええ！？お母さんのなんですか！？」
「そ、亡くなる直前にもってけドロボー！って」
「そういえばレイラさんのお母さんは亡くなっていたんでしたっけ……」
　難しい病だったとイクスは聞いている。研究者であるレイラの父も、レイラ自身も様々な手を尽くしたが治療法は見つからなかったらしい。
　エレノアナはレイラの母の話をはじめて聞いた様子で目を見開いた。
「え！？ごめんなさい……私知らなくて」
「そりゃ言ってないから知らないでしょ。気にしない、気にしない！ほら、皿洗いは私がやっとくから、エレノアナちゃんは休んでて！」
「は、はい！」
　エレノアナを台所から追い出したレイラが蛇口をひねった。
「……まあ、ママが亡くなってなけりゃ、パパも研究にあそこまで没頭することはなかったと思うけどね。そうすればマテリアルも作られなかったのかも」
　流水の音に周囲の音がかき消され、ソファに向かったエレノアナにはその呟きは聞こえなかっただろう。
「レイラさん……？」
　片付けを手伝おうかと台所に残ったイクスは瞠目する。
　皿を洗いながら語るレイラの横顔はいつも通りだ。しかしあっさりとした口調の裏には寂しさのようなものが見え隠れしていた。
「父親ってどうしてあんなに勝手なんだろうね。大丈夫としかあたしには言ってくれなくてさ。でも、結局大丈夫じゃなかった」
　レイラの父はマテリアルの開発者だ。人間を素材に作られる“音”を開発したその手でマテリアルを人間に戻すキュアを開発した人物でもある。ジェノサイド社の方針に抗いキュアを作ったため抹殺されてしまった父に代わり、レイラはイクスたちと旅に出た。
　大丈夫ではなかったのはマテリアルを開発したことか、それともキュアを開発して抹殺されたことなのか。あるいは、それ以外の何かを示しているのか。深く踏み込むのを躊躇わせる陰りがレイラの表情を覆っていた。
「……パパが悪いわけじゃないってのはわかってるんだけどね。恨んでるわけでもない。でも……」
「……」
　イクスが何も言えないまま立ち尽くしていると、レイラは急に表情を切り替えた。いつもの生命力満ち溢れる、美しい笑顔だ。
　立ち尽くしているイクスの背中をバシン！と叩き、カラリと笑う。
「……はい！この話やめ！しめっぽいこと言ってごめんね！！ほら皿洗いくらいはやるからエレノアナちゃんと休んでなさい！！」
「いや、でも俺だけ何もしないのも」
「食料調達とか力仕事は頼んでるでしょ。ほら、コーヒーが冷めたらエレノアナちゃんがまた悲しい顔するわよ？」

促され、しぶしぶとエレノアナの元に戻るイクス。ソファの傍ではエレノアナが淹れたてのコーヒーを前に難しい顔をしていた。
「エレノアナ？」
「あ、イクスさん！レイラさんの分のコーヒーも淹れたんですけど……レイラさんはコーヒーお好きでしょうか？」
「いつも飲んでるから好きだと思うよ。それに、エレノアナのコーヒーは誰だって一度飲んだら好きになるさ」
「えっ！？」
「あれ、俺変なこと言った？」
「ぜ、全然！大丈夫です！ちょっと心臓に悪かっただけです！！」
様子のおかしいエレノアナを気遣おうとしたイクスの背中を強い衝撃が襲った。
「痛っっっっ！？何するんですかレイラさん！！」
「油断するとすーぐたらしこむんだから。ねー、エレノアナちゃん？」
「はい……油断大敵です」
「いや、タラシって……」
あまりな評価にイクスは不満を表した。ただ思ったことを正直に言っただけでひどい言われようだ。だがすぐに不満も解けて、暖かな笑いに変わる。
二人と居る空間は良く肌になじみ、イクスはまたどうしようもないくらいの幸せを感じた。
ほんの少し間違えていれば、こんな日々はありえなかったのだ。レイラがキュアを持っていなければ、あのときジェノサイド社が崩れなければ、エレノアナはマテリアルから人間に戻ることはなかった。そう考えて、イクスは改めてぞっとした。今が幸せすぎて、二人を失ってしまった後のことなど考えるのも恐ろしい。落ち着いた今だからこそ、エレノアナが人間に戻って本当に良かったと心底思える。
「どうかしましたか、イクスさん？」
「いや……マテリアルになった人を、一日でも早く人間に戻してあげたいって思ってさ」
「そうですね。絶対、みんなを戻してあげましょう！！」
「ほーんと、イクスくんも言うようになったわよねぇ」
元気に拳を振り上げるエレノアナとクスクス笑うレイラ。イクスも二人に釣られて優しい笑顔で頷いた。

マテリアルを購入したという富豪ロードが住んでいる街は今まで三人が通ったどんな街よりも賑わいをみせていた。人の行き交いが激しい繁華街は特に騒々しく、あっちこっちへと向かう人たちの人混みで混沌とした様を見せている。都会らしい景観だが、街のずっと奥に青々と茂る山々も広がっている。あそこの山中のどこかでロードはひっそりと暮らしているらしい。イクスたちが街に入った途端、あちこちから人の視線を感じた。よもや敵でも潜んでいるのかとイクスは気を引き締める。だがそれにしては敵意がない。見慣れないよそ者に向ける視線とも異なる。何らかの得体の知れない警戒を含んだ視線だった。
共に連れ立つ少女たちに目配せを送るイクス。レイラは小さく頷き、自身の服を示した。イクスと同じ、黒を基調にしたジェノサイド社の制服だ。なるほど、とイクスは視線の正体に気付く。

本部が崩壊したとは言え、かのビッグ・カンパニーの名はまだ生きているらしい。世間の喧噪から離れた静かな村里ならばともかく、人の行き交いが激しい都会ではジェノサイド社の制服はあまりに目立つ。
イクスはゆっくりとレイラに頷き返した。エレノアナは二人の視線に気付かない様子で街中を突き進もうとしている。
「イクスさん？レイラさん？二人とも急に立ち止まってどうして――あ、あれーーー？」
通じ合った二人はエレノアナを両サイドから引き留め、進む方向を変えた。向かう先はショッピング街だ。
目についた服屋に三人で飛び込んで数十分。着替え終わったイクスは落ち着かない様子で仲間の二人が試着室から出てくるのを待っていた。
ドレスやワンピースが展示された服屋に入る機会などそうそうない。どうしても場違い感が拭えなくて、この店で着替えたばかりの服装ですら浮いてはいないかとそわそわしてしまう。
変な格好ではない……とは思う。無意識にネクタイの位置を直しながらイクスは眉根を寄せる。
黒いズボンに深い紺のネクタイ。うっすらとストライプのはいった黒地のシャツは黒無地を選ぼうとするイクスを押しのけて店員が熱心に勧めたものだ。動きやすさを追求したシンプルな服装。黒基調だったジェノサイド社の制服から変わり映えがしないと言えばそれまでだが、黒が一番落ち着く色なのだから仕方ない。
服など着れていればいい。そんなイクスの思考は試着室のカーテンが開いた途端にどこかへ吹き飛んだ。
「イクスくーーん！どうかな？」
「――――――」
現れたレイラの開いた胸元から見える胸の大きさに真っ先に目がいってしまい、慌てて視線をそらすイクス。一瞬で柔らかそうな二つの山が目に焼き付いた。改めてみると大きいんだな、とイクスはどこかゆだる頭で考えた。
惹きつけられたのは胸元だけではない。腰回りを覆う布地の丈が短いのは動きやすさを追求したためだろうが、くびれた腰としなやかな脚が露わになっていて目のやり場に困る。品の良い金色で縁取りされた服はレイラの情熱的な美貌を際立たせていた。
たかだか服なんて侮っていた数秒前の自分の胸倉を掴みたい気分にイクスは陥った。先ほどまで直視できていたはずの元同僚とうまく目が合わせられない。気を抜けば開いた襟元へと向いてしまいそうな視線を隠して、必死に明後日の方向を見つめた。
「およよ、イクスくーーん？感想は？似合ってる？似合ってない？」
「に、似合ってると思います……」
「うふふ、嬉しい！」
そんなやりとりをしていると、シャッ、と控えめにカーテンが引かれる音がした。エレノアナが出てきたのだ。
振り向くべきか、振り向かざるべきか、イクスは迷う。エレノアナもレイラと似たようなドレスを着ていたら今度こそイクスはどこを見たらいいのかわからなくなる。
「い、イクスさん……どうですか？」
迷っているうちにエレノアナから声をかけられてしまい、イクスは警戒しながらゆっくりとそちらを向く。
美しい少女がそこにいた。

なだらかに白から薄桃へと染まるAラインのワンピース。両サイドに控えめに広がる裾は天使の羽のようだ。元から美しい少女だったが、今まではまばゆいほどの光すら感じさせられる。照れのまじった控えめな微笑みが白桃のワンピースと調和し、エレノアナの清廉な心そのものを表しているかのようだった。
「き、綺麗だ……」
自然と言葉が口をついて出る。それ以外、なんと言って良いのかイクスにはわからなかった。
「あ、ありがとうございます……イクスさんも似合っています」
「ちょっと、私のときと反応がちがうんだけど？」
「あ、いや、その。ちょっと、びっくりしちゃって……れ、レイラさんも綺麗だと思います……」
視界に入ってきた黒いドレスと揺れる赤髪にドキリとイクスの心臓が跳ねる。反射的にドレスの裾から目を離した。
「って言いながら目が合わないのはなんでかなー？」
「それは、その……」
レイラの悪戯っぽい瞳が至近距離からイクスを覗きこんだ。ドレスよりも、瞳の中の光の強さにドキリと魅入られる。
「ははーん！さてはイクスくん照れておりますな！」
「照れてないです……」
「隠さない隠さない！！そーか、そーか、私はそんなに綺麗か！あはははは！」
「照れてないって言ってるのに……」
心臓に悪い人だ。わずかな時間でぐったりとイクスは疲弊してしまった。逃げるように店員の元に行き、支払いを済ませる。
服屋から出るところで、ふとレイラが店員に話しかけた。
「すみません、この辺に住んでるロードって方、知っていますか？」
「ロード様ですか？ええ、存じておりますよ」
「私たちこれから彼に会いに行くんですけど……どんな方なんですか？」
横目でちらりとイクスを見たレイラの唇が“情報収集よ”と動いた。
「そうですね……ロード様は厳格な方だと聞きます。でも街に降りてくる時はいつもお孫さんと一緒で、私がお見かけした時は優しそうな方でしたよ。お孫さんのために一番いい服を仕立ててくれ、と仰られていて……。最近はあまりお姿も見かけませんけどね」
「お孫さんと仲が良かったんですね」
「ええ。愛嬌のある、可愛い男の子でしてね。だからあんなことになってしまって、ロード様もとても塞ぎこまれていて」
「あんなこと？」
思いがけない話の流れにイクスたちは顔を見合わせた。店員は気付かずに痛ましい表情で語り続ける。
「お孫さんが行方不明になってしまったんです。あれから二年か、三年と経ちますが、未だ見つかっていないそうです」
きっかけはロードの一人息子が起こした離婚騒動だったという。妻ではない別の女性とロードの息子が遊び歩いていたことが相手の実家に知られ、二人は別れることになった。ロードの

孫は母方に引き取られることが決まり、屋敷を出る。しかし、実家に戻る途中のどこかで元妻と共に孫は行方がわからなくなってしまったとのことだ。
　孫と義理の娘が行方不明になりロードは怒り狂った。原因となった一人息子に絶縁状を叩き付け、それ以来屋敷に籠りきりになってしまったらしい。買い出しの使用人が行き交いしているためまだ屋敷に住んではいるようだが、街でロードの姿を見かけることはすっかりなくなってしまったという。
「この街では昔から行方不明者が少しだけ多いんです。それも、女子どもばかり。だから、ロード様が危険な事件に巻き込まれてしまったのでは、という噂もあるんですよ。何やら怪しい人間が一時期、ロード様の屋敷を出入りしていたこともありますし。……おっと、申し訳ありません。長話が過ぎましたね」
　店員ははたと話しすぎたことに気付き、困ったような笑顔で優美な一礼をした。
「……もしロード様にお会いすることがあれば、たまには服を仕立てに来てください、とお伝えくださいね」

「さっきの話、怪しい人間ってジェノサイド社のことだと思う？」
　店を出てすぐイクスは仲間二人に訪ねかけた。
「そうじゃない？」
　レイラが大人びた笑みをイクスに向けた。
「ロードはマテリアルを買ってるんだから。素材のことを知ってか、知らずか……ね」
「知らないんじゃあないですか？人間が元になっているって知っていたら、普通買わない気がしますけど」
「イクスくんは甘いなー。マテリアルに関わる人には、色んな人がいるんだよ。イクスくんが想像もしないような人がね。マテリアルの素材として自分の実の子どもを差し出す親だっている。お金のためにね。わかんないよ、実際に会ってみないとどんな関わり方をしてるのかは」
「怖い人じゃないように思えましたけど……」
　エレノアナが戸惑いがちに言った。目にはうっすらと涙の膜が張っている。服屋で店員の話を聞いてからずっとそんな調子だった。レイラがそれに気付かないフリをしながらも、エレノアナの頭を優しく撫でる。
「まっ、どんな人かはお楽しみってことね！」
　さあ行きましょう、とレイラが意気込んだところでイクスたちを呼び止める声があった。
「そこのおまえら」
　必要以上の気安さを含んだ、寒々しい声だった。そのように声をかけられる覚えがないイクスはそのまま進もうとする。だが、その肩を無遠慮に誰かが引き留めた。
「おまえだ、おまえ。おい、無視してんじゃねぇ」
「……どちらさまですか？」
　振り向いた先には目つきの悪い男が立っていた。黒い防護服に全身を包み、同じ色のヘルメットをかぶっている。何かしらの機動隊の隊員のようだが、それにしては体つきがいささかだらしない。低身長も合わさって、防護服を無理矢理着せられたおもちゃのように見えた。所属を確認しようとするが、胸元にもヘルメットにも所属を表す手がかりがない。イクスがレイラとエレノアナを背中に隠したのはとっさの判断だった。
「俺に、なんか用が？」
「俺はジェノサイド社の治安部隊だ」

「……ジェノサイド社！？」
　もしやマテリアルがらみの追手か、とイクスは内心動揺していた。ジェノサイド社は潰えたはずだが、イクスたちを探している用があるとすればそれ以外考えられない。怪しまれてはいないかと男の様子を窺うイクスだが、反逆者に対する敵意は感じられない。
「……ジェノサイド社は今、動いていないはずでは？」
「あー、本部が崩壊したとかいう話か？んなことはどーでもいいんだよ」
「どうでもいいって……」
「それより、調べてることがあってな……ちょいと協力してくれや」
「調べてること？」
　本当にこの男はジェノサイド社の者だろうか。訝しげにイクスは質疑に応じると、男は一枚の写真を取り出し、イクスに突きつけた。
「こいつを探してるんだ」
「――――――」
　イクスは動きを止めた。息を止め、手の動きを止め、表情を固めた。そうしなければ、驚愕が顔に出てしまいそうだったからだ。
　写真には見覚えのある少女が写っていた。柔らかな白髪とファインダーを見つめる澄んだ紫の瞳。マテリアルの所持者を襲撃しているという少女に顔立ちがよく似ている。しかし座る写真の少女はどうにもデータベースに載っていたあのアンバランスな少女と印象がくい違う。
　薄紫のワンピースを纏い、しとやかに椅子に座っているからだろうか。自信のなさで陰った控えめな笑顔のせいだろうか。イクスが警戒していた、挑発的な瞳の少女とはまるで別人だった。
　双子だろうか。ノアナとエレナを思い出しながら、イクスは考える。彼女たちも目鼻立ちや体格はよく似通っていたが、しかし表情や性格はまるで別物だった。
「……いや、見たことないな」
「そうか」
「そりゃあ悪かった。邪魔したな」
　男はあっけなく引き下がり、写真をしまいこんだ。あまり当てにはしていなかったらしい。
　ひとまず自分たちの追手ではないことに安堵するイクス。去っていく小さな背中を見つめていると、男が不意に振り向いた。
「そうだ、兄ちゃん」
　まだ何かあるのかと身構えるイクスに近づき、囁くような小声で笑う。
「アンタ金に困ってたりはしねぇか？」
「……は？」
「いい話があるんだ」
　イクスに話しかけながらも、男の目はエレノアナとレイラの二人に向けられている。男の視線の先に気付いた途端、イクスの臓腑が冷えた。どう考えてもろくな話ではない。脳の奥がカッ、と熱くなり、衝動的に男を睨みつけた。
「悪いが、興味はないな」
「へへっ、兄ちゃんが思ってるようなもんときっと違うぜ。そこらの下品なポン引きと俺を一緒にしないでくれよ。そこの巨乳の姉ちゃんと綺麗な髪の娘ならうんと高く売れる。なあ、俺と兄ちゃんで一儲け……」
　男を遮るようにイクスは低く唸った。

「――それ以上、彼女たちを侮辱するなら俺にも考えがある」
　イクスは己自身がここまで冷え切った声を出せるとは思っていなかった。威嚇ではなく、本心からの嫌悪で男を言葉で突き放す。街中で騒ぎになろうと構わない。片手はすでに腰に下げたホルスターに伸びていた。
「お、おいおい」
　イクスの本気を感じた男がたじろいだ。
「ちょっとした世間話じゃねーか！なっ！そうカリカリすんな、って！」
「用がないなら、消えてくれ」
「ちっ」
　今度こそ男が立ち去った。逃げるように小走りで人込みに消えていく背中をひとしきり睨みつけてから、イクスは我に返った。エレノアナとレイラは大丈夫だろうか。
　すると、振り向いた途端にエレノアナのキラキラした目と視線がぶつかった。
「ありがとうございますイクスさん！とてもかっこよかったです！！」
「そ、それほどでも……」
　怖い思いをさせてしまったかと思ったが、問題なさそうだ。レイラの方はと言うと、怯えている様子はないが難しい顔で何事かを考え込んでいる。
「……」
「レイラさん？大丈夫ですか？すみません、もう少し早く追い払えればよかったんですけど……」
「ううん、それはいいんだけど……いや、なんでもない。守ってくれてありがとね、イクスくん！」
「あいてて……」
　声をかければ明るい笑顔を浮かべるレイラ。バシッ、とイクスの背中を叩く様子はいつも通りに見える。
　だが一抹の不安を覚えてしまったのは、キャンピングカーでレイラの独白を聞いたからだ。マテリアルを父が開発したこと、キュアを開発して亡くなったことに対して、レイラは完全に踏ん切りをつけられていない様子だった。そして、踏ん切りがつけられていなくとも美しく笑える人であることをイクスはもう知ってしまった。
「……本当に、大丈夫ですか？」
「イクスくんは心配性だねぇ。あんな絡み方してくる人がイマドキ居ることにちょっとびっくりしちゃってさ」
「それならいいんですけど……」
　あらゆる葛藤を隠してなんでもないようにふるまうレイラの笑顔。そこに正面から踏み込めない自分をイクスは不甲斐なく思った。

HARMONIX PART2-2 『水のマテリアル』

　イクスたちはロードの屋敷を訪れていた。街外れに広がる森の奥深くにひっそりとロードの屋敷は建っている。鉄製の門に囲われた広大な土地は隅々まで手入れが行き届いているが、人の気配に乏しい。庭先に点在する灰色の石像から憂鬱な気配が漂っていた。
「申し訳ありませんが、ロード様の元にはお通しできません」
　ロード邸のメイドが深々と頭を下げる。
「誰であれ通すなとロード様より仰せつかっております」
　噂通り、ロードは他者を拒んで屋敷に籠っているらしい。そうでなくとも、今のイクスたちは身元の知れない不審な輩だ。そう簡単に会わせてもらえるとはイクスも思っていなかったが、予想よりも拒絶的な反応に弱り切ってしまう。この分では、イクスたちが訪れたことすら屋敷の主に伝わりそうにない。
　どうしようかとイクスが悩んでいると、エレノアナが一歩前に進み出た。メイドを真摯に見つめ、深々と頭を下げる。
「お願いします！とても大事なお話なんです！！」
「しかし……」
「どうしても、ロード様にお伝えしたいんです！！マテリアルのことで……」
「……マテリアル？」
　メイドの反応が変わった。マテリアルについて知っているかのようなそぶりを見て、即座にイクスがエレノアナの隣に並ぶ。
「もし、マテリアルについてご存じなら、ロード様に伝えてもらえませんか。“マテリアルの材料が人間であることを知っているか”と」
「え？」
　メイドが虚を突かれたような表情を浮かべたことに、イクスは安堵を覚えた。少なくとも使用人はマテリアルの材料について知らなかったらしい。
「しょ、少々お待ちください……！今、主に確認してまいります！」
　急いで屋敷の奥へ向かったメイドがそれから十分もしないうちに駆け足で戻ってきた。乱れた裾をさっと整えてから、恭しくイクスたちに頭を垂れる。
「お待たせしました。ロード様の元へご案内いたします」

　メイドに連れられて、イクスたちはロードの私室へと通された。思っていたよりも殺風景な部屋だった。品の良い調度品が部屋の各所に散りばめられているが、外の庭同様、人の生活の気配が乏しい。
　部屋の奥に据えられた寝台の上には一人の老人が居る。シーツから起こした半身は成人男性にしては少しばかり華奢で、服の裾から覗く指先が細い。しかしイクスたちを迎える目は枯れてはおらず、見られただけで自然と背筋が伸びるような鋭さがあった。彼がマテリアルを購入した富豪ロードだ。
「マテリアルが人間を元に、のう……」
　半信半疑と言った様子で老人が呟く。
「それで、おぬしらはわしにそれを伝えてどうするつもりかの」
「俺たちはマテリアルを人間に戻す手立てを持っています」

「それを使って、マテリアルになってしまった人々を人間に戻したいんです！！」
　イクスとエレノアナに迫られてもロードは表情を変えなかった。
「なるほどのぉ」
　一言そう答え、しばらく黙り込む。マテリアルの材料について驚いている様子はない。しかし敵意もなく、イクスたちに対する関心自体が薄いようにも見えた。
「――あれを持ってこい」
「かしこまりました、ロード様」
　ようやく口を開いたかと思えばロードは執事長らしき男を呼びつけ、何かを運び込ませた。
「……イクスと言ったな。おぬしはマテリアルの“音”を聞いたことがあるか？」
　名を呼ばれ、思わずイクスは姿勢を正す。警備員時代の射撃訓練を思い出したからだ。当時の教官も目つきがタカのように鋭く、言葉一つ一つに腹に響くような重みがあった。床に臥す老人であるロードからもかつての教官と同じ、上に立つ者特有の気配を感じた。
「はい、あります」
「なら、わかるじゃろう。あれを一度知ったら、知る前の己には戻れん。あの美しく……暖かな“音”を」
「それは……」
　イクスとて思わなかったわけではない。イクスたちの旅はいわば、マテリアル封印の旅だ。すべてのマテリアルを人間に戻してしまえば、この世界からあの美しい“音”は再び消えてしまうことになる。
　それをわずかたりとも惜しまなかったと言えば、嘘になる。はじめて触れたマテリアルはイクスの心の琴線を恐ろしいほどにかき乱した。“音”は人の心を揺さぶる。うまく使えば群衆心理すら操れると言われるだけある。その“音”が誰の耳にも届かず、存在することすら知られずまったく消えてしまうことに対して寂しさをイクスとて感じないわけではない。
「わしの容体はの。見ての通りじゃ。病に侵されての。この体では満足に歩くことも叶わん。友もおらん。家族もな。楽しみなどほとんどない、枯れた余生じゃ。その中にな、このマテリアルは飛び込んできたんじゃ……」
　カートから白い覆いが取り去られ、水色のマテリアルが現れた。老人の持つ飾りとしては不釣り合いな、かわいらしい魚の形をしている。結晶というにはあまりにも生気に満ちていて、淡い光を閉じ込めた氷のようだった。大部分は美しく凍り付いた水玉のような丸形で、そこから小さなヒレやシッポのような結晶体が突き出ている。
　ロードはいたわるような手つきで慎重にマテリアルを両手で持ち、しばらく目を閉じた。ゆっくりと再び目が開いた後も、その表情は淡々としたまま変わらない。しかし目にはうっすらと涙が浮かんでいた。ロードが瞬きをすると一粒の涙がこぼれる。
「触れてみぃ」
　ロードはイクスにマテリアルを差し出した。
「良いんですか？」
「ふん。わしからマテリアルを取り上げに来たと言いながら妙なところで遠慮するやつじゃの。ほら、持ちなされ。三人とも、触れてみぃ」
　イクスは同じように慎重にマテリアルを受け取り、目を閉じた。そっとレイラとエレノアナも同じようにマテリアルに手を伸ばす気配を感じたところで、イクスの意識は現実から切り離された。

“音”が聞こえた。誰かを深く思いやる“音”だ。胸に暖かな気持ちが自然とあふれ、午後の優しい陽気に照らされているような心地だった。誰かに見守られている安心感。くすぐったいような幸福感。陽光を美しく照り返す水辺で、誰かが小さな手を振って呼んでいる――。
こんなにも穏やかな“音”なのに、イクスは気付けば涙を流していた。胸が締め付けられるほどの切なさを感じて、崩れ落ちてしまいそうになる。底のない海の奥へと落ちていくような、ひんやりとした冷気が胸の奥を撫ぜていた。
「あ、あれ……？今、誰かの声が……」
マテリアルに魅入られていたイクスだが、エレノアナの声が聞こえて我に返る。そちらを見やると不安そうに耳を抑えるエレノアナが居た。
「エレノアナ？」
イクスが声をかけるとはっと我に返るエレノアナ。何でもないと返し、少女はいつもの笑顔に戻った。引っ掛かりを覚えながらもイクスは頷き返す。そして両手に置かれたマテリアルをそっとロードの手に返した。
「ありがとうございます。とても穏やかで……切ない“音”ですね」
「美しい音じゃ。この世のものとは思えんほどのな。わしの心の、最後の慰めじゃよ」
帰ってきた水色のマテリアルを見つめながらロードが言ったセリフに慌てたのはエレノアナだ。
「最後なんて、そんなことおっしゃらないでください」
「同情はいらんぞ、お嬢さん。人間はいつか亡くなる。事実じゃ。それは変えられん」
「でも……っ」
「まあ同情でも良いがの。どちらにせよ、マテリアルは渡せん。手放すなどわしにはできん」
「……それが、人間でできているものだと知っても？」
その低い声が誰のものなのか、一瞬イクスは認識できなかった。レイラだった。赤い目に険しい光を宿して、静かにレイラがロードを見据えている。ロードも顔を上げ、レイラの視線を真っ向から受け止めた。
「それが人間でできているものだとしても、手放せんよ」
「もし、最初から人間だとわかっていても、あなたはマテリアルを買ったのかしら……？」
無遠慮な問いにエレノアナが目を見開いた。
「レイラさん、そんなことを聞くのはやめてください！」
「大事なことよ、エレノアナちゃん」
「もし、そうだと言ったらどうするつもりじゃ？」
「マテリアルをあなたから奪ってでも元に戻すわ」
「「レイラさん！？」」
仲間二人が驚きの声をあげても、レイラは平然としていた。腕を組み、涼し気な顔で言い放つ。
「……二人とも、軽蔑してもいいよ。無茶苦茶なことを言っている自覚はある。でも、人間を商品としか見れないような奴の手に、マテリアルはひと時たりとも置いておけない」
レイラが苛烈な性格であることはイクスも知っていた。だが、これほどまでに固い意思を見せる姿ははじめて見た。今までそんなそぶりは見せなかったが、マテリアル開発に肉親が関わった者として、何かしらの激情を秘めているのかもしれなかった。それは、イクスにはわからない感情だ。

「ふん。口ぶりだけは達者な奴じゃの。安心せい。わしは人格者には程遠いがな……これが人間だとわかっていて手元に置くほど落ちてはおらん。それに、はじめから素材が人間だと知っておれば、触れもしなかったよ。人間は好きではないのでの」
「あら、あなたも人間じゃない」
「人間は勝手な生き物じゃ。己の欲望を満たすことしか知らん。わし自身も含めてな。だから好かんのじゃ。このマテリアルが元々人間だったとして、元に戻ればきっと同じだろうよ」
「そんなことありません！！」
　エレノアナはロードの言葉を強く否定する。
「そんな悲しい考え方をどうか、しないでください。この子は、ずっとロードさんの元に居た子です。こんなに優しい“音”を奏でる……。だからきっと、人間に戻った後だってきっと傍に居てくれる。こんなにあなたを想っている、このマテリアルなら」
「石になったからこそ、こやつはここにおるのじゃ。……人間に戻ったら、わしのような死にかけの老人には興味も示さんだろうよ」
　ロードの返答はあくまでも冷たい。エレノアナがすべての人を信じている少女ならば、ロードはすべての人を疑っている人間だ。わかりあえるはずもない。しかし、めげることなくエレノアナは言いすがり続けた。
「そんなことはないです！人間に戻っても、マテリアルになっていた頃の記憶は残ります！！ロードさんがマテリアルを大事にしていた気持ちは、伝わっているはずです！！」
「お嬢さんは夢見がちじゃの。ありえんよ、そんなこと。わしの取り得は莫大な資産だけじゃ。取り得のない人間の元からはな、みな立ち去っていく。誰も残らないんじゃ。誰もな」
「そんな悲しいことばかり、言わないでください。誰だって、良いところと悪いところがあります。悪いところばっかり見てたって、その人のことはわからないんです」
「それはおぬしが優しい世界に住んでいるからじゃよ、お嬢さん」
「じゃあ、ロードさんの良いところ、私が見つけられたら信じてくれますか？」
「……ちょっと、エレノアナ？」
　レイラがどこか不安そうに声をあげた。それでもエレノアナは優しく笑う。
「大丈夫ですよ、レイラさん。ロードさん、私、人の良いところ見つけるのはちょっと得意なんです！例えば……そこにいるイクスさんは意外とすぐに考えていることが顔に出るんですよ！嬉しいことも、悲しいことも、つまんないって思ってるときも！」
「え……！？そ、そうかな……？」
　思わず自分の顔に手を当てるイクス。どちらかというと表情に乏しいつもりだったが、そうでもないのだろうか。過去の行動を振り返ってみるが、心当たりがない。だが節々でエレノアナの言動に対する自分の感想が思い出され、もしそれが筒抜けだったとしたらと想像した途端に体感温度が数度上昇した。
「あと、こちらのレイラさんは決めたら一直線です！邪魔をする人は全員蹴散らしちゃいます！！」
　確かに、とイクスは頷く。イクスの銃を開発してくれた時もそうだった。性能チェックの名目で地獄のような射撃演習に問答無用で放り込まれた。周りの戸惑いも制止もすべて振り切って、だ。
　そんなイクスの考えが読まれたかのように重めの肘鉄が脇に入った。ぐえっ、とイクスの体がクの字に折れても肘鉄を入れた張本人であるレイラは、素知らぬ顔でエレノアナに突っ込みをいれる。

「……エレノアナちゃん、それ微妙に褒めてない」
「私が大好きなお二人の、素敵で、良いところです！」
「うーん……ダメねぇ。その笑顔で全部許せちゃうわ」
　屋敷に入って以来、強張っていたレイラの表情がようやく緩んだ。
　ロードは静かにそんな三人のやりとりを見ている。うるさそうに顔をしかめるわけでもなく、だが表情を緩めるわけでもなく。色のない表情でただ目を細めた。エレノアナはそんなロードに優しい声色で話しかけた。
「ね？世界はとっても素敵なんですよ。ちゃんと探せば、幸せはすぐそこに転がっているんです」
「優しい世界じゃの。わしの意見は変わらん。お嬢さんの居る世界が優しいだけじゃ」
「……じゃあ、私が証明してみせます。この世界は、みんな、優しくて暖かいんだって。証明するまで、ここに残ります」
　エレノアナが笑った。今までイクスが見てきたどんなエレノアナの笑顔よりも美しく、そしてどこか切ない、大人びた笑みだった。
　イクスはなんとも言えない気持ちになって、ロードの前へと己も進み出た。
「俺からもお願いします。時間をくれませんか。あなたを説得する時間を」
「……じゃあ私からも。お願いします」
　続けるようにレイラも進み出た。
「エレノアナちゃんがそこまで言うなら、私も、時間がほしい。マテリアルにされた人間を解放したいと言うことだけは二人と同じ気持ちです。だから……ちょっとだけでいいから時間をください」
　赤い目が炎のように燃えている。いつもは軽いノリで振る舞うレイラの、根の深い部分に眠るなにかが現れているような気がイクスにはした。
「……フン。まあ、居たいのならば勝手に居るといい。飯と寝床の世話だけはしてやろう。金だけはあるからの」
　くだらなさそうに呟くロードの声を聞きながらイクスは拳を握った。
　もしイクスがエレノアナと会っていなかったら、ひょっとしたらロードと同じような立場に立っていたのかもしれない。それほどまでに、マテリアルの“音”は確かに乾いた心に染み込んだ。しかしイクスはエレナとノアナに出会った。マテリアルに変わってしまう前の生き生きとした少女たちに心を救い上げられた。
　今でも二度目に聞いた“音”ははっきりと思い出せる。イクスが二度目に触れたマテリアルはエレノアナが転じた姿だ。胸を打たれるほどに美しい“音”は絶望の象徴でもあった。かつて大切な人であった石を抱きしめて、ただ涙を流すことしかできなかったあの時。あんな思いはもうしたくない。誰にもあんな思いをさせてはならない。なんとしてでもマテリアルを解放するよう、ロードを説得しなければとイクスは決意を固めた。

「うーん、どうしたものか……」
　イクスは悩ましげにため息を吐いた。マテリアルを手放すようにロードを説得すると啖呵は切ったものの、良い説得方法などすぐに浮かんでくるはずもない。悩みながらも、ひとまずロードの元に向かうイクスの耳に何か騒いでいる音が飛び込んできた。
　何事かと顔をあげれば、ロードの私室の前でレイラが何やら執事長ともめていた。

「だから！！なんでロードさんと会えないのかな！？」
「“滞在は許可したが会うとは言っていない”とのことで……」
「それは屁理屈ってやつでしょ！！！いーーから、出てきなさーーーい！！！」
　レイラが扉をドンドンと叩く後ろで執事長は止めようか止めまいかとおろおろしている。レイラの肩に乗せようとして、中途半端な位置で固まっている手がもの悲しい。
　どうやらロードは、イクスたちの説得にまともに耳を貸すつもりはないらしい。言葉通り、“居たいのならば勝手に居ろ”ということだ。
　これからの動きが更に悩ましいが、ひとまずイクスは扉にしがみつくレイラをやんわりと引き剥がしにかかった。
「レイラさん。落ち着いて……」
「あっ、イクスくん！聞いてよ、ロードさんが引きこもって出てこないんだよ！！」
　不平不満を漏らすレイラをなだめつつ、さりげなく扉から引き離していくイクス。これではロードの世話をするメイドや執事たちすら部屋を出入りできない。
「聞いてました。でも人の家の扉を壊しにかからないでください。――すみません、レイラさんが……」
「い、いえ……」
　ようやくロードの自室の扉から離れたレイラに執事長は安堵の息を吐いた。レイラはと言うと、まだふてくされている。
「引きこもってちゃ気分も滅入るでしょう。せっかく綺麗な庭があるんだから、散歩にでも出たら、って言いにきただけなのに……会えもしないって、ある？」
「まあまあ……。そういえば、確かに綺麗な庭ですね。誰も通らないのは確かに、ちょっともったいないな……」
　屋敷の窓を振り返ると、美しく整えられた中庭が広がっている。誰かを待っているかのように花々が咲き誇っている。その中の一角、赤いカーペットのように敷き詰められたサルビアの花がひときわ目をひいた。
「ロードさんは、屋敷の中でもあまり出歩かないんですか？」
　すると、執事長は寂しそうに庭の外に目をやった。
「ええ。昔はご子息様や坊ちゃまと山の裏まで散歩に行っておりましたが……最近はすっかり……」
「それは、その、お孫さんが行方不明になってから……」
　イクスは恐る恐る問う。ロードの孫のことは有名な話なのだろう。執事長は驚きもせずに頷いた。
「ご存じでしたか。ええ。坊ちゃまが行方不明になられてからです、ロード様が部屋に閉じこもるようになったのは。体調も優れず、外に出る気がしない、と。そのうち病で足を悪くしてしまい、それからはもう……」
「車いすとかないわけはないよね？それに乗ればいいじゃない」
　レイラの指摘に執事長の表情が曇る。
「それが……孫以外に車いすを押されるのは嫌だと仰って……」
　ロードの意固地さはイクスたちに対してのみのものではないらしい。執事長はロードを思いやるような表情を浮かべていた。部屋から一歩も外に出ない生活では、レイラの言う通り気も滅入ってくるだろう。

「あーーー、もうわがままなおじいちゃんなんだから！！仕方ないなぁ、ちょっとその車いす見せて！」
「え？しかし……」
「いいから！」
　どこへと向かうかも知らないが、執事長の背中を押して進んでいくレイラ。こうなったら彼女は止まらない。だが、彼女の暴走気味の情熱が悪い方に行くことはそうそうないだろう。執事長の助けを求める視線を受け流しながらイクスは二人を見送った。
　――そして数時間も経たないうちに、廊下をモーター音が駆け抜けていった。
　バイクでも通り過ぎたような風がイクスの髪を乱したが、どうにも車いすの形をしていた気がする。パタパタとレイラがモーター音を追いかけてやってきた。
「執事長さーーーん！どうかなーーー！」
「少し早すぎるのではないかとーーーーーーーーー！！！」
　もう一度ブオン、とイクスの横をモーター音が駆け抜ける。やはり車いすの形をしており、執事長が乗り込んで操縦しているようだ。
「じゃあ青いレバー引いて！！減速するから！！！」
　イクスの立っている廊下をもうひと往復しようとした車いすが急激に速度を落として停車する。車いすから放り出されそうになった執事長だったが、ひじ掛け部分を掴んでなんとか耐えていた。冷や汗はかいているが頬は興奮で少し赤くなっている。
「おお！速度も操れるのですね！！！これならば安全にロード様も移動できます！！」
「でしょー！危ない場面で逃げるときは全速力で！普通の移動は減速モードで！誰に押されなくとも一人で動き回れる車いす！どーーだ！これで文句ないでしょ！！」
「ええ！さっそくロード様にお渡ししなくては！！！」
「お願いね！！あ、それ階段も登れるから！」
「さすがレイラ様です！！では、私はこれを届けてまいりますので！」
「いってらっしゃーーい！」
　レイラとイクスに見送られて、車いすのまま廊下を駆け抜けていく執事長。階段を上る際には浮遊もできるようだ。あれならば、どこにでも出入りできるだろう。
　どう考えても全速力モードはロードにとって速すぎる気がするが、隣で執事長に手を振っているレイラがこれ以上なく楽しそうなのでイクスは速度については黙っていることにした。
「……楽しそうですね」
「わかる！？いやー、話してみたら執事長さん、中々話のわかる人でさ！つい、盛り上がっちゃった！！」
　興奮も冷めやらぬ様子のレイラにイクスはため息を吐いた。だが、呆れたポーズをとっているはずが、緩やかに笑みに変わる。こういう、仕方がない人なのだ、レイラは。
「でも、まさかレイラさんに先を越されるとは思いませんでした」
「先を越す、って？」
「部屋ですよ。ロードさんを説得しようと思って、ロードさんの部屋に行ったんですけど……先にレイラさんが居たので驚きました」
　ああ、とレイラは目を細める。切れ目がちな目元が細くなると、ご機嫌な猫のように見えた。
「エレノアナちゃんに頼まれたのよ。ロードさんをなんとか庭まで連れ出せないか、って」
「エレノアナが……？」
「なーんか企んでるみたいね。まっ、あの子に協力しないわけはいかないでしょ？」

企みっていったい何を、と疑問に思った矢先。イクスの鼻先を甘い匂いがかすめた。

自室から出てきたロードは少し疲れたような顔をしていた。
「やたらと勧められて仕方なく出てきてやっただけじゃ……まったく。レイラとやらは一体何をしたのやら」
執事長の説得に根負けした様子で、自走する車いすに乗って部屋を出てきたロード。レイラが改造した車いすに喜んでいる様子はないが、部屋から出てきただけでも大きな一歩だ。それなりに気に入ってくれた証なのではないかと、イクスは嬉しくなった。
「レイラさんはこういうの得意ですから。俺も、レイラさんが開発している現場をはじめて見たときはちょっと興奮しました」
「私は車いすをちょぴーっと使いやすくしただけだよ」
「ちょっと使いやすくしただけで車いすが浮くか！まったく……最近の若者は常識がなっとらん」
「ふっふーん！開発と研究は常識を疑うところから、ってね？」
雑談を交わしながら、イクスとレイラはロードを庭に案内していた。サルビアの花畑の傍で足を止めると、緑髪の少女が軽やかに振り向く。エレノアナだ。その両手には分厚いミトンがはめられている。
「あっ！ロードさん！！今ちょうどお茶の準備ができたところです！」
「ちょうどもなにもおぬしたちが謀ったんじゃろう」
「まあまあ！そう言わずにこっちに来てください！淹れたてのコーヒーは美味しいですよ！クッキーも焼いたので、一緒にどうぞ！」
「昼飯後にクッキーなど食えるか、わしは帰るぞ」
「「まあまあまあ」」
帰りたがるロードの進行方向にイクスとレイラが立ち、帰り道を妨害する。ムッとした顔をするロードだが、強行突破をするつもりまではないらしく大人しくテーブルについた。
白いテーブルクロスの上にかわいらしい花が生けられたテーブルは清楚だが華憐で、とてもエレノアナらしい。
ロードの前にカップを置き、コーヒーを注いだのは屋敷のメイドだった。いつの間にやらエレノアナはメイドを味方にしていたらしく、二人で顔を見合わせて嬉しそうに笑っている。それを見たロードは複雑そうな顔をしたが、すぐに無表情に戻り、コーヒーカップに口をつけた。
「まあまあじゃの」
エレノアナの淹れたコーヒーですらまあまあ、とはどれだけロードの舌は肥えているのだろうか。エレノアナの作戦は失敗だろうか、とイクスが不安になると何故かきゃあ、とメイドがはしゃいだ。
「よかったですね、エレノアナ様！美味しいとおっしゃっております！！」
「ほんとですか！！やったぁ！！！！」
「わしはまあまあと言ったんじゃ」
「ロード様は、美味しくないものは美味しくないとはっきりおっしゃいますから」
「……」

メイドの言葉をロードは肯定しなかったが、否定もしなかった。黙り込み、コーヒーを飲み続ける。ごまかすためか、自然に手が伸びたのか、クッキーをぱくりと口に放り込んだ。そのまま無言で咀嚼し続ける。
「ど、どうでしょうか……」
エレノアナがおずおずと尋ねると、一瞬ロードの手が止まる。しかし何事もなかったかのように口に入ったクッキーを食べ終え、ただ一言だけぽつりとこぼした。
「……まあまあじゃの」
きゃあ、とメイドとエレノアナの嬉しそうな悲鳴があがった。
ロードはむっすりと二枚目のクッキーを食べている。
「えへへ、私、もう見つけちゃいました、ロードさんの素敵なところ！」
「ほう？」
期待もしていない顔でロードはちらりとエレノアナを見やった。つれない態度にめげる素振りすらなくエレノアナは顔を輝かせる。
「ロードさんは素直ではない人です！」
「……」
ロードはそっぽを向いた。だが、コーヒーカップは手放さない辺り、エレノアナの評価も的を外れてはいないのだろう。なるほど、とイクスは感心してしまう。
「エレノアナちゃん、それ、やっぱり褒めてない」
「だって、そこが素敵だと私は思います。ロードさんらしいな、って！」
「そうねぇ……そう、なのかなぁ？」
レイラがエレノアナに説得されかかっていた。あまりにも自信に満ち溢れた様子でエレノアナがロードの良いところだと語るので、イクスもそんな気がしてくる。
エレノアナは得意げに語った。
「涼しい風、花の香り。暖かいお日様に、美味しいコーヒーとお菓子。そして、誰かと過ごす時間。それだけで、胸がポカポカとしてきて、暖かい気持ちになる。ね、世界は素敵でしょう！」
「ふん……わしは鼻が詰まり気味での。おぬしが何を言っているのかよくわからん」
「あーー！さっきコーヒーの匂いを嗅いでました！鼻が詰まってるなんて嘘です！」
「知らん」
「ええーーーっ」
そっぽを向くロードに不服を主張するエレノアナ。喧嘩をしているようにも見えるが、はたから見ている分には微笑ましいやりとりだ。遠慮が取れた気安さはどこか家族のようで。
確かに、外で誰かと食べる食事は暖かい。イクスもエレノアナとレイラの二人と共に囲う食卓は好きだ。いつの間にか、三人揃わないと食べはじめる気にもならないほどに三人で食べる食事が肌に染みついていた。
――そういえば、両親とこんな時間を過ごしたことなんてあったっけ？
ロードとエレノアナを見ていたイクスはふと己の家族を思い出した。イクスの家庭は共働きで、家族三人で食卓を囲む習慣はなかったように思う。それを悲しいとも寂しいとも思ったことはなかった。文句もなく、不服もなく。両親が忙しいのは家計を支えるためで、立派なことだとすら朧げに考えていた。働ける年齢になるなりすぐに職につき、社寮に入ってしまったので実家に居た頃の記憶はもう遠い。

だが、かつてのイクスの人生はどうしようもなく乾いていた。過去の自分と今の自分。どちらかを選べと言われたら、迷わずイクスは今の、エレノアナとレイラと共にある生活を選ぶだろう。
それを、親不孝だと人は言うのだろうか。
何かがイクスの胸の奥でちくりと刺さった気がした。
「エレノアナ、何故おぬしはここまでする？そこまでして、マテリアルを人間に戻すことにこだわるか」
気付くとロードがクッキーを食べ終え、静かにコーヒーをティースプーンでかき混ぜていた。一さじ分だけ入れられたミルクがくるくると回り、カフェオレに変わっていく。カップに半分残った飲み物に、角砂糖も一つだけ。厳めしい見た目だが、案外ロードは甘いものが好きなのかもしれなかった。
「……私もマテリアルになったことがあります」
エレノアナもまた静かな口調で返した。ロードが手を止め、少女を見る。老人の視線を少しもそらさずに受け止めたエレノアナは一つ、頷いた。
「マテリアルになるって、本当に怖いんですよ。体が全然動かなくって、石の中に閉じ込められたみたい。そのうち、意識も曖昧になっていって……いつか、自分が人間だったことも忘れちゃうのかなって。寂しくて、悲しくて……でも、泣いても誰にも聞こえなくって」
それは、はじめて聞くエレノアナの胸中だった。
「もう、このまま石になっちゃうのかな、と思った時に来てくれたのがイクスさんでした。本当に大事に抱きしめて、石になってしまった私を想って泣いてくれた――私を人間だと知っている人がいる。それだけで、私は救われた。なのに、それだけじゃなくて人間にも戻してくれた。レイラさんと一緒に。救われるって、こういうことを言うんだなって。その時、はじめて思った……。
だから、同じ思いをしている人たちを人間に戻したい、という気持ちはあります。今度は、私が誰かのために何かできれば、って」
場は静まり返り、誰もがエレノアナの話に耳を傾けていた。でもね、と少女は続ける。美しい“グリーンフラッシュ”、奇跡の瞳が不思議な色に瞬いた。ノアナの奔放な金色とエレナの清廉な青色が複雑に混ざり合い、美しく調和したエレノアナだけの色だ。
「でも、たぶん、私は……ロードさんがロードさんの悪いところばかり見ているところが、嫌だったんです。マテリアルがどうじゃなくって……ただ、それが、悲しかっただけ。それだけなんです」
「それを人は、お人よしと呼ぶんじゃ、エレノアナ」
「――私の両親は、ちょっと前に亡くなりました」
エレノアナが愛していた人が亡くなったことを思い出し、イクスの胸が痛みに滲む。エレノアナの両親に会ったことなどなくとも、娘の振舞いを見れば善良な人たちであっただろうことはわかる。両親の死を知った時のエレノアナの泣きはらした顔が思い浮かんだ。
「私をマテリアルにしたい人が居て、両親はその人に捕まってしまい……助からなかったそうです。それを知った時、すごい悲しかった。私の両親はとっても仲良しで、お父さんがお母さんを大好きで、お母さんもお父さんが大好きで。そんな二人が私は大好きで、二人も、私を愛してくれていて……大切な日々、だった」
過去形で語られる思い出がどうしようもなく歯がゆい。もう両親がいないことをエレノアナは受け止めているのだ。イクスが思っているよりも、しっかりと。

　エレノアナはふと口元を緩めた。強がったような笑みは切なくて、だが少女を大人びて見せる。
「でも私思ったんです。お別れは、どんな人にも必ず訪れます。亡くならない人なんていないから。私と両親は、それがちょっと早かっただけだって。それは悲しいことだけど……でも、そればっかり見ていたら前に進めないから。悲しいことばかり見ていたら、世界にあふれているこんなにも素敵なものを見落としてしまうから……ね？」
　エレノアナがイクスとレイラに笑いかける。何気ないそんな動作に、何故かイクスは自分の心臓が跳ね上がるのを感じた。トトッ、と軽い動作で駆けてきたエレノアナが片手ずつにイクスとレイラの手を取り、握りしめる。
「私を助けてくれたイクスさんとレイラさんはとっても素敵な人たちです！一緒にいると胸が温かくなって、何をしているわけでもないのに楽しくって。両親とは別れることになってしまったけど……私の世界はこんなにも素敵で、優しい。ううん、誰の世界もほんとは素敵なんです。顔を上げて、見方をちょっと変えないとそれに気付けないだけ。
　だから、ロードさんにも顔を上げてみてほしかったんです。悲しいときは、つい、うつむいてしまうけれど。ちょっと周りを見渡すだけで、世界は悲しいことではないと気付けるから」
　イクスはつられるように、辺りを見回してみる。
　心配そうにロードを見ながら、目元を潤ませた執事長がいた。執事長にハンカチを差し出しながら、優しく微笑んでいるメイドがいた。屋敷の中からも、何人か様子を窺っている気配がした。
　ロードは資産目当ての者しか残らないなどと言っていたが、なんだ。思いやってくれている人がちゃんと居るじゃあないか。
　イクスはレイラと顔を見合わせて破顔した。ロードは変わらずに固い表情を保ち続けていたが、笑うエレノアナを見つめる瞳はどこか困惑しているようにも見えた。

　エレノアナがロードをお茶に招待して以来、なんとなくロードの態度は柔らかくなっていった。マテリアルを手放すことにはまだ了承していないが、自発的に外に出ることも増えた。
　面白いものを見せてやろう。そう言って、ある日ロードはイクスたちを庭に連れ出した。その手には水色に澄んだマテリアルが抱えられている。
「お前たちはマテリアルの力については知っているか？」
　ロードの発言の意図を図りかねてイクスは首をかしげた。
「“音”のことですか？」
「いいや、違う。そうか、やはり知らないか」
「……“音”以外の力が、マテリアルにあるってこと？」
　父がマテリアル開発に関わっていたレイラも知らない話らしい。戸惑うイクスたちにロードは頷き、手元のマテリアルに話しかけた。
「ほれ、出ておいで」
　誰かに話しかけるような、優しい声だった。応えるように水飛沫の音がした。あ、とエレノアナが声をあげる。
「今……！！」
「「え？」」

何事かとイクスとレイラが目を見張っていると、マテリアルが淡い光に包まれた。水のしゃぼんが空中に引きずり出され、ふわふわとその場を漂う。それは徐々に魚の形に変わり、悠々と空を泳ぎ回った。
唖然とするイクスたちの前で水魚がくるりと宙返りをし、サルビアの花畑に飛び込む。赤い花の海の中を楽しそうに半透明の魚が躍った。小さな水しぶきがあちこちで飛び散り、花びらを濡らしている。
「え、ええ……！？今、マテリアルから魚が……？」
イクスが驚きの声をあげ、レイラが言葉を失っているのを見てロードは口元を緩めた。にやりと意地の悪い笑みが老人の顔にのる。
「不思議じゃろう。わしもはじめて見たときは大層驚いた」
「ふふふ、とっても喜んでいますね！お外が好きみたいです」
エレノアナがあっさりと空飛ぶ魚を受け入れた。花畑に隠れた魚に声をかけ、呼び寄せたりしてさっそく遊んでいる。一度マテリアルになったことのある者としては驚くことではないらしい。
「こやつは特にこの庭がお気に入りでの。まだ足が動いていた時はたまに連れていってやっていたんじゃ。こうやって、外に出すのも久しぶりじゃの……」
応えるようにマテリアルがロードの側を泳ぎ回った。ロードが伸ばした指先にちょんと鼻先を触れさせ、また花畑に戻る。困ったように眉尻を下げて、少しばかり濡れた指先をロードは見つめた。
「この子、意思があるの？」
レイラもなんとも言えない顔を浮かべていた。微笑ましいものを見るような顔だが、目が困惑に揺れている。
「さての。こやつは喋らんからな」
「もしかして、マテリアルの元になった人の意思で動いてるんじゃ――」
「そうだと思いますよ？」
妙に自信のある様子でエレノアナが答えた。地面に座り込んで、花畑に向かって手を広げている。
こっちですよー、と気の抜けるような声でエレノアナが言った途端、勢いよく水魚が花畑から飛び出してきた。エレノアナの手のひらに当たり、細かな水しぶきがあがる。きゃあ！と嬉しそうに少女が笑った。魚の方もエレノアナを気に入った様子でパタパタとヒレを振る。マテリアルとエレノアナの間で意思疏通が成り立っているようだ。
「もしかして……エレノアナはそのマテリアルと会話ができるのか？」
イクスが戸惑いながら訪ねる。マテリアルは元々人間で、だから意思を持っていてもおかしい話ではない。でも普通マテリアルは動かなくて、だから、えっと……？
混乱しているイクスを構うことなく、エレノアナは笑って頷いた。
「前にマテリアルになったからなんでしょうか？この子の声が聞こえるんです。今度は端から泳いでくるから見てて、って今は言ってます」
エレノアナの言葉を肯定するように水魚が花畑の奥の方へと泳いでいった。エレノアナがまた手を構えると、勢いをつけて戻ってくる。エレノアナの手のひらに水魚のヒレがハイタッチするようにぶつかり、派手な水飛沫があがる。エレノアナの顔にも水がかかり、きゃあ！！とまた楽しそうに悲鳴をあげた。
「ね！このお花畑が大好きみたいです」

「マテリアルの声が聞こえるエレノアナちゃんに、水の写し身を作るマテリアル……。マテリアルについて、私が知らないこともたくさんあるのね……」
「レイラさん？」
「ううん。なんでもない。あ、ねぇ、ロードおじいちゃん」
「なんじゃ」
　いつの間にやらレイラは気安い呼び方でロードを呼ぶようになった。ロードも気にしていない様子だ。
「ここ同じ花がたくさん植えてあるけど、何かあるの？」
「……」
「ロードおじいちゃん？」
　何故かロードは急に黙りこんだ。表情に暗いものはない。どちらかというと気まずそうだ。答えないロードの代わりに、控えていた執事長がこっそりと切り出す。
「こちらは、ロード様がタヌタ様……孫のために用意したものでして」
　花畑を見渡すイクス。赤い花は視界の端までずっと続いている。孫へのプレゼントにしては随分と大がかりだ。
「これを全部ですか？」
「ええ。なんでも散歩帰りに見つけたサルビアをタヌタ様がとても気に入り……庭いっぱいにほしいと言い出した次の日には庭の大改造が始まりまして」
「余計なことは言わんでいいわい」
　ロードはそっぽを向いてぼそりと呟いた。相変わらず素直ではないらしい。
「素敵なおじいちゃんですね！」
「バカね、エレノアナちゃん。こういうの、甘やかしって言うのよ。でも、男の子で花を気に入るなんて珍しいわね」
「蜜じゃないですか？」
「「蜜？」」
　察したようなエレノアナの発言にイクスとレイラが声を揃えて尋ね返す。
「サルビアの花の蜜です。摘んだ花から直接吸えるんですよ。私もお父さんに教えてもらってからしばらくは毎日食べてました。ちょっと拾い食いをしているみたいで、楽しくって……お腹壊してからはやめちゃいましたけど……」
　話を聞いているのか、マテリアルから生まれた魚がエレノアナの顔の横で泳ぎ回る。ねー、とエレノアナが話しかけると喜ぶようにくるくると跳ね回った。
　そんな少女と一匹を見ながら執事長は穏やかに笑う。
「サルビアの蜜は食べ過ぎると毒ですからね。タヌタ様がお腹を壊したときはロード様も大慌てで……何度、ただ蜜を食べ過ぎただけだと言っても、医者はまだか、タヌタが死んでしまうと言い張って」
「あれだけ苦しそうにされたら誰でも慌てるわい。喜ぶと思って気軽に蜜の話をしなければよかったと心底後悔させられたよ……」
「なんだ、おじいちゃんも拾い食いしてたんじゃん」
「……我が家代々の慣わしじゃ」
　どうやらサルビアの花の蜜はロードの家族に代々伝わるおやつらしい。

「ええ、幼い頃のロード様もやはり蜜の食べ過ぎでお腹を壊してしまい……当時の当主様、ロード様のお父上とお母上が大慌てで医者を呼んでおりました。血は争えないものだとその時ばかりは思いましたよ」
「……息子の時は気をつけとったんじゃがの」
「そういえば、タヌタ様が蜜を食べ過ぎたあの時ばかりは、ご子息様も駆けつけられて……」
　ロードは自分の息子の話に、嫌なことを聞いたとばかりに口を曲げた。
「ふん。いつも遊び歩いているくせに都合の良いときだけ父親面をしおる。あの時はたまたま近くにおっただけじゃ。その前にタヌタが風邪を引いたときは連絡も取れなかったんじゃぞ。落ち着いた頃に慌てた風で帰ってきおって。聞けば友達と旅行に行ってたから知らなかったと……。だと言うのに、タヌタは健気に父が来てくれただけでも嬉しいと言ってな……」
　ロードは込み上げた何かを耐えるように目を閉じた。憂い気に花畑を見つめるロードの横顔は、マテリアルの“音”に耳を傾けて涙を流した時のものによく似ていた。
　誰も何も言えないでいると、水魚がロードの元まで泳いでいく。そしてまるで慰めるかのようにロードの周りを泳いだ。微かにマテリアルの“音”が鳴っていた。暖かく、優しく。そしてどこか切ない“音”だった。
　すまんの、とロードが誰に対してでもなく呟いた。
「変なことを聞かせた。忘れてくれ。……お前は、優しい子じゃの」
　ロードはぎこちなく笑い、宙を泳ぐ魚を指先でつつく。くるりくるりと器用に水魚が指の周りを泳いだ。
「水のお魚さん」
　エレノアナが水魚に優しく手を伸ばす。
「ロードさんが心配なんですね」
「……ふん、心配されるほどヤワではないわ」
「お魚さん教えてください、あなたのお名前は――あっ」
　ロードが調子を取り戻して安心したからだろうか。魚は自らマテリアルの中に戻っていった。本物の水面であるかのようにマテリアルの表面に水の波紋が浮かび、やがて何事もなかったかのように静まった。

　イクスがロードに釣りに誘われたのは次の日のことだ。広大な裏山には釣りができる湖もあるらしい。穏やかな昼下がり、男二人で釣り糸を垂らしてのんびりとした時間を過ごす。釣り竿を握るロードの腕は相変わらず枯れ木のように細いが、ベストを着て狩猟用のハンティングキャップをかぶっていると幾分か若々しく見える。
「良い子じゃの」
　唐突にロードがこぼした一言にイクスは目を瞬かせた。ロードは視線を水面に向けたまま、しみじみと言う。
「エレノアナじゃよ。あの子は性根がいい。ご両親のことが本当に悔やまれる……」
「……そうですね。彼女には幸せな世界であってほしい。無理をしていないかだけが心配で」
　エレノアナのような優しくて、清廉な少女にどうして不幸が訪れてしまうのだろうか。憂うイクスの後頭部をロードが小突いた。
「！？」

「ばかもの。あの子が前を向こうとしているのに、おぬしがそんな暗い顔をしてどうする。しゃきっとせい」
「はい……」
　ロードがはじめた話題のはずだったが、と解せない気持ちを抱えながらも渋々と頷くイクス。
「親は、やはり大事じゃの。親の育て方で子の性格は変わる。いい親に育てられればいい子どもに、悪い親に育てられれば悪い子どもになる」
「それは……子どもの性格にもよるんじゃないでしょうか？」
「さあな。だがわしは少なくともいい親ではなかった」
　思わずロードの顔を見るイクス。ロードの表情はいつもと変わらない。だがいつも通りの無表情が、どこか強がっているようにイクスには見えた。
「あやつも、生まれたばかりの頃は可愛い子じゃった」
　ロードが孫と引き離されるきっかけを作った一人息子のことだろう。
「何をしていてもニコニコしおってのぉ。何が楽しいのかしらんが、ずーっと笑っておる。森に遊びに連れていってやるとパパ、パパと呼びながら石だの、虫だの、どうでもいいようなものを拾って見せつけてくる。行儀は良くないが、あまりにも楽しそうにするから叱れもせずに……あれは困った……」
　困った、と言いながらもロードの口調は穏やかだった。
「湖に落ちると危ないからついてくるなと言っておるのに、釣りにも勝手についてきおる。ニコニコしながらあれはなんだ、これはなんだと聞いてくるのでのぉ。わしもつい熱心に教えてしまって、気付いたら週末はいつもここで一緒に釣りしておった。あやつの方がいつの間にか上達しての……パパ、これも釣れたよと大物を見せてくるもんじゃから、誇らしいような、負けて口惜しいような……あれは不思議な気分じゃのぉ……お前さんはそんな経験はないじゃろう」
「……はい。自慢の、ご子息だったんですね」
「昔はの。それが、いつの間にやらでかくなって、わしの言うことなぞてんで聞きやせん。ニコニコしてるのは変わらんが、フラフラ、フラフラしおって……釣りも気付いたらあやつはやめとった。買ってやった釣り竿もどこへやったことやら。勉強もせず、働きもせず、息子の面倒も見ない。ただ、若い女の尻を追いかけ回すことしかせんで」
　ロードは険しげな目つきで湖面を睨みつけた。そこには釣り竿につながる浮きが風の動きに合わせて揺れているだけで、何もない。
「しまいには離婚騒動なぞ、体面の悪いことをしでかしおって。どうしても若い女が良いというから走り回って、あやつと結婚してくれるような気立ての良い女性を見つけて、向こうのご両親に頭まで下げて、やっと漕ぎつけた話じゃったんじゃぞ。歳が一回りも離れていたから相手には相当渋られたんじゃ。それを、あやつは数年経ったら今度は二回りも年の離れた女と遊び回って……。今からでもいいから関係を清算して、相手方に謝ってこいと言っても、やっぱり若い子じゃないと嫌だ、など訳のわからんことを言って……ちっとも言うことを聞かんところだけはずーーーっと変わらん。
　謝りに行かないなら出ていけと言ったら、それだけは素直に聞いて本当に出ていきおった。それから、若い女の元ばかりふらふら遊び歩いていての……ちっともここには顔を見せん……あのどら息子が……」

「ロードさん……」
「わしは失敗したんじゃよ。ちっとばかりアホウだったが、良い子だったあやつを……悪い子どもに育ててしもうた」
　イクスは何も言えずに口をつぐんだ。何といえばいいか、わからなかったからだ。
「孫のタヌタだけが、わしの希望じゃった。タヌタはあやつの子どもの頃そっくりの、明るくて可愛い子での。もしかしたらやり直せるのではないかと思ったんじゃ。息子で失敗した分、今度こそ立派に育ててやるんだとな……だが、結局、あのばかものがやらかしたせいで離ればなれになってしもうた」
「行方不明の件……ですね」
「聞いておったか。そうじゃ。どれだけ探しても、タヌタは見つからんかった。あちこちの手を借りたが、足取りすら掴めん――わしは天運にすら愛想をつかされたんじゃ」
「息子さん、タヌタのお父さんはなんて？」
「何も。わしのところには顔も見せんのでの」
　釣り糸を一度引き上げたロードが、やけっぱちのように荒い動作で釣り糸を投げなおす。浮きが大きく沈みこみ、近くにいた魚が驚いて跳ねた。
「お嬢さん、エレノアナはああ言ったがの。わしは、人間がやっぱり嫌いじゃ。物の方がいい。物には感情がない。喋らん。変わらん。傷付かん。……居なくならん。わしがどう扱おうと、それを受け入れるだけじゃ。人間とは大違いじゃな」
「マテリアルは元になった人間の性質を反映します。人間に戻っても変わりませんよ、きっと。あの優しくて穏やかな“音”の持ち主は」
「人間は変わる」
　ロードがイクスの方を振り向く。思いのほか強い眼差しに見つめられ、イクスは息を飲んだ。
「変わるんじゃよ、人間は。おぬしはまだそれを知らんだけじゃ。変わらん人間なぞおらん。おぬしの仲間だっていつか変わるぞ。良い方向か、悪い方向かは知らんがな」
「……俺は、エレノアナとレイラを信じています。二人が悪い方向に変わることなんて、ありえない」
　ややムっとしながらイクスは言い返した。エレノアナの純真さや、レイラの真っ直ぐな心を否定されたように感じたからだ。あの二人に限って、悪いことをするようになるとは思えない。
「みんなそう言うんじゃよ。だが、変わるものは変わる。そして悪い方に変わった時に、己を責めるんじゃ。もっとできることはあったはずなのに、自分のせいだとな。……無意味な話じゃ。いくら後悔しても、時は戻らんと言うのにな……」
「……」
「わしは人間に疲れてしもうた」
「それは……」
「どうせ、わしの寿命はそう残っておらん。それまでは、あのマテリアルを傍に置かせてくれ。わしが死んだ後はおぬしらが人間に戻してやればいい」
　つれない口調で言うロードに、イクスは急に腹が立った。エレノアナがあれほど頑張っているのに、何一つ伝わっていない。前を向いて、今あるものを大事にしてほしいと彼女が言って

いるのに、死んだ後がどうのこうのと肝心のロードにあっさりと語られて、イクスはやるせない気持ちが沸き上がった。
「そんなこと、言わないでください」
　イクスはロードの肩を掴み、強く言い放った。
「物の方がいいだなんて、人間に疲れたなんて、それは……マテリアルから人間に戻ったエレノアナへの侮辱です。撤回してください。
　俺は、人間のエレノアナの方がいい。喋らない、変わらない、傷付かないエレノアナより、目の前に居て、喋って、怒って、笑って、涙を流すエレノアナの方がいい。あなたにコーヒーを淹れて、話しかけて、両親が亡くなったことに傷付きながらも前を向こうとしているエレノアナと一緒に居たい」
　語る内に、イクスの中であの絶望が思い出された。マテリアルになってしまったエレノアナを抱えた時の、世界のすべてを失ってしまったかのような悲しみは確かに二度と味わいたいものではない。だが、だからと言って、エレノアナが石のままだったら二度と傷付かずに済むとも思わない。人間だからいいのだ。
　だからこそ、二度とあんなことにならないように彼女を守り抜くとイクスは誓ったはずだ。
「マテリアルになってしまえば、一緒にコーヒーを飲むことだってできなくなるんです。あなたは、それでももう構わないって言うんですか」
「構うよ。あの子がマテリアルになって、わしも傷付かんとは言えん」
「————え？」
「……だから、物の方がよかったんじゃ」
　ロードは寂しげに笑った。
「それは、どういう……」
「わしは——」
　何事かを言おうとしたロードの言葉が途切れた。不思議に思って隣を見ると、ロードが目を閉じて黙りこんでいる。
「ロードさん？」
　返事はない。
　イクスが遠慮がちに揺さぶっても反応はなく、沈黙している。じっと車いすに座っているロードは眠っているか、死んでいるかのように見えた。
「ロードさん……？どうしたんですか……？」
　イクスが恐る恐る呼吸を確かめようとすると、ロードの肩に体がぶつかる。ロードの手に握られていた釣竿が湖に滑り落ちた。
　車イスから崩れ落ちそうな老人を抱き抱えたイクスは、ロードの顔色の悪さに驚いた。帽子の影に隠れていた目には濃い隈が浮かんでおり、唇も青く色あせている。
　あまりにも元気そうにしていたものだから忘れていたロードの病のことが、急に思い出された。ロードに残された時間が尽きかけようとしている気配があった。
「ロードさん！しっかりしてください、ロードさん！——くそっ」
　イクスは急いでロードを連れて屋敷に戻った。

　ロードはその日の夕方まで眠り続けた。目覚めた後もどこかぼうっとした目つきで天井を眺めている。
「ごめんなさい……っ、私が無理に外に連れ出したから……っ！」

メイドと共に付きっきりで看病していたエレノアナが必死に謝る。
後悔の表情で頭を下げるエレノアナに、ゆっくりとロードの手が伸ばされた。その手は尋常でないほどに震えていた。うまく指先の制御が効かないらしい。
「エレノアナ、気に病むな……どうせ、もう一月と持たんと医者には言われておったんじゃ」
会った時よりも数十年は老け込んだような顔。更に細くなった手首。だと言うのに、声だけは変わらずに厳めしい。
「病に気付いた時には遅かった……治療しても治ることはないと言われたよ。だから、入院は断ったんじゃ。最期までこの屋敷に居たかったからの……」
ロードは笑うつもりで息を細く吐き出した。それさえもロードの喉は耐えきれないかのように、激しい咳き込む。
「ロード様、今お水を……」
出ていこうとしたメイドをロードが手で制す。
「残された自由な時間を、部屋で過ごすのでは入院するのと変わらんと……屋敷の者には散々文句を言われた。だがわしは部屋を出る勇気がなかった……。部屋を出ると、昔のことを思い出してしまってな。あのバカ息子のことも、タヌタのことも……。それを……エレノアナ、レイラ、イクス。おぬしらが連れ出してくれたんじゃ。おかげで、随分と色々なことを思い出したよ」
この屋敷には思い出が多すぎる。ロードは懐かしむように目を閉じた。ロードさん、とイクスが慌てて声をかける。そのまま息を引き取ってしまいそうに見えたからだ。
「大丈夫じゃ。少し……眠くての。老いぼれるとダメじゃのお……体のあちこちにガタが来る」
ロードの瞳はそのまま閉じられた。沈黙が落ちる。誰も、何も言うことができなかった。
お願い、と掠れたエレノアナの声が空しく響く。その小さな声は、確かにロードに届いたらしい。ロードはうっすらと目を開き、眩しそうにエレノアナの方を見た。
震えるエレノアナの手を握り、大丈夫、大丈夫と宥めるように囁いた。
「そんな顔をするな。おぬしの言ったことじゃ。誰にでも別れはある。わしは孫の顔まで見れて、しぶとく生きた方じゃよ」
「でも……っ！！」
「看取る人間がいるだけ、幸せなもんじゃの……わしが死んだらマテリアルはおぬしらにやる。変に遠慮する必要はない……頼む、あのマテリアルはおぬしらが人間に戻してやってくれ」
「そんなことを言わないでください……お願いだから……っ」
「タヌタは……」
ぼんやりとロードは呟いた。
目は遠く、遥か昔の記憶を辿っている。目の前にイクスたちが居ることさえも忘れてしまった様子で、つとつとと語る。
「タヌタには、大きくなったらおぬしみたいな優しい子になってほしいのぉ……。わしは、優しい子を育てられんかった。だからタヌタも、わしがいない方が良いと思ったんじゃ……」
「そんなことを言わないでください！！！！タヌタさんだって、大好きなおじいちゃんに会いたいはずです！！」

「エレノアナ、おぬしはやはりお人好しじゃの。今更、あやつに会わせる顔もないと言うのに……」
　ロードの笑いは弱々しい。だがイクスたちがはじめてみるような、愉快そうな笑顔だった。
「だが……タヌタがわしに会いたいと言うか……そうだと、嬉しいの」
「言います！絶対言います！！だから、お願い……っ」
「俺たちが見つけます」
　それはイクスの口からついて出た。当てがあるわけじゃなかった。でもそう言わなくてはならないと思ったから、イクスは言った。
「タヌタは俺たちが必ず見つけて、ここまで連れてきます。だから、それまで待っていてください」
「ほぉ……」
　ロードのうっすら開いた目に面白がるような光が宿った。
「わしは隈なく探したぞ……町中、国中……金も人も使った……だが、見つからんかった。それを、おぬしたちが見つけられると？」
「はい。見つけます」
　イクスは迷わずに頷いた。
「そうか……お前たちにはできるか……なら、もう少し頑張らんとのぉ」
　ロードはそう言って静かに目を閉じ、眠りについた。再び部屋に沈黙が落ちる。耳を澄ませてもロードの吐息はほとんど聞こえない。
　イクスたちに残された時間はあまりにも少なかった。

　急いでタヌタの行方を探しに街に降りようとするレイラとイクスに、恐る恐るエレノアナが切り出した。
「私……ここに残っても良いですか？」
　体調の悪いロードが気にかかるらしい。エレノアナらしい理由だ。レイラとイクスが快諾すると、少女はほっとしたように笑った。
　かくしてイクスとレイラの二人は街に降り、ロードの孫、タヌタの行方を必死に探した。しかしロードが手を尽くして調べたが何も出てこなかったと言っただけはある。行方不明になった場所すらもわからないまま時だけが過ぎた。
「あーーー、もう！時間がないってのに！！なんでこんなにも情報がないのよ！」
　レイラが大きなため息を吐いてベンチに倒れこむ。町中を聞き込み回り、イクスも足が少し疲れていた。同じようにベンチに座り込み、息を吐く。
「聞き込みに行けるところはたぶん全部回りましたよね……。でも、妙だな……これだけ聞き回って、街を出た姿すら誰も見てないなんて……」
　人の行き交いが激しい街とは言え、ロードの義理の娘と孫なら、顔を知っている人もそれなりに居ただろう。だと言うのに、目撃情報があまりにも少ない。
「この街を出る前に攫われたって言うの？でもさすがにこの街に居たらロードさんも見つけられたんじゃない？あちこちひっくり返して大捜索だったみたいじゃない」
「ですよね……」
　イクスもため息を吐く。手がかりがないままで気が焦る。残された時間がどれだけあるかわからないが、少ないことだけは確かだ。

　気が滅入りはじめたレイラとイクスに飄々とした声がかかった。
「君たち、ボクの恋人を見なかったかい？」
　誰だろうかと、イクスが声の主に向き直る前にペラペラとその男は喋りだした。
「前の前の恋人と、その人との間のボクの子どもが行方不明になってね。あれ、前の前の前だっけ？まあ、いっか。ともかく、居なくなっちゃったんだよ」
「そ、そうですか……」
　色々と突っ込みたいところはあるが、とりあえず、イクスは目の前の男に子どもがいることに驚いた。突如現れたその男は洒落たアクセサリーを手首や首元にいくつも光らせ、所帯を持っているようにはあまり見えなかった。指に無数の指輪をつけていたが、両手の薬指だけは飾り気がない。背中にかけているのは毛皮のコートだ。イクスにはよくわからないが、たぶん、高いものだろう。
「昔、そんなわけで恋人とその子どもを失ったわけなんだけど。そしたらこの前……一昨日くらいかなぁ。今の恋人も居なくなっちゃってね！もしかしたら、同じやつの仕業かもしれないってボクは思って。
　この街、昔からよく女の子や小さい子どもが行方不明になるんだ。大きい街だから、警察には家出かなんかで処理されちゃうんだけど。誰かがこわーい目的のために人を攫って実験台にしてる、なんて噂もあってね」
　思わずレイラとイクスは顔を見合わせる。思いがけず、有力な情報を得られるかもしれない。
　イクスたちの注意を引けたことに満足した優男は、へにょりと笑って一枚の紙をひらひらとさせた。
「だから調べてみちゃったんだよね」
　イクスに渡された紙は地図のようだった。中央にあるのがこの街だろう。北側にロードの屋敷や山々が書き込まれており、西に少し行ったところに赤いバッテンがついていた。
「そこにね、怪しい施設があるんだ。ね、お願いだよ。君たち強そうだし、ボクの代わりに見てきてくれない？」
「……自分じゃ行かないの？」
「おや、よく見ると赤い髪のあなた、綺麗なお嬢さんじゃないか！よかったらボクとお茶でもどう？」
　慣れた手つきでレイラの手を取ろうとしたら男をイクスが遮った。
「それが俺たちに声をかけた目的ですか？」
「おっと、ごめん。あまりにも綺麗な人だったからつい！でも、今はそういう話じゃなかったね。街外れの怪しい施設にボクが行かないのかって話だった。あのね、自慢じゃないけどボクは弱いんだ！行って、ほんとに危ないところだったら大変だろう？」
「ホントに自慢じゃないわよ、それ」
　不審者を見る目でレイラが怪しげな男を観察していた。信じていいものだろうかとイクスも悩む。
「どうしてこれを、俺たちに？」
「どうして？」
　思っても見ない質問をされた、というような顔を男がした。しばらく真剣に考え込むような動きをするが、どうにも軽薄さの方が目立つ。
「うーん、そうだな。君たちが行方不明の子どもを探してるって聞いたからさ。もしかしたらボクと同じ目的かなって。そしたらボクより強くて頼りになりそうな人たちじゃないか！

　見てくるだけでいいんだ。ちょっとだけだから、ね？……ね？？よし、じゃ、任せたよ！」
　イクスたちの返事も聞かず、男は地図だけ押し付けて颯爽と去っていった。残された二人は困惑の表情を浮かべる。
「任せたって言われてもな……」
「でも他に手がかりがないのも本音ね。行ってみちゃう？」
「それ以外、ないか……」
　怪しげな男から渡された怪しげな地図。信じてもいいものか迷うところだが、それ以外に手がかりもない。イクスとレイラは地図に書かれた場所にき決めた。

街の西には滅多に人が立ち入らない森が広がっている。ロードの義理の娘とその子どもが行方不明になった時にはもちろんここにも捜索の手が入った。しかし捜索当時には誰も居なかったと言う。今更こんなところを調べて何が出てくるのだろうか。イクスとレイラは半信半疑で森の奥へと向かっていた。
「怪しい施設って……たぶんあれよね」
森が途中で途切れ、現れた黒塗りの壁をレイラが指さす。すでに廃棄された建物らしく、入り口は鎖で施錠されていた。人の気配はないが、最近まで手入れはされていたようで外壁や周りの敷地は整っている。
「たぶんそうだと思います。あれは……、っと」
イクスは自分の足が何かを蹴ったことに気付いた。金属製のプレートだ。背面が少し錆びている。何とはなしにそのプレートを拾い、ひっくり返したイクスは驚いた。
「レイラさん！これ……」
「え？あ、これって！」
プレートの表面には飾り気のない文字で“ジェノサイド社所有地につき立ち入り禁止”と書かれている。マテリアルを生産していたジェノサイド社の関連施設だったようだ。なるほど、とイクスは呟いた。
「タヌタとその母親の捜索をした時、ここはしっかり調べなかったんじゃないでしょうか」
「ありえるねえ。捜索隊に調べさせたことにして、誰もいなかったってロードさんに報告させるくらい、ジェノサイド社ならやるだろうね」
「どうしますか？あれくらいの鍵なら壊せます。表に人はいないようですが……」
「そうだね……一応、裏から回らない？きっと裏口とかあるでしょ」
「わかりました」
侵入経路を確認しながら二人は手早く銃を構えた。戦闘に慣れた者特有の勘のようなものがイクスに荒事の気配を伝えていた。ここにエレノアナが居なくて良かった、とイクスは安堵する。危険な目には合わせたくはない。
「ねえイクスくん」
「はい」
「エレノアナちゃん、連れてこなくて良かったわ」
「！」
イクスの考えを読んだようなエレノアナの発言にイクスは驚く。
「イクスくん？」
「いえ……ちょうど、俺も同じことを考えていたところだったので」
驚きはしたが、悪い気はしなかった。
小声でそんなことを囁きあいながら、裏口を見つける二人。警戒しつつイクスが金属の扉に手を伸ばす。取っ手に手をかけてゆっくりと扉を押すと、あっさりと裏口が開く。薄暗い室内灯が黒い床を照らしていた。
ぽつりとレイラがこぼした。
「……灯りがついてる」
「人が出入りしてるってことですか……？」
「たぶんね……」
ジェノサイド社の施設の近くの街で出ている行方不明者たち。イクスたちに地図を渡したあの軽薄な男の恋人は確か、一昨日居なくなったと言ってはなかっただろうか。

　イクスは知らずのうちに顔を強張らせていた。
「この施設、まだ動いてるのかも」
　レイラも張りつめた表情で施設の裏口を睨みつけた。
　数週間前になくなったはずのジェノサイド社の施設が動いている。その事実がイクスに嫌な想像をさせた。

　施設の中は薄暗く、ぼんやりと照らされる黒い廊下が延々と続いていた。いくつもある曲がり角はどれも似たような形をしていて、気を抜けば方向感覚を失ってしまいそうだった。イクスとレイラは人の気配を慎重に探りながら、施設の中心地と思われる方向へ向かっていた。
　ふと、イクスが足を止める。吸った空気に漂った妙な臭いにむせそうになり、慌てて服の袖で口元を覆った。悪臭というほどではない。だが、吸う度に舌先がざらつくような、汚染された空気の気配があった。
「イクスくん。大丈夫。ただのタバコだと思う」
　小声でレイラが囁いた。確かにそう言われてみれば、警備員時代に休憩室の近くを通る度に鼻をかすめた臭いに似ている。
　イクスと同じようにむせそうなのか、レイラも首元の襟で口元を覆い、眉をひそめていた。
　耳を澄ませると誰かの話し声が聞こえてきた。タバコの煙もそちらから漂ってきている。
延々と同じ風景が続く廊下の一角だけを長方形に切り取ったように、一枚だけ半開きの扉があった。イクスたちは警戒を強めながら、扉の傍で耳を傾ける。
　扉の向こうでは二人の男が話し合っているようだった。
「あの娘はまだ見つからないのか」
「へぇ、それがまだでして……。ここいらに来てるのは確かみたいなんですけどねぇ」
　前者の男は苛立たしげに、後者の男は言葉ではへりくだりながらも、相手を心底見下したような声色で言葉を交わしていた。男たちの声の他に時折、小さな咳がいくつか聞こえた。喋っている二人の他にも数人が部屋にいるらしい。喋っているうちの片方の粗雑な口調にどうにも聞き覚えがあるような気がして、イクスは眉をひそめた。
「この役立たずめが。いつまでじゃじゃ馬娘に手を焼いている気だ」
「おおっと、あのグズが見つかれば俺も晴れて幹部入りする約束ですぜ、兄さん。今のうちに優しくしてくれても罰は当たらないんじゃないですかねぇ……？」
「――ちっ。お前のような者にそんな約束をするとは、あの方も何をお考えなのか……」
「はは！実力ってやつですよ！いやー、言ってやったんですよ、俺。あのグズを生かしておいてやったのも、あの方に捧げるためです、あのお方に忠誠を誓っているからです、ってね！そしたらいたく感動してくれましてねぇ。おまえはわが社一の有望株だ、なんて言われちまって。フィランダーはもうダメだ、あいつの後釜はお前しかいない、って！いやぁ、あの方も褒め上手で困りますなぁ」
「フン……あのお方に会ったこともないくせに良く言う……あの娘を連れてきたのがお前でさえなければ、お前は誰の目にも止まらんような存在だろう、ゲイス……」
　ゲイスと呼ばれた男は、相手の言葉が聞こえていないかのようにゲラゲラと笑っていた。酒焼けした声が裏返った、耳障りな笑い声だ。やはり、どうにも聞き覚えがある。
　気になったイクスは慎重に部屋の中を覗き込んだ。顔をだした途端、部屋に充満するタバコの臭いにむせそうになり、慌てて口元を覆った。ついで驚きで声をあげそうになったので、それも口元を覆って防ぐ。

ロードの屋敷に行く前に絡んできた、機動隊のような服を着た男がそこに居た。ジェノサイド社の治安部隊を名乗った時と同じ、黒い警備服と黒いヘルメットをかぶり、タバコを吹かせている。こちらがゲイスと呼ばれた方だろう。
もう一人は見知らぬ男だ。黒のスーツにネクタイを首元までしっかりとしめたスマートな見た目はどこかの会社の幹部のように見えた。
部屋の奥には巨大なスクリーンが設置されており、そこに一人の少女の写真が映し出されていた。意思が薄弱そうな笑みを浮かべた、白髪の少女。ゲイスがイクスに突きつけた写真と同じものだ。
何より、イクスを驚かせたのがゲイスの足元だ。そこには数人の女子どもが縛られて床に転がされていた。誰もがぐったりしており、ゲイスのタバコの煙を吸っては弱々しくむせこんでいる。中には十にも満たないような子どもも混じっていて、息をするのも苦しそうにしていた。あまりにもぞんざいな扱われ方にイクスは怒りを抱く。
——倒すか？
半開きの扉から銃口を差し込み、下卑た笑いをあげているゲイスの肩を狙う。男たちはどちらもイクスたちの存在に気付いておらず、殺気に反応する様子もない。一人は倒せるだろう。だが、もう一人はどうだろうか。もう一人の男は部屋の奥の方で立っており、入り口からは狙えない。
隣で同じ光景を見ているレイラに目線で確認を取るイクス。レイラは今にもゲイスらを殺してかかりそうな表情で部屋の中を睨みつけていた。銃を持つ手が震えている。だが、イクスの視線を受けると激情を抑え込んだ表情で、悔しげに首を振った。無理と言う判断だ。
たとえばイクスがゲイスを撃ち、それと同時にレイラが部屋の中に入り、もう一人を撃つ。その一連の動作を終える前に、もし床に転がる女子どもが人質に取られてしまえばそこで終わりだ。そのリスクを今は負えない。イクスも歯がゆい思いをしながら銃口を下げた。
「心配せずとも大丈夫ですよ。もう手は打ったんでね。人もたんまり向かわせてある。もうあいつは終わったようなもんでさぁ。俺に任せときゃ、ちょちょいのちょいよ」
「そう言って、毎回失敗しているのは誰だ」
「俺は失敗してない！！あいつらが、グズ一人捕まえられないあの役立たずどもが失敗してんだ！」
「フン……」
急に怒り出したゲイスにスーツの男はくだらなさそうに鼻を鳴らした。
「なら次はお前が出ろ。お前があの娘を捕まえろ」
「はあ。俺がなんで前に出なきゃいけないんで？俺は未来の幹部様だってのに！」
「お前に任せれば完璧にこなせるのだろう」
「そうは言いましたけどねぇ……なんで俺がそんなこと」
「言ったからには、その完璧を見せてみろ。あの方への忠誠の証としてな」
それ以上の語り合う意欲をなくしたように、冷たくスーツの男は言い放った。会話が終わる気配に、部屋の様子を窺っていたイクスは我に返る。
まずい、こっちに来る。迷っている時間はなかった。イクスは咄嗟にレイラの手を取り、部屋の入口から離れる。忍び足で隣の部屋の前まで向かい、扉に手をかけた。
——開いている。
隣室から響いてくる靴音に背中を押されるように、イクスは扉の中へ滑り込んだ。手を引いているレイラもするりとイクスに続き、部屋の中に入る。できるだけ音を立てないように扉を閉め、二人は息をひそめた。

固い音が良く響く廊下でカツ、カツと規則的に足音が鳴っている。少しずつこちらに近づいてくる気配にイクスは息を飲んだ。気付かれてはいないはずだ。そしてこれは、チャンスでもある。
自分に言い聞かせながら、静かに銃を構えるイクス。ちらりと横目で見たレイラも構える気配があった。
ターゲットが部屋の入口にさしかかるまであと三歩。二歩。一歩。
――今だ。
レイラが部屋のドアを開けて、イクスが男を部屋に引きずり込み、気絶させる。男が崩れ落ちるよりも早く、そして静かに、レイラが部屋のドアを閉めた。ドサリとスーツの男が意識を失って地面に突っ伏す。
イクスとレイラはしばらく無言で警戒を続けていた。
「……はぁ〜〜。びびったぁ……！」
しばらく経って、ようやくレイラが大きなため息を吐いて緊張を解く。それを見てイクスも構えていた銃口を下ろした。
「気付かれずに済んだみたいですね……とりあえず、何を持ってるか調べて縛り上げましょう」
「その人、セキュリティカードとか持ってないかな？端末のアクセス権さえあれば情報漁れそうなんだけど」
「探してみます」
「なかったらその人に直接聞いてみようね」
「……お手柔らかに」
「あ、イクスくん。このペンライト、灯りに使って」
二人が飛び込んだ部屋は電気がついておらず真っ暗だった。レイラが構えたペンライトを頼りにイクスが気絶させた男の持ち物を漁る。めぼしいものを回収した後は男を拘束し、部屋の目立たないところに転がした。侵入者が居たことを知らせることになるが、今は何よりも情報が必要だった。企業秘密を得るには、社員をつつくのが一番早い。
「無地のカードを一枚持ってました。たぶん、これがセキュリティカードだと思います」
「ありがと〜。後はこの部屋になんか、端末、が……」
部屋をペンライトで照らしたレイラが言葉を途切れさせた。
「レイラさん？」
様子のおかしいレイラに気付いてイクスもその視線を追った。暗闇の中で無数の配線が天井や壁を這っている。配線の先には大型の機械が並んでいた。イクスには用途のわからないものだったが、レイラの様子に不安を覚える。
「……レイラさん？どうしました？」
「マテリアルだ……」
「え？」
「ここでも、マテリアルを作ってた……ううん、作ってるんだ……。これ、マテリアルを生成する機械だよ……」
「え！？」
イクスの脳裏に隣室の行方不明者たちが浮かんだ。彼らが集められた理由がわかってしまったような気がして、吐き気を催した。
「そんな……私、聞いてない……こんなところにもマテリアルを作る装置があるなんて……」

「レイラさん、隣の部屋に集められていた人々です。もしかして、彼女らは……」
「マテリアルの、材料……！」
　美しい“音”を奏でるマテリアル。その材料は生きた人間だ。かつてイクスたちが壊滅させたジェノサイド社はマテリアルを量産し、高い金額で客に売り飛ばしていた。
　そのマテリアルを作るための施設がまだ稼働している。その事実にイクスは少なくない衝撃を受けた。レイラもまた、現実が受け入れられない様子でぼんやりと立ち尽くしていた。
「あ。……もしかして」
　不意に我に返ったレイラが部屋の奥へ駆け出す。部屋の闇に消えていこうとする背中をイクスは慌てて追った。
「レイラさん、どこに行くんですか？」
「端末。電源、電源……ついた。認証は、これを、こうして……」
　マテリアルを生成する機械の裏に設置されていた端末をレイラが起動させる。青い光と共に画面が点灯し、認証画面が表示された。レイラが気絶させた男から奪ったカードをかざすと、“Authentication Success”が表示され、操作画面に切り替わる。端末操作の邪魔になったペンライトはしまわれた。
「よし、アクセスできた。データベース……あった。マテリアル素材データベース……嫌な名前ね。でも、ここにきっと……未加工、加工済み……半加工？1件だけ半加工にデータ入ってる……いや、まあいいや、今は加工済み……」
　レイラが画面をタップすると、氏名の一覧がずらりと画面に並ぶ。
「これは？」
「たぶん、ここでマテリアルにされた人たちの一覧よ。検索機能……あった。名前でもいけそうね」
　レイラが“タヌタ”と入力するのを見て、まさか、とイクスは目を剥く。探していたロードの孫を連れ去った犯人はジェノサイド社だったとでも言うのだろうか。
「――ヒット。見て、イクスくん」
　画面に映った現実は非情だった。氏名一覧が消え去り、検索結果としてデータ1件だけが画面に残っている。そこにはロードの孫の名前、“タヌタ”が確かに書かれていた。
　道理で見つからないはずだった。ジェノサイド社がタヌタを攫った痕跡をすべて隠していたのだろう。街で出ていた行方不明者も、マテリアルの素材を集めるためにジェノサイド社がしていたことと思えば納得がいく。
「だ、だれに……」
　イクスは震えてしまった声を咳払いでごまかした。
「誰の元に、タヌタが行ったかわかりますか？」
「購入者ね。購入者は……」
　レイラが指を動かすと、購入者の欄が現れた。そこに記載された見慣れた名前にレイラさえも言葉を失う。なんて残酷なことをするんだろう、とイクスは拳を握りしめた。
「“ロード”……。タヌタはずっと、ロードさんの傍に居たのか……！」
　愕然とする二人の耳にドアが開かれる音が飛び込んだ。
「あ？誰か居るのか？」

聞きたくもなかった酒で焼けた声に二人はびくりと身を強張らせた。ゲイスがこっちの部屋に来たらしい。一人ではない。黒服の男を軍隊のように大量に引き連れている。二十か、三十か。少なくとも二人で相手取れる数ではない。
「おーい？なんだ誰も居ねぇのか。端末つけっぱなしにしてんの誰だよ、ったくよぉ」
起動した端末の明かりは見えているものの、機械のおかげでイクスたちの居るところは入口からは死角だ。幸いと、ゲイスにはまだ見つかっていない。気絶させたスーツの男も、この暗がりならしばらくは見つからなさそうだ。
——どうする？
レイラの目に問いかけられ、イクスは素早く周囲を見回した。すぐそばに、しばらく使われていなさそうな執務机があった。二人で潜り込んでも余裕がありそうな広さの机だ。
イクスが目線でそちらを示すと、レイラも応じて頷き返す。二人は音を立てないようにゆっくりと、身をかがめながら移動して机の下に潜んだ。そこからゲイスたちの様子を窺う。
「まあいいか。おい、お前らとっととやれ」
しかし、指示と共に運ばれてきた少女を見て二人は嫌な予感を覚えた。
何故気付かなかったのだろうか。タヌタが攫われてマテリアルにされたのならば、他の行方不明者の末路も同じマテリアルであることに。
マテリアル化の機械が稼働をはじめ、黒服の男たちが機械の中央へと少女を引きずっていく。マテリアルにしようとしているのだ。少女は弱っているのか、ぐったりと引きずられるままだ。
隣でギリッ、とレイラが歯を食いしばる音が聞こえた。今にも飛び出していきそうな鬼気迫る顔に、無言でイクスはレイラの手を掴んだ。
「止めないで、イクスくん」
掴まれた手を見もせずに冷たく言い放つレイラ。
「無理です」
だからこそ、イクスもあえて冷たく返した。
「あの子たちを見捨てろって言うの！？今、人間が道具にされようとしてるのよ……！！」
イクスも同罪であるとばかりにレイラが強い眼差しで睨む。ゲイスたちに聞こえないように抑えた声から暴れだしそうなほどの怒りを感じた。だからこそ、イクスは強くレイラを制する。
「無理です、レイラさん。……無理なんです」
イクスはそう言って、唇を噛み締めた。
目の前で人間がマテリアルになるところなど見たくはない。だが救う手だてがないのだ。何度もイクスは部屋にいる男たちを倒す方法を考えたが、何も思い浮かばなかった。
「ここで失敗して、俺たちが捕まったら……タヌタのことをロードさんに伝えられない」
「————っ！！」
「大丈夫です。キュアがあれば……後であの子たちも元に戻せる」
レイラの顔が悔しそうに歪んだ。イクスも同じ気持ちだった。何も考えずに飛び出せたら良かった。こんな時に冷静に考えてしまう自分がイクスは悔しくなる。
部屋に青白い光が走り、少女の悲鳴があがった。光が収まると少女の姿はどこにもない。ゲイスが小さな石を拾い上げるのが見えた。マテリアルに変えられてしまったのだ。
「ちっちぇ。クズ石だ。クズからはクズしか採れねぇなぁ」
聞くに堪えない言葉がゲイスの口から吐かれた。それでもイクスたちはそれを見ていることしかできない。

　これほどまでに自分は無力だっただろうか。噛み締めたイクスの唇から血が流れたが、ちっとも痛くなかった。
　隣室で捕らえられていた人たちが全員マテリアルに変えられ、ゲイスたちはどこかにマテリアルを運びに行った。クズだらけだと笑うゲイスが立ち去り、静かになった部屋でイクスとレイラは机から這い出る。
「……レイラさん、行きましょう」
「……ええ」
　レイラはイクスと目を合わせずに頷いた。機嫌を損ねてしまったらしい。それだけのことをイクスはレイラに強いた。仕方がないと先に歩きだしたイクスの肩をレイラがぐいっと引き留める。
　振り向くと、怒りを消したレイラが弱々しい表情でイクスを見上げていた。
「ごめん、今、大人げなかった。……止めてくれてありがと、イクスくん」
「……いえ」
　イクスは何故か泣きたいような気分になって、弱々しく笑った。

HARMONIX PART2-3『マテリアルの力』

屋敷に戻る頃には雨が降っていた。
すっかり濡れてしまった髪から水滴が流れ、イクスの視界を悪くした。
「おかしいな……さっきまで晴れてたのに」
山の天気は変わりやすいと言うものの、これだけのどしゃ降りにあうのも珍しい。漠然と嫌な予感がイクスの脳裏をよぎった。
「イクスくん、行こう。急がないと……」
「ええ……」
同じくずぶ濡れのレイラに向かって頷き、屋敷の入口へと走って向かう。雨のせいだろうか。屋敷は不思議なほどに静まり返っていた。はじめてここに来た時よりも陰鬱な気配を漂わせている。
嫌な雨だ。
見ると、門の前でメイドが立っていた。急いできたのだろうか。傘もささずに立っている。わざわざ出迎えに来てくれたらしい。
「すみません、わざわざ……ん？」
駆け寄ったイクスがメイドに声をかけるが、反応がない。門の前で立ち尽くすメイドの顔はぞっとするほどに虚ろだった。
「！？だ、大丈夫ですか！？」
声をかけながらイクスが肩を揺さぶっても何も言わない。それどころか、糸の切れた人形のようにその場に倒れこんでしまう。
「レイラさん、これ……！」
「うん、何かあったんだ……！！気を引き締めて――きゃあ！？」
不意に、雷のような衝撃がイクスとレイラを襲った。
視界が黒く眩む。
びゅうびゅうと、叩きつけるように泣き叫ぶ風が全身を揺さぶった。その強い轟音が“音”であることに一拍遅れて気付く。かきむしりたいほどの胸の苦しさにイクスはその場で崩れ落ちた。
頭の中で少女の笑い声が聞こえる。無邪気なのに、どこか悪意をはらんだ不気味な笑い声だった。
「あら、遅いお帰りね」
いつの間にか、目の前に黒い少女が立っていた。フリルのドレスを優美な黒に染め上げ、凛とした華のような佇まいだった。こんな雨の中だと言うのに不思議と濡れることなく、悠然とイクスを見下ろしている。冷えた瞳が紫に輝いた。
どこかで見たことがある気がして、イクスは必死に少女を見つめる。長い白髪に紫の目。夜を思わせる真っ黒いドレス。マテリアルの所持者を襲撃しているとして、ジェノサイド社に警戒されていたあの少女だ。
「でも残念。マテリアルはもう、頂いてしまったの」
少女の両手には青いマテリアルが抱えられていた。凍りついてしまったかのように澄んだ、水魚のマテリアル。ロードの持ち物であったはずのものだ。
ロードから奪われたのだ。

理解しても、イクスは動けずにいた。何故か指がぴくりとも動かせない。疑問に思うイクスの心を読んだかのように少女は笑った。
「ええ、そうよ？あなたを止めているのは私。あなたの“心”を捕らえているのはこの私よ」
白くて細い指先がイクスの胸を軽くつつく。息苦しさが増したような気がして、イクスは小さく呻いた。耳元でがなりたてる風の“音”が止まない。風が絡み付く糸となって、手足を縛り付けているようだ。逃れようとすればする程、風の糸は全身に絡まりついた。
「ほどけないでしょう？ほどけないのよ……ふふふ、ねえ、赤い髪の素敵なお姉様？あなたも、諦めてしまいましょう？苦しいでしょう？辛いでしょう？いいのよ、諦めて。お人形になってしまった方が楽でしょう？」
隣に居たレイラもイクスと同じように膝をつき、苦悶の表情を浮かべている。イクスと同じ“音”に襲われているのか、耐えがたいものを聞いているかのように片耳を手でふさいでいた。
「誰……あなたは……」
レイラの質問を少女は笑った。
「くだらない問いかけね、お姉様。私に名前はないわ。ティアは私たちに名前をくれないんだもの」
ティア。
イクスは無意識のうちにその名を呟いた。
「あら嬉しい。黒い髪のお兄様、私の名前を呼んでくださるのね。久しぶりに聞いたわ、その音の響き。ティアもきっと喜ぶんじゃないかしら？」
黒いドレスの少女は不思議なことを言った。まるで“ティア”が己の名であるかのように言いながらも、“ティア”を別人のように扱う。少女のあどけない顔立ちに浮かぶ、妖艶な笑みがどこかアンバランスさを感じさせた。
「お礼に、お兄様とお姉様の心はそのままにしておいてあげる。傷付けないわ。私、本当は誰かを傷付けるのは嫌いなの。本当よ？目的のためには手段を選ばないけれど、それは、そういう役割ですもの。許してくださいまし」
「……」
イクスは何も答えられない。胸の圧迫感が増し、呼吸すらも難しい。
遠のく意識の片隅で少女の笑い声が聞こえていた。目の前の少女の鈴を鳴らしたような可憐な声と、“音”と入り混じる非現実的な幼子の笑い声。現実と幻想の境が曖昧になり、視界が灰色に染まりつつある。
「会えて嬉しかったわ、黒い髪のお兄様。赤い髪のお姉様。それでは、ごきげんよう――あら？」
意識を失いかけていたイクスを救い上げたのは暖かな“音”だった。胸の奥に切ない痛みが訪れる。しかし、黒いドレスの少女が纏う“音”に与えられる暴力的な痛みに比べれば、ほのかに人肌の熱を持った優しい痛みだった。
イクスの知っているこの“音”はロードのマテリアルの“音”だ。
ティアに抱えられていたロードのマテリアルが危うい光を放ちながら、水魚を生み出す。生まれ落ちた水魚はイクスたちに見向きもせずに、真っ直ぐに空へと向かった。雨の水を吸いこみ、少しずつ大きくなりながらぐるぐると空を泳ぐ。

やがて水魚はイクスたちの上に影を落とし、屋敷の屋根を覆いつくすまでに成長した。無理をして大きくなったかのように、その水の塊はゆらゆらと揺れている。応じるかのように、雨足が強くなった。
地面を激しく叩きつける水の音に、イクスたちを縛り付けているまがまがしい“音”が更に遠ざかる。視界は悪いが、胸の苦しさは和らいだ。
そして、ロードのマテリアルは少女を水圧で押しつぶそうとでも言うのだろうか。水魚は形をほどき、滝のように少女に襲い掛かった。
「聞き分けのない子……」
ぽい、と。興味をなくしたように少女がロードのマテリアルを地面に放る。代わりに彼女の右手が宙に掲げられた。
少女の小柄な体に流水が叩きつけられる、その直前に少女の全身を紫の光が覆う。美しい刹那の閃光。まるで雷だ。
少女が掲げた手の中で小ぶりな結晶がまがまがしい光を放っている。灯りのない夜を思わせる漆黒のマテリアルだった。
今まで見たこともない恐ろしい色に染まったマテリアルにイクスが動揺していると、蝶番が悲鳴をあげるような耳障りな“音”が鼓膜を貫いた。少女の持つマテリアルが強く光り、再び胸をわしづかみにされたような苦痛がイクスを襲う。
少女に降り注がんとしていた水が雷に吹き散らされ、四散する。水魚であった水がすべて流れ切った後も、少女は一滴たりとも濡れることなくそこに立っていた。
「残念ね。弱い子は、どんなに頑張っても報われないの。そんなこともわからない悪い子は、壊してしまおうかしら？」
黒いドレスの裾が蠱惑的に揺れる。フリルから覗いた細い脚が地面に転がるロードのマテリアルの上に乗せられた。高いヒールが水魚のマテリアルにかかる。力を込めればマテリアルを踏み砕いてしまいそうだ。
ダメ。
レイラがか細く静止の声をあげる。しかし吐息のようなその声は少女を止める力など持たなかった。
イクスも止めようと必死に手を伸ばす。泥をかきわけ、身動きの取れない体で前へ、前へと腕の力だけで進む。
ダメだ。そのマテリアルは、人間に戻さなくてはならないんだ。会わせなくてはならない人が居るのだから。そのマテリアルの正体は――。
だがイクスの動きはあまりにも弱々しく、少女は気付いた様子すらなく優雅に笑った。
「石になってしまった人生に、意味なんてないもの。いっそ、私が壊してあげる」
今にもマテリアルを踏み砕かんと少女の膝に力が込められる。
「ダメ！！ロードさん！！！」
エレノアナの悲鳴が聞こえた。唐突に雨空をつんざいた悲鳴に誰もが動きを止める。見れば、エレノアナが蒼白の顔色で屋敷から飛び出し、何かを掴もうと手を伸ばしていた。
エレノアナの手をすり抜けて、駆動音が迫った。黒いドレスの少女に真っ直ぐへと駆け抜ける車いす。どしゃぶりの雨の中、枯れ木のような腕が大きく伸ばされ、少女を押しのける。やせ細った体が車いすから放り出され、勢いづいた二輪の移動器具が大きな音を立てて地面にぶつかった。
「わしの孫を返せ！！！！」

地面に放り出されてもなお、老人はマテリアルに手を伸ばすことをやめなかった。少女を押しのけ、水色の水晶を両腕で抱え込み、守るように体を丸め込む。大地にしたたかに打ち付けられたロードは低くうめき、そのまま動かなくなった。
「ロードさん！！！！」
エレノアナがロードを追いかけ、弱った老人の体を抱きかかえる。体を動かすと痛むのか、ロードが呻く。だが息はある。エレノアナは心底安堵したようによかった、と呟き、まだ敵が居ることに気付いて顔を上げた。
黒いドレスの少女がエレノアナを見下ろしている。エレノアナの顔が泣きそうに歪んだ。こらえ切れない痛みに泣き出しそうなエレノアナの表情は怖がっているというよりも、心の底から悲しんでいるように見えた。
いつの間にか、すべての“音”がやんでいた。少女の呪いの“音”も。ロードのマテリアル――タヌタの切ない“音”も。
ふらつきながらも立ち上がったレイラが茫然と呟く。
「今、孫って……おじいちゃん、知ってたの……？そのマテリアルが、タヌタだってことに……」
ロードは何か答えようとしたのだろう。だが、激しくせき込むだけで言葉が出てこない。老人の口からついに血があふれだした。エレノアナがさらに泣きそうな顔になる。
雨から守るようにロードを抱きしめ、迷うことなく服の袖でロードの口を拭うエレノアナ。ロードの手はひどく震えている。それでもしっかりと、取り落とさないように水魚のマテリアルを、己の孫を抱えていた。
「お願いします……このマテリアルは見逃してください……お願いします……。この子を、取らないで。ロードさんが傷付いて、泣いているこの子を……」
エレノアナはドレスの少女を見つめた。少女は表情を消して、そんなエレノアナを見つめ返していた。
「……素敵なおじい様ね。羨ましいわ」
エレノアナの訴えが通じたのか、少女は目を閉じて踵を返した。
「そのマテリアルはタヌタと言うのね。なら、私の探しているマテリアルではないわ。ごきげんよう、可愛いお魚さん。素敵なおじい様。石になっても、人として求められるなんて素敵なことね」
あまりにもあっさりと引いた少女の目的が気にならないわけではない。だが、今はロードを屋敷に運び込むことが先決だ。
ぎこちない動きでなんとかイクスは立ち上がる。頭がひどく痛み、全身を無気力感が蝕む。体が震えるのは漆黒のマテリアルが奏でる“音”の残り香か、それとも。
「ロードさん、しっかり……今、タヌタを人間に戻しますから……」
「あ……ロードさんもさっき、自分の孫だって……」
エレノアナが顔を上げてイクスを見る。不安そうに大きな瞳が揺れていた。
「タヌタを見つけてきたよ」
エレノアナをこれ以上不安にさせないよう、イクスはできるだけ優しく笑いかけた。
だからそれまでは死んでくれるなよ。病で痩せ細ったロードの軽さに、イクスは祈るような気持ちで屋敷へと急ぎ戻った。

自室のベッドに横たわらせたロードの息が細い。
イクスは迷わずにキュアを取り出し、水魚のマテリアルに突きつける。
鍵を開ける要領でキュアをひねると、光り輝く位相幾何学的な文様が現れ水色の結晶体を覆いつくした。視界を染めるほどの強い光があふれる。
白く奪われた視界の中でイクスは何か違和感を覚えた。鍵が回りきれていないような、妙な手応えがあった気がした。嫌な予感を抱えたまま光が消えるのを待つ。
煙がはけるように光が収まると、そこには誰も居なかった。水色の澄んだマテリアルだけが何事もなかったかのように鎮座している。
もしや、キュアが壊れたのだろうか。イクスは信じられない気持ちで自分の手元にある鍵を見下ろす。
そんな、と声をあげたのはレイラだった。
「キュアを使ったのに何で戻らないの！？」
動揺するイクスとレイラを置いて、マテリアルの元まで真っ先にエレノアナが駆けて行った。
「タヌタくん……そこにいるんですか？タヌタくん……」
マテリアルに話しかけるエレノアナ。しかしタヌタから返答はないらしく、少女の顔色が曇った。
「どうして……タヌタくん、なんですよね？お願いします、答えてください……！」
「何でこんなときにキュアの調子が……！！ちょっと貸して！！」
イクスは促されるままにキュアをレイラに渡し、マテリアルを改めて見る。マテリアルは置物のように沈黙していた。サルビアの花畑で見た、水でできた魚が現れる様子もない。まるで対話を閉ざしているかのような反応だった。
「タヌタ……」
か細い声がタヌタを呼んだ。振り向けば、ロードが目を覚ましていた。眩しそうに目をすがめ、水色のマテリアルを見つめている。
「タヌタや、出ておいで……大丈夫じゃよ……」
イクスは聞いたことのないロードの声色に驚いた。あの厳めしくも力強いロードの弱りきった様子に驚いたのは勿論のこと。子ども好きの優しいお爺さんのような表情が、今までイクスが見知ったロードとは別人のようだった。
「タヌタ……」
マテリアルの表面が揺れた。水面のように波打つマテリアルから小さな水の魚が一匹現れる。それは不安そうにマテリアルの影に隠れながらロードを見ていた。
ロードが笑って、また声をかける。
「おいで、タヌタ……」
小さな魚がおずおずとマテリアルの影から出てくる。最初はゆっくりと、周りの反応を確かめるように泳ぐ。やがて、耐えきれなかったように水の小魚はロードの元へ急ぎ足で向かった。
ロードが伸ばした手の、その指先にちょんと水魚が触れる。ロードの人差し指に水の滴が浮かび、流れ落ちた。
「悪かったのぉ。わしがつまらん意地を張ったから、お前も出てこれんかったろう……」
マテリアルの正体がタヌタであると確信している様子のロードにイクスは戸惑った。
「ロードさん、マテリアルの正体に気付いていたんですか……」

「お前たちが、マテリアルの素材について話していた時から、もしかしてとは思っとった」
「なら何故……」
「言ったじゃろう。会わせる顔がないと……わしは、子どもはうまく育てられん……わしはたぶん……おらん方がいい……わしが死んだ後にお前たちがマテリアルを戻してくれれば、タヌタは屋敷の者が面倒を見るなり、実家に返してくれるなりするから、そっちの方がいいと思ってたんじゃよ……わしは、おらん方がいい」
　そう思っていたはずなのに、とロードはため息のような笑いをこぼした。
　そうなのだろうか。会いたいと願うなら会えばいいじゃないか。単純なことのようにも思えるのだが、口に出せば否定されることは容易く想像できた。
　イクスがなんと言えば良いのかと迷っていると、代わりにエレノアナが声をあげた。
「そんなの勝手です！！！」
　大きな声にイクスは驚く。
　エレノアナが怒っていた。迫力がないのは、目に涙を溜めているせいだ。肩を震わせて、泣き出しそうなのを堪えているのが目に見えて、痛々しさの方が目立った。
「ロードさん、タヌタくんに会いたいって言ってたじゃないですか！！！なのに、タヌタくんのこと知ってるのに、ずっと一人で黙ってて……自分が亡くなった方が良いなんて、そんなの、ロードさんの勝手じゃないですか！！」
「そんなに簡単な話じゃないんじゃよ。どれだけ想っていてもいない方がいい人間も居るんじゃ」
「大好きな人が亡くなって良かったなんて誰も思わない！！！」
　エレノアナが言っているのはロードのことだけではないのだろう。エレノアナの両親もつい最近亡くなっている。思えば、それがエレノアナとイクスとの出会いのきっかけでもあった。
　もしかしたら、彼女の両親が今も生きていればエレノアナとの旅はなかったかもしれない。イクスが彼女の淹れるコーヒーの味を知ることはなかったのかもしれない。マテリアルの“音”を知ることなく、ただ乾いた日常を送る元のイクスのままだったのかもしれない。
　それはぞっとしない想像だ。だけど、それでもエレノアナの両親が亡くなって良かったなんてイクスだって思えなかった。
「大切な人が亡くなると、悲しいんですよ……もう二度と会えないって思うと……っ！どんな理由があっても、いない方がいいなんて、絶対言わないで……！！」
　両親の死を知ったときのエレノアナの泣き腫らした顔を思い出せば未だに心が痛む。今、泣き出しそうなエレノアナが再び同じ悲しみに襲われていると考えると、イクスも何故か泣き出しそうなほどの想いに胸が詰まった。
「……誤魔化す必要なんてないんだよ」
　レイラがぽつりと呟く。落ち着いた様子で、真っ直ぐにロードを見ている。
　傍に立っていたイクスだけが、指先が白くなるほど握りしめられたレイラの拳に気付いていた。
「自分が居なくなった方が良かったんだ、とか。何もできないんだったらいない方がマシとか。そんな風に、自分を誤魔化すことなんてない。好きなら、好きでいいじゃん。会いたいなら、会えばいいじゃん。誰も、責めないよ」
　レイラは静かに、真っ直ぐに。そしてどこか自分に言い聞かせるかのように語った。
「誰かが責めたって……ロードおじいちゃんがタヌタくんに会えなくて苦しんでることを知ってる私たちは責めないよ」

　ロードは笑った。弱りきったような、嬉しそうな笑みだった。
「わしは……ずっと誰かにそう言ってもらいたかったんじゃろうなぁ」
「会いたかったら、会いたいって言っていいんだよ、おじいちゃん」
「そうだな……。わしは、ずっとタヌタに会いたかった……」
　そう言って、ぱたり、とロードの手が力尽きた。
「ロードさん！！」
　慌ててエレノアナがベッドの傍に駆けつける。
「ロードさん、しっかり！！しっかりして！！タヌタくんがロードさんのことを呼んでます！おじい様、死なないでって！！お願い、死んじゃいや……！」
　マテリアルから生まれた水魚も動揺したようにロードの周りを泳ぎ回った。
　移動した跡に水滴が残る。指先に、額に、頬に。濡れた感触に意識をわずかに取り戻したのか、ロードの目が少しだけ開いた。
　ぼんやりと、何かを目が探している。視線の先に水魚が飛び込み、くるくると泳ぎ回る。やがて水魚ははっとしたようにエレノアナに何かを訴えかけた。
「え？キュアを、もう一度……？」
　エレノアナを通して伝わったタヌタの言葉の断片にイクスとレイラが弾かれたように顔を見合わせ、キュアを見下ろす。
「エレノアナ、キュアをもう一度使えばいいのか？」
「た、たぶんそうだと思います！」
　それでどうなるのかはわからないが、もうそれしかできることはない。イクスは再びキュアを手に取り、マテリアルに差し込んだ。カチャリとはまるべきところにキュアがはまるような手応えが返る。
　キュアとマテリアルの接触面から広がった位相幾何学的な文様が白く光り、部屋中を柔らかな光で包む。
　光の奥でぼんやりとしたヒトがたの何かが動いた。
「……おじい様」
　弱々しい少年の声が聞こえた。
「タヌタ」
　ロードは目を開けていられない様子で、眩しそうに声の主へと手を伸ばす。
「タヌタ、そこにおるのか……」
　孫を探して緩慢に伸ばされる老人の手を、小さな手が掴み取った。
「おじい様……」
　ふっくらとした頬が可愛らしい、あどけない少年がロードの傍に立っていた。その姿を目に映したロードはタヌタだ、と喜ぶ。
「ああ……やっと、戻ってきてくれたんじゃな、タヌタ……無事でよかった……」
「おじい様、ボク……」
　人の姿に戻ったタヌタはたれ目がちの温和そうな少年だった。頬がふっくらとしていて、笑うときっと可愛らしいのだろう。しかし、今の彼の表情は曇っていた。
　親に怒られるとわかった時のような心細そうな顔でタヌタは瞳に後悔をにじませていた。
「ごめんなさい……ボク、いい子じゃなくって……」
「そんなことを言うな。わしの自慢の孫がそんな風に言われてしまうとおじい様は悲しいのお」

「だって」
　タヌタは苦しそうに言った。
「ボクはお父様に似てるんでしょ……？」
　タヌタは父に似ているとかつてロードは言っていた。タヌタはそれを気にしていたらしい。いつから、タヌタの心に影が落ちていたのかはわからない。だが、父と己が似ている恐怖が随分と長い間タヌタになじんでいるように見えた。
「ボクはお父様に似ていて……お父様はおじい様を困らせてばかりの悪い子だったんだよね……？だから、おじい様は……お父様が“キライ”で……」
　幼いタヌタは“キライ”という言葉の力が強すぎるかのように怯えた様子を見せた。
　ロードはそんな孫を宥めるように、ただ優しく笑った。孫の不安ごと吹き飛ばそうとするかのような、肩の力が抜けた柔らかい笑みだ。
「自分の子どもが嫌いな親なんて居らんよ。もちろん、自分の孫が嫌いになるおじいちゃんもな」
「ボクが悪い子でも？」
「悪い子だとは思わんがのぉ。もし、悪い子だったとしても会いたいと思うよ」
「ホントに？」
「ホントじゃよ」
　ロードは眩しそうにタヌタを見つめた。不安げな孫の向こうに別の誰かを見るかのような、遠い追憶の表情が一瞬、老人の顔に映る。
「ホントに……会いたかった」
　ほんの刹那の回想だった。それだけで、心残りがあるような、しかし長年の葛藤が解けて満たされてもいるような顔をロードは浮かべた。
「タヌタ、お前は素直に生きるんじゃ……おじい様のように、意地を張りすぎて大切なものを見失わんようにな……」
　ロードは眠たげに目を細め、今にも眠ってしまいそうな様子を見せた。はっとなったタヌタが祖父の手を強く掴む。
「おじい様！おじい様、死んじゃやだよ！」
「ありがとう、タヌタ……お前たちも、ありがとうな。よくタヌタを見つけてくれた……最後までこんな死にかけの老人に付き合わせてしもうたの……」
　イクスたちに優しい眼差しを向け、目を閉じるロード。まるでこれから一眠りでもするかのような安らかな表情に不穏な未来を感じたのだろう。タヌタが泣き出しそうな声でロードを呼ぶ。
「おじい様！！」
「大きくなったな、タヌタ……。お前にまた会えて……わしは幸せじゃよ……」
　ロードはタヌタの手をそっと握り返し、微笑みを浮かべる。短い再会だったが、満ち足りた表情だった。
　孫の手を握り、幸せそうな顔でロードはそのまま長い眠りについた。

　屋敷を出ると、どしゃぶりが嘘だったかのような快晴が広がっていた。雨上がりの澄み切った空気が漂っており、少しだけ肌寒い。イクスは深呼吸を一つする。疲労感も手伝って、徹夜明けの早朝を迎えたかのような気分だった。

ロードの屋敷は騒然としていた。倒れていた使用人たちが目覚めはじめ、タヌタを見つけたからだ。その傍で眠るロードも見つけ、喜んでいいのか嘆くべきなのか、複雑そうにしていた。イクスたちも同じだ。一度にあまりにも多くのことが起こりすぎて、気持ちの整理がつけられない。
確かなのは一つ。タヌタを連れてきて、ロードのマテリアルを解放した以上、ここに居る理由は最早ない。ロードの死去とタヌタの帰還でバタバタとしている屋敷からそっとイクスたちは立ち去った。
「……挨拶の一つくらい、しても良かったかもしれませんね」
しばらく過ごしたロードの屋敷を振り返り、イクスはしみじみと呟く。来た時は鬱蒼としていた屋敷が今はどこか違って見える。庭では赤いサルビアが生き生きと咲き誇っていて、なつかしさのようなものが込み上げた。
「いいのよ。屋敷の主が亡くなって、でも次の主が帰ってきて。私たちに構ってる余裕もないでしょ。立つ鳥跡を濁さず、ってね」
「でも、ボク、まだお礼もちゃんと言えてないのに。ひどいですよ」
予想外の声が聞こえてきてイクスたちは固まる。目線を下げると、頬を膨らませたタヌタが立っていた。目元にはまだ泣きはらした跡が残っている。だがその表情は思ったよりも明るい。
「ボク知ってます。そういうの、ハクジョウ、って言うんですよ」
「難しい言葉を知っているのねぇ」
「ボク、怒ってるんです！からかわないでください、レイラさん」
「おんやぁ、私たちの名前も知ってるのね」
「知ってますよ！」
ぷっくりと頬を膨らませたタヌタがレイラに抗議する。
「イクスさんに、レイラさんに、エレノアナさん。マテリアルになってる時のことは、ちゃんと全部覚えてるんですから！」
不思議な心地だった。マテリアルになっていた頃のタヌタを知っているから、イクスはついあの水魚の名残をタヌタに探してしまう。厳めしかったロードの顔立ちとは真逆の、穏やかで柔和な顔立ちの少年だ。あの優しい“音”の持ち主だと言われれば、確かにそうだと頷ける。
タヌタはふと切ない表情になり、イクスたちに向かってぺこりと頭を深く下げた。
「助けてくれて、ありがとうございます。まさか、人間に本当に戻れるなんて思ってませんでした。それにおじい様のことも」
「ロードさんには……大したことはできませんでした。ごめんなさい。私はロードさんについていたのに……」
エレノアナが悲しげに目を伏せる。気落ちしている様子のエレノアナに、タヌタは首を横に振った。
「ううん。エレノアナさんがおじい様を外に連れ出してくれたから、ボクとおじい様はまた会えたんです。イクスさんとレイラさんも、おじい様をたくさん元気づけてくれて……」
「いや、俺はあんまり何もできていないかな……」
「私も別に？車いすは作ったけど」
「でも、皆さんに会ってからおじい様は元気になりました。だから、ありがとうございます」
どうしてもそれだけ伝えたくて、タヌタは屋敷を一人で抜け出してきたらしい。
「お礼できるものも何もないんですけど……」

　しゅんとうなだれる少年にイクスは小さく笑った。ロードが自慢するだけある。性根が真っ直ぐな、可愛らしい子どもだ。
「お礼はいらないよ。俺たちが勝手にやったことだから」
「絶対にいつか、お礼をします。待っててくださいね！」
「うふふ、君が大きくなったら、だね」
　少年の宣言にレイラが挑発的に笑う。それにムッとして、絶対ですからね！と念を押すタヌタに見送られて、イクスたちは屋敷の敷地を出た。
　門で振り返ると、タヌタが大きく手を振ってくれている。それに軽く手を振り返したところで、ふとイクスの視界の端に黒い影が映った。
「……ん？」
「イクスくん、どうしたの？」
「今、何か……あ、いや。気のせいだと思います」
「そう？」
　庭に点在している灰色の石像。その後ろで何か人影のようなものが揺らめいた気がしたのだ。だが瞬きをしている間に、影は消えてしまった。
　見間違いだったんだろうかとイクスは首をひねりながら、屋敷を後にした。

ロードのマテリアルを人間に戻すという目標を達成したイクスたちはひとまずキャンピングカーに戻ってきていた。思いのほか長くロード邸に滞在していたからだろうか。車内に戻るとイクスは張りつめていた気が抜けて安心感に襲われた。
イクスの指が無意識にネクタイを緩める。屋敷を襲撃した少女や、未だ作られ続けているマテリアルのこと等、色々とまだ考えることはあるのだが今日はもう動けそうにない。疲労感に身をゆだねてソファに倒れこむ。
「あーーー！！イクスくんズボラだよそれは」
すかさずレイラがとがめてくる。口調は責めているようだが、目は面白いものを見つけたかのように楽しげだ。
「うっ……ちょっと疲れちゃって……すみません」
「ま、いいけどね。私も色々あって、ちょっと疲れちゃった。エレノアナちゃーん！コーヒーお願い！」
「……」
「エレノアナちゃん？」
エレノアナは考え事をしているようだった。ロードの屋敷を出てから沈み気味であったことには気付いていたのだが、思っていたよりも落ち込んでいる様子にイクスはソファから身を起こす。
「エレノアナ？」
「……え？――あ、ごめんなさい！ちょっとぼーっとしてました！えっと、コーヒーですよね！今淹れますね！」
「はい、ストップ」
キッチンに向かおうとしたエレノアナをレイラが止める。
「エレノアナちゃん、なんか無理してない？」
「えっ？全然してませんよ！私は大丈夫です！！」
ぐっ、と握りこぶしを作って明るく笑うエレノアナはいつも通りに見える。しかし、つい先ほどまでの思いつめたような横顔が綺麗に消えていることが却ってイクスを不安にさせた。
「エレノアナ、何か気になることがあるなら言ってくれないか？」
「イクスさんまで！本当に大丈夫ですよ？」
「大丈夫って顔、してなかったわよ」
「それは……」
レイラの圧に負けたようにエレノアナが言葉を詰まらせる。
「えっと、ちょっと、ロードさんのことで色々考えちゃって……」
目を伏せて、表情を陰らせたのはロードとの別れを悼んでいるからなのだろう。
イクスやレイラとて、素直ではない老人とのお別れに対して何も感じていないわけではない。しかし、ロードと過ごしている時間は少しだけエレノアナの方が長い。イクスとレイラ以上に、何か考えてしまうことがあるのかもしれなかった。
「でも、本当に大丈夫なんです。悲しいって言う気持ちはちょっぴりありますけど……でも、ロードさんは最後に笑ってました。最初は眉間にぎゅーってしわを作ってたロードさんが、とっても優しい顔になって……。タヌタくんも戻ってきましたし、これから大変かもしれませんけど、タヌタくんには屋敷のみなさんも居ますし。だから……」
そこまで言って、エレノアナは言葉に詰まった。再び顔を曇らせ、目を伏せた少女の口からぽろりと本音がこぼれ出る。

「……私、気付けなかったなぁって。タヌタくんのこと」
　エレノアナはロードの傍にいながら、タヌタの居場所に気付けなかったことを悔やんでいた。
「それは仕方ないわよ。私たち、タヌタくんと会ったことなかったんだから。おじいちゃんも何も言わなかったし……」
「それは……そうかもしれないけど……でも。私だって、あのマテリアルがタヌタくんだったら素敵だなって、思ってたのに。それを言わなかったのは、私も同じで……ううん」
　エレノアナはそんなことが言いたいんじゃないと首を振った。
「もっと早く、タヌタくんとロードさんを会わせてあげたかった、な……」
　しょげるエレノアナにイクスはどうしたらいいのかわからずに黙り込んだ。
　エレノアナの想いは真っ直ぐだ。誰であれ、目の前に悲しんでいる人間が居れば同じように傷付く。そして自分のことであるかのように、何かできないかと必死に考える。
　ロードとタヌタの再会はあまりにも短かった。それがどうしようのないものだったとしても、考えずにはいられないのだろう。もしもっと早くタヌタの居場所に気付いていれば。もし、ロードの頑なな心にもっと働きかけていたのならば。何かが良い方向へ変わっていたのではないかと考えてしまうのだろう。
　悪い方向の想像はいくらでも出てくる。ロードももっと孫に話したいことがあったのではないのか、とか。中途半端な再会が逆に幼いタヌタを傷付けてはいないだろうか、とか。考えても仕方のないことばかりあふれてくる。
　それをどうしようもないことだったとイクスならば割り切れる。きっと、レイラだってそうだろう。過去は変えられないし、未来に訪れることを先に知ることはできない。やれることはやったと言い聞かせれば、事実はどうであれ、そんな気がしてくる。
　そういう風に上手く割り切ることができないエレノアナをイクスは慰めたいと思いながらも、自分の気持ちから逃げることのない少女を眩しく思った。
「うーん……ダメですね！ちょっと、落ち込んじゃってるみたいです。ロードさんが笑ってたから、それで良かったって思うことにします！悲しいことばかり考えていても、前を向けないから……」
　ぱっと表情を明るくして笑うエレノアナ。朗らかな態度だが、どこか無理をしているようにも見えた。
「俺は……その」
　もし無理をしているのならやめてほしい。
　イクスに未来をくれた少女には傷付かないで、笑っていてほしい。だが、傷付いていることをエレノアナに隠されるのはイクスにとってもっと辛いことであるような気がした。
　落ち込まないでくれと慰めるのも間違っている気がして、イクスはただ、思っているままの言葉を口にした。
「エレノアナの、人に対して真っ直ぐなところが好きだよ。後ろから支えてくれるような、前に立って引っ張ってくれるような……誰に対しても真剣になれるエレノアナが好きだ」
　こぼれそうなほど大きくエレノアナの瞳が見開かれる。エレノアナの目を見つめ返すと、緑の瞳の奥にイクスが映り込んでいた。エレノアナの目に映った自分の顔が思っている以上に真剣そうで、まるで違う誰かを見ているような不思議な気持ちにイクスはなった。
「俺は、エレノアナが好きだよ」
「やめてください……」

強い拒絶にイクスははっとする。
「泣いちゃうから、やめてください」
笑みを崩し、泣き出しそうなエレノアナがそこにいた。ロードが亡くなったことに傷付いているのが見て取れて痛々しい。だが、それがエレノアナだ。
「えっと、その……だから、俺は……」
「――泣いちゃいなさいな」
レイラの腕がエレノアナの背中に回った。優しくエレノアナの肩を叩きながら、レイラがイクスに笑いかける。
少しだけ涙が見えるレイラの瞳にイクスが驚く。視線に気付いたレイラがフッ、と相好を崩し、仕方ないでしょ？とでも言うかのように美しく笑って、空いていた手でイクスの肩を叩いた。
エレノアナとイクス、二人をまとめて抱きしめるように引き寄せるレイラ。三人の距離が近づいて小さな輪ができた。
「いいのよ、悲しい時は泣いちゃって。泣きたくなるのは、誰かを大事に想ってた証でしょ？」
そうだ。出会ってそう間もない人のためにでも心を砕けるエレノアナだから、イクスも力になりたいと思うのだ。
「……」
目の前のエレノアナの顔がくしゃりと歪んだ。泣きそうなのに、唇を噛み締めて涙をぐっとこらえているエレノアナを見ていると、イクスも何故か目が潤むのを感じた。
「……イクスさん、レイラさん。お願い、してもいいですか？」
レイラとイクスが頷くと、エレノアナはおずおずと口を開いた。恥じ入るような小さな、掠れた声が発せられる。
「考えてしまうんです……。ロードさんを私が部屋から連れ出したから、寿命を縮めてしまったんじゃないか、とか。ずっと近くに居たタヌタくんにも気付けずに、最後の最後にちょっとだけ会わせて、却ってひどいことをしてしまったんじゃないかって。ロードさんにも、タヌタくんにも申し訳なくて……。だから……」
だから、とエレノアナは言葉を詰まらせた。
「頑張った……って言って……もらえませんか……？」
ぽたり、とエレノアナの緑の瞳からひとしずくの涙が零れ落ちた。
「私がやったことは余計なことなんかじゃなかったって……できることはやったよ、って……嘘でもいいから……」
「嘘なんかじゃない」
イクスは本心からそう言った。
エレノアナの頑張りが、真心が、嘘であるものか。
「エレノアナがロードを部屋から連れ出したから、ロードもタヌタに会いたいって思えたんだ。エレノアナじゃなきゃできなかったことだよ」
「うん、エレノアナちゃんはえらい、えらいよ！」
ぐっとレイラがイクスとエレノアナを抱き寄せる。近くなった距離に、イクスも恐る恐るエレノアナとレイラの背中に手を回した。
「エレノアナはいつも頑張ってるよ。ロードさんのことだけじゃない。そうやって頑張れるエレノアナが居るから、俺の世界は今、明るくて、生きているのが楽しくて、だから……俺は、

そんなエレノアナが――」
　その先はエレノアナに遮られて言うことはできなかった。イクスの胸元に頭突きするようにエレノアナが飛び込む。顔は見えなくなったが、細い両肩が震えていて、泣いているのだとわかった。
　崩れ落ちそうな少女の体をレイラとイクスの二人で支える。
「イクスさんはずるい……です」
　そう呟いて、急に堰を切ったように泣き出したエレノアナに何か余計なことを言ってしまったかと慌てるイクス。しかし、よくやったと微笑むレイラと目が合い、言葉を間違えてはいないことに安堵した。
　しばらく泣いてから顔をあげたエレノアナはどこかすっきりとした顔をしていた。赤い目元に残る涙の跡をぬぐいながら、ふわりと笑う。
「ごめんなさい……ありがとうございます。元気、出てきました」
「無理はしないでくれ。悲しんでいるエレノアナを見るのも俺は嫌だけど……無理をされる方が見ていて辛い」
「……むぅ」
「え、エレノアナ？」
　何故か、見るからにむくれてしまうエレノアナ。赤く染めて頬をふくらませてそっぽを向く少女に、また変なことを言ってしまったかとあたふたするイクス。今度はレイラに思いっきり背中をどつかれてしまう。
「な、何するんですかレイラさん！？」
「ひーどい男よね、こいつ！ね、エレノアナちゃん！」
「はい……！」
「え、ええ……」
　本気で責められている訳ではなさそうだが、思い当たるところのない、ひどい言われ様にイクスの眉尻が下がる。
「そんなひどい男のイクスくんにコーヒーでも淹れてもらわないとね！」
　急にレイラが無茶苦茶なことを言い出した。
　このキャンピングカーには手軽に淹れられるインスタントコーヒーなど積んでいない。つまり、ここでコーヒーを淹れたいのなら、エレノアナが毎日使っている本格的なコーヒーメーカーと戦わなければならないということになる。
「俺が！？」
「おやぁ～？イクスくんは傷心中のエレノアナちゃんを働かせないとコーヒーも淹れられないのかな～？」
「い、淹れられますよ……淹れられますけど……」
　インスタントコーヒーなら……と言い出しそうになった口をイクスは無理矢理閉じた。
「でも、美味しく淹れられるかはわからな――」
「……私も、イクスさんが淹れたコーヒー飲みたいです」
「うっ」
　照れながら、ぎこちなく甘えるようなエレノアナの視線にイクスは言葉を詰まらせるしかない。
「わ、わかった……ちょっと待っててくれ」
　苦戦を予感しながらもイクスは台所に向かった。

「イクスくん、これ美味しくない」
「……美味しいのを飲みたかったら自分で淹れてください」
　自分でも微妙な味だとわかっていたイクスは目をそらした。本格派のコーヒー豆とコーヒーフィルターに大敗し、他でもないイクスの手によって生成されてしまった泥のようなコーヒーをやけっぱちな気分で飲み干す。
　苦くはない。むしろ味がない。色と香りのついたお湯のようだ。
　エレノアナにこれを飲ませないで済んでよかった、と少女が泣き疲れてソファで眠ってしまったことに安堵するイクス。イクスが台所で苦戦している様子をどこか楽しそうに眺めながら眠気と戦っていたエレノアナだが、淹れ終わる少し前に睡魔に負けて深く寝入ってしまっていた。
「エレノアナ、ぐっすり寝ていますね」
「無理ないわ。疲れたんでしょ」
「俺たちがいない間、ロードさんとどんな話をしていたんでしょうね？」
「さあ……ま、楽しい話でもしてたんじゃない？あ、ほっぺぷにぷに」
　レイラが寝ているエレノアナの頬を指で突いた。熟睡しているエレノアナが起きることはなさそうだ。
「レイラさん……エレノアナで遊ばないでください……」
「あはは！イクスくんもつついてみる？」
「……しません」
　エレノアナの頬は染み一つなく、ふっくらとしていて柔らかそうだ。レイラの指に押されて餅のようにぷにぷにとする頬っぺたに触ってみたくないわけがない。
　頷きかけたイクスは咳払いをして頬っぺたの誘惑を断った。
「そっかー、しないかぁ」
　特に残念そうでもない様子でレイラがイクスの淹れたコーヒーを飲む。ソファの背もたれに二人で寄りかかりコーヒーを飲んでいると、なんとなく、沈黙が落ちた。
　ちらりとイクスがレイラの方を見ると、ぼんやりと考え事をしているようだった。ロードのことだろうか。それとも、マテリアルのことだろうか。ひょっとしたらそれ以外のことについて何か思いふけるような物を抱えているのかもしれない。
　いつもおちゃらけているが、大人びた側面も隠し持つレイラの心は簡単には見通せない。そんなレイラの本心が知りたいとイクスは思った。衝動のように、レイラのことをもっと知りたいと思ったイクスは、気付けば口を開いていた。
「何か悩み事ですか？」
「んー……そう見える？」
「うーん。見える。……気がします」
「あはは、そっかぁ。見えるかぁ。じゃあ、悩んでるのかなぁ」
　イクスがレイラの方に向き直ると、レイラは目を伏せて微笑んだ。視線は合わない。陰りのような憂いがレイラの横顔に広がり、赤い瞳には郷愁が光った。
「悩みたいわけじゃないんだけどねぇ」
「レイラさんの話、聞きますよ」
「んー……そう、だねぇ」
　レイラは曖昧な返事を返した。また沈黙が落ちるが、イクスはただレイラの言葉を待った。

レイラの口から話してほしいとは思うが、無理に聞き出したいわけではない。
　そのまま会話が流れても構わないくらいの気持ちだったが、やがてぽつぽつとレイラが言葉をこぼしはじめた。
「……なんかさ、ロードさんのことで、パパのこと思い出しちゃって。私、パパが死んじゃったときは何もできなかったから」
　手の中に収めたマグカップを揺らすレイラ。黒いコーヒーがくるくると渦巻く。
　レイラの父が亡くなったのも最近のことだ。レイラの父はジェノサイド社の研究員としてマテリアルを完成させたが、最終的にはジェノサイド社の意向に逆らい、フィランダーに始末された。
「ねえ、イクスくん。ちょっとした昔ばなしを聞いてくれる？」
「もちろんですよ」
「マテリアルは元々ね、ママの形見だったんだ」
「え……どういうことですか？」
「マテリアル……って言っても、今のマテリアルとは全然違うから、マテリアルプロト、って感じかな。
　ママはね。いつも寝る前の私に“音”を聞かせてくれてたの。子守歌、って言って、声で“音”を奏でるの。綺麗で、優しい、音の旋律。私はその“音”が大好きだった」
「レイラさんのお母さんは、病気になったんですよね……たしか治るのが難しいような……」
　レイラは優しく頷いた。
「治療方法がない病でね。パパも色々頑張ったけどダメでさ……。ママが病気で居なくなって、うまく寝付けなくて泣く私のためにパパが作ってくれた“音”の鳴る箱。蓋を開けると、”音”が溢れる不思議な小箱。それが最初のマテリアル。
　ママの子守歌とはちょっと違うけど、私はパパの作ってくれた小箱が大好きだった。パパが私のために作ってくれた“音”だもん。それだけで、嬉しかった。聞いているだけで胸が暖かくなった」
　レイラの手が無意識に宙をなぞった。レイラの細長い手に収まる程度の小さな小箱。それがはじめのマテリアルだったのだろう。
　その“音”を思い出すようにどこか遠くを見つめていたレイラの表情がふと曇る。
「……だけど、私は気付かなかったんだ。ママが居なくなって寂しいのは私だけじゃなかったってことに。
　パパは小箱の“音”じゃ満足しなかった。ママの子守歌がどうしてももう一度聞きたくて、研究を続けた。私がもういいよ、って言ってるのに全然聞いてくれなくて。“音”の研究を続けて……」
　レイラはその先を言うことを躊躇って、唇を震わせた。
「それがフィランダーの目に止まった……」
　そしてレイラの父はフィランダーの元でマテリアルを完成させたのだろう。人間の“音”を奏でる、不思議な力を持つあの美しいクリスタルを。
「ごめん、私変な話してるね。何が言いたかったんだっけ……。パパが作ったマテリアルが、最初は私がきっかけって言いたかったんだっけな……。だから、なんか……うん。なんか複雑でさ。ごめん、うまく言えてないや。わけのわかんないこと言ってごめんね」

「いえ、レイラさんの話ですから、もっと聞きたいです」
「あはは！ほんっとに、嫌なやつなんだから！」
「えっ、嫌な……ええっ！？」
　嫌われてしまっただろうか。イクスが冷や汗を流していると、レイラが楽しそうにイクスの背中を叩いた。
「いっ……！？」
「誉めてんの！そこがイクスくんの“素敵なところ”ってね！」
「誉められてる気がしないんですが……」
「あはは！気にしない、気にしない！！」
　笑いながら、よいしょ、と勢いよくソファの背もたれから離れるレイラ。話は終わりらしい。ぐっとコーヒーを飲み干したレイラは先ほどより気分が浮上しているように見えた。
「ね、イクスくん」
「はい」
「ありがとね」
「俺はなにも……」
　イクスは何もできていない。気の利いた返しもできず、ただ黙って聞いていただけだ。
「ううん。イクスくんに話して、なんかスッキリしちゃった。抱え込むってよくないわね。ふふふ、今ならすっごいもの作れちゃいそう」
「あははは……」
　レイラがすごいものと言ったらとんでもないものができあがりそうだ。本当に籠りきりで研究をはじめたら、エレノアナにも手伝ってもらって監視しようと心に決めるイクス。
「無理に考えないようにするから、ダメだったのかもね。私、パパが居なくなっちゃったのが思ってたより寂しかったみたい。だから、悲しいことを誤魔化すみたいに何かしなきゃ、って、必死に考えてた。マテリアルをこの世界から早くなくさなきゃ、って」
「レイラさん……」
「誤魔化してちゃダメだね。ほんとに」
　ふとイクスが思い出したのはレイラの潤んだ瞳だった。エレノアナが泣いていた時、レイラも何かを堪えているように見えた。
「……あの、レイラさん。泣いても、大丈夫ですよ。俺、誰にも言いませんから……」
「そーゆところ！ほーんとバカね」
　レイラが目を細めて、ご機嫌な猫のように笑った。
「そういう時は黙って抱きしめるのよ」
「え。ええええ！？いや、その……それは、えっと……」
「何、私を抱きしめるのは嫌？」
「嫌なわけじゃ！だけど……」
　その服だと胸が……。こぼれそうになった一言を慌てて飲み込む。改めてレイラの大胆な服装を意識してしまい、慌てて目をそらすイクス。
　クスクスと笑うレイラには何かを察知されている気がする。
「ふふふ、イクスくんもまだまだね」
「……」
　なんとなく悔しい気持ちで、イクスは黙って明後日の方向を向いた。

HARMONIX PART2-4『ティアの孤独』

　翌朝目覚めるとエレノアナがむくれていた。
「イクスさんのコーヒー……」
　頬は膨れているが、昨晩よりは随分と元気そうにみえた。
「また、いつか淹れるさ。……たぶん」
　恨めしげな視線からそっと目をそらすイクス。
　誰だって、一度した失敗は二度もしたくないものだ。二度目も失敗する未来が見えているときは特に。
「……イクスさん、パパが嘘を吐く時の顔とそっくりの顔してます」
「うっ」
「うふふ、淹れてあげればいいじゃん。たまにはああいう味もいいわ」
「昨日は美味しくないって言ってたじゃないですか」
「うん。目が覚めるような味よね！」
「結局美味しくないってことじゃないか……」
　事実とは言え、そんな何度も言わなくていいじゃないか。ちょっぴり悲しい気持ちでイクスはため息を吐いた。
「そんなことより、これからどうするかの話をしよう」
「そうね。エレノアナちゃんにも話さなきゃいけないことがあるし……」
「私に、ですか？」
　キョトンとするエレノアナ。ロードとの別れから立ち直りはじめたところのエレノアナをそっとしておきたいところだが、タヌタを探す途中にイクスたちが見た光景を話さないわけにはいかないだろう。
　街外れで見つけたマテリアル製造施設について二人はエレノアナに説明した。マテリアルが作られ続けていると聞いたエレノアナはやはり不安を露わにする。
「マテリアルが……？ジェノサイド社はなくなったん、ですよね……？」
「そのはずだ。だけど残党が居るのかもしれない。前に会った、機動隊服の男は覚えてるか？」
「えっと……服屋を出た時の？」
「ああ。ジェノサイド社の治安部隊だとか言ってた奴だよ。あいつが居たんだ」
「単なる残党かどうかは、わからないけどね」
　どこか憂鬱そうにレイラは言った。
　どういうことかとエレノアナとイクスが問いかけると、レイラは困った顔をした。
「妙に統率が取れてたなって。あの男、ゲイスだったっけ……あいつらをまとめてる奴が居るみたいだったから」
「フィランダー以外の、ジェノサイド社の幹部が残党を率いているという可能性は？」
　イクスはかつてジェノサイド社に勤めていたが、幹部勢の話に詳しいわけではない。ただの警備員だったのだ。ジェノサイド社のトップシークレットであるマテリアルの製造に関わっていたレイラの方が上層部については詳しい。
「うーん。マテリアルの売買はほとんどフィランダーが一人で進めていたはずなのよ。あいつ、自分以外の誰かを信頼できるような奴じゃないしね。……だから、本社にあったマテリアルの製造装置を壊せば、二度とマテリアルは作れないと私は思ってたんだ」

　かつてイクスたちの前に立ちふさがり、エレノアナをマテリアルにしようとしていたジェノサイド社の幹部フィランダー。目的のためには手段を選ばない冷酷な男だ。
　イクスたちがジェノサイド社を倒壊させたときにフィランダーは失脚したはずだが、彼が残したマテリアル研究はまだ生きている。それも、本社があった都市から離れたこんな山奥で、マテリアルを製造する施設が稼働していたのだ。あれだけ大掛かりな施設を数週間で作ることは不可能だろう。フィランダーではない何者かの手によって、マテリアルはずっと作られ続けていたのだ。
　フィランダー以外にもマテリアル売買を進めようとする者が居ると思うと、イクスの顔が自然と強張る。
「フィランダーには実は協力者がいた……ってことですかね……」
「もしくは、黒幕ね。ゲイスの口ぶりじゃ、フィランダーの相棒っていうかボスって感じだったもの」
　あの、とエレノアナが控えめに手をあげた。
「フィランダーのボスってことは、ジェノサイド社の社長さんじゃないでしょうか？」
「それがねぇ……死んでるよのねぇ」
　レイラはあえて軽い口ぶりを選んでいるようだった。困ったように大げさに肩をすくめる。
「フィランダーって、どこか他所から幹部として招かれたらしいんだけど。招いた当時のジェノサイド社のトップは、フィランダーが来てから数か月で亡くなっちゃったの」
「それって、フィランダーに……？」
　イクスは不吉な予感を覚えた。イクスの予感を肯定するように、レイラは皮肉げに言い放つ。
「さあ？“事故死”らしいよ？」
「……真相は闇の中、ってことですか」
「ま、その後も幹部連中にパタパタ不運が起きてね。ジェノサイド社の実権はいつの間にかフィランダーの手の中に転がりこんでいた。ここまで来ればみんなおかしいことはわかっていたけど……それを言えば、消されちゃうからさ」
　フィランダーに逆らった者には死が与えられる。イクスの同僚でも、彼の不興を買って命を落とした者が居る。あまりにも横暴なやり口だったが、逆らえる者が居なかったからこその圧政だったのだろう。
「じゃあ、フィランダーはいったいどこから来たんですか？ジェノサイド社に来る前は一体何を？」
「それを知ってた人間は、全員もう生きてないわ」
　レイラは静かにそう言った。
　マテリアル研究の被害者はマテリアルにされた者たちだけではない。重々しい事実に三人は黙り込んでしまう。
　その沈黙をおもむろに破ったのもまた、レイラだった。
「……それに、イクスくん、気付いてた？施設の入口」
「入口？何かありましたっけ？」
「印があったの。丸で囲まれた、螺旋……遺伝子みたいな形をした……」
　そんな模様、あっただろうか。施設の入口を思い出そうとするイクスだが、そこに注視した記憶がない。
「いえ。見ていない気がします」

「そっかぁ。あそこにあった模様、ジェノサイド社のマークじゃなかったのよ。だから気になってて さ……覚えておいても損はないかもね」
　さらさらと紙に模様を書きつけるレイラ。ひとねじりされた短い遺伝子図が丸に囲まれたシンプルな模様だ。生命の設計図を小さく囲い込んだその模様の意味はわからない。だが、確かに覚えておいて損はないように思えた。
「で？これからどうする？マテリアルを作り続けている施設を放っておくわけはないよね？」
　レイラの提案にエレノアナもイクスも頷く。
「イクスさん、レイラさん。マテリアルにされた人たちも元に戻してあげたいです」
「ああ。だが、敵の正体は知っておきたいな……」
　施設に再び向かい、暴れ回ることは簡単だ。だが、マテリアルを作り続けている者の正体がわからないままではすっきりしない。
「あの黒いドレスの女の子なら何か知っているかもしれない」
　ぽつりと漏らしたイクスにエレノアナが目を瞬かせる。
「ロードさんのマテリアルを奪おうとした子ですか？そういえば、ジェノサイド社に警戒されていた女の子って、あの子ですよね……？」
　ロードの屋敷に向かう前に見た、ジェノサイド社の顧客情報にあの少女の情報は混ざりこんでいた。マテリアル所持者を襲い回っている、ジェノサイド社の警戒対象だ。
　直接対峙した後も彼女がマテリアルを奪おうとする理由はよくわからない。だが、どうにも目当てのマテリアルがある様子だった。探しているマテリアルでなかったからタヌタは見逃されたのだろう。
「ああ。たしか、ティアって言ってたかな。彼女はゲイスたちに追われているみたいなんだ」
　ゲイスらと何らかの因縁を抱えているあの少女なら、イクスたちの知らない情報を握っているかもしれなかった。
「それに、妙なマテリアルも持っていたしな……」
「黒いマテリアルですね。とても悲しくて、苦しい“音”を奏でる……」
　エレノアナは痛ましげに顔を歪めた。
「妙な力を持つマテリアルだったな……エレノアナはあのマテリアルの声も聞こえたのか？」
「うん……たぶん、聞こえました。嵐の“音”が混じっていて、よく聞こえなかったんですけど……。でも、小さい女の子が泣いている声がしました。“傷付きたくない”、“傷付けたくない”。“誰か助けて“って叫ぶ声が」
「そうか……なら助けてあげないとな」
「はい！もしまたあの黒いドレスの子に会えるならですけど……」
「みょーにマテリアルの力を使いこなしてたわよね、あの子。武器にみたいにさ」
　レイラはどこか不本意そうに言った。マテリアル開発者の娘として、武器のように扱われるマテリアルが面白いはずもない。
「あの黒いマテリアルも助けたいです」
「そうね、私たちがゲイスたちを調べる中でまた必ず出てくるでしょ。きっと無関係じゃないはず」
　そう言って、気分を切り替えるようにパン！とレイラが手を打った。
「じゃあ、一度街で情報収集しましょうか。詳しそうな人に心当たりもあるし」
「「詳しそうな人？」」

　レイラの言う心当たりが誰の事かわからず首を傾げる二人。エレノアナと並んでキョトンとするイクスを見て、レイラはくすくすと笑った。
「忘れちゃった？居たじゃない、私たちに施設のことを教えてくれた人」
「……あ」
　そういえば、イクスとレイラに施設のことを教えてくれたのは謎の派手な男だった。名も名乗らずに、情報だけ押し付けて風のように去っていた男を思い出す。あの派手さなら、街で聞き込めば居場所くらいわかりそうだ。
「あの人からもうちょっと詳しい話を聞けないか調べてみましょう！」
「そういえば、レイラさん……あの人ってもしかして……」
「さあ？本当にイクスくんが考えてる通りかどうかは、本人に聞かないとわからないわね。そういう意味でも、もう一度話を聞きに行きましょ」

三人は街に降りるべく、さっそく支度をはじめた。
しかし、結局イクスたちは謎の派手男の居場所を聞き込むことはなかった。キャンピングカーのドアを弱々しく叩くノック音が事態の急転直下を告げる――。
「誰か……誰かいませんか……！助けてください……！お願い、誰か……！」
車のドアの向こうから聞こえた声に三人ははっと顔を上げた。
「今行きます！！」
「ちょっと、エレノアナちゃん！」
迷いなくドアを開けに行ったのはエレノアナだ。止めようと手を伸ばすレイラを横目に、イクスは太もものホルスターに手を伸ばす。ドアの向こうの切羽詰まった声からは厄介ごとの臭いがした。
いつでもエレノアナとレイラを守れるようにとイクスが構えていると、キャンピングカーのドアがエレノアナによって開かれる。
開いたドアから小柄な影が転がり込むのが見えた。
「！――伏せろ！！！」
ドアの向こうからキャンピングカーの中を狙う銃口が目に入り、イクスは叫ぶ。即座に反応したレイラが動いた。事態を飲み込めていないエレノアナに覆いかぶさるようにレイラはその場に倒れこんだ。
「きゃあ！！」
悲鳴をあげたのはレイラでもエレノアナでもない。キャンピングカーの中に逃げ込んだ小柄な人影だ。足を銃弾が掠めている。
ふくらはぎから血を流しながら、小柄な人影が奥へと這っていこうとする。地面に広がる黒いドレスの裾と長い白髪に一瞬、イクスの目が奪われる。苦痛に歪んだ紫の瞳と視線がぶつかった。見たことがある顔の少女がそこにいた。しかし、彼女の怯え切った目があまりにも予想と違っていて、戸惑いを覚えるイクス。
しかし戸惑いを他所に、イクスの指は違わずに引き金を引いた。逃げ込んできた少女を狙う銃口の少し下。引き金にかけられた人差し指をかすめるようにイクスは弾丸を解き放った。
「うぐっ！！」
狙い通りに敵が銃を取り落とす。
「何やってやがる、この役立たずが！！！！」
銃を落とした黒服の男を、酒に焼けたしゃがれ声が怒鳴りつけて蹴り倒した。黒いヘルメットを目深かにかぶったずんぐりむっくりとした図体が怒りながら、ぽてぽてと走ってくる。ヘルメットが少しばかり大きく、歩く度に位置がずれるのを直しながらその男はイクスを睨みつけた。
ゲイスだ。なら、追われているこの黒いドレスの少女はやはり、ティアだろう。ロードの屋敷でイクスたちを追い詰めた少女は今、弱々しくゲイスから逃げようと地面を這っている。脅威であった漆黒のマテリアルを持っている様子はない。
よく見ればゲイスの手には黒い石が握られていた。屋敷で見た時よりもかなりくすんでいるが、少女が持っていたマテリアルと同じものであるようだった。
「ははっ、どこに逃げてんだ！これさえ取り戻せばこっちのもんだろうが！おら、止まりやがれ！！！！」
ゲイスが黒いマテリアルを掲げる。稲妻のような光が走り、イクスははっと身構えた。
またあの呪いのような“音”がくる。嵐のような暴風と、悪夢を思わせる幼子の笑い声。もはや鳴りはじめる前から耳にこびりついた“音”がイクスをぎくりとさせた。

しかしゲイスが持つマテリアルは一瞬光りはしたものの、結局“音”を奏でることはなかった。掲げられた手の中でじっと黙り込んでいる。
「……」
間があった。
ゲイスがマテリアルを掲げた体勢のまま、何が起こったかよくわかっていないような顔をしている。やがて、“音”が鳴っていないことに気付き、苛立たしげにマテリアルを持つ手を振った。
「おい！鳴れ。鳴れ！！！何黙ってんだ！！！！なんとか言えよ、オイ！！！」
何度もゲイスがマテリアルを振りかぶるが、うんともすんとも言わない。
やがて苛立ちが限界を超えたのか、ゲイスはマテリアルをその場に投げ捨てた。そしてその上に足を振り下ろした。
「この！このっ！！本当にお前は役立たずだな！！マテリアルになっても何の役にも立ちやしねぇ！！」
まるで子どもが起こす癇癪のようだ。気に入らない玩具に八つ当たりをする子どものように、ゲイスは何度もマテリアルを踏みつける。何度も足蹴にされた漆黒のマテリアルが土に汚れ、輝きを失っていく。
命の輝きを失い、死んでいってしまう。不吉な予感にイクスは息を飲んだ。
「やめて！！！！！」
エレノアナが飛び出して、ゲイスを止めようとした。間一髪でレイラがその動きを止める。
外に居るのはゲイスだけではない。銃を構えた黒服の男たちが何十人と控えていて、キャンピングカーはすっかり囲まれてしまっている。
向けられた銃口が見えていないかのようにエレノアナは必死に黒いマテリアルへと手を伸ばした。
「やめてください！！痛いって言ってる！！やめて、って！助けてって！！！」
「はぁ？ただの石ころがそんなこと言うかよ！こいつはただの！役立たずのクズ石だ！」
「違う！！！！その子は人間です！！！！！」
「訳のわかんねぇことを言う嬢ちゃんだな。うるせぇんだよ、黙りやがれ！！」
「どうして聞こえないの！！！泣いてるのに！痛いって！やめてって――えっ？」
不意に、エレノアナが驚きの声をあげた。青ざめて、そんな……と呟く少女。
「どういうこと……？」
急に動きを止めたエレノアナにレイラがしっかりとしがみついていることをイクスは確認する。エレノアナとゲイスの会話が襲撃者たちの注意を持っていった中、こっそりと移動していたイクスにレイラだけが気付いていた。イクスが運転席にたどり着いたことに気付いたレイラはエレノアナにさらに強く抱き着き、イクスに向かってゆっくりと頷く。
イクスは頷き返し、アクセルを踏み込んだ。
「あーーー、クソッ！お前ら！！！車ごと蜂の巣にしてやれ！！！！！」
ゲイスの命令に黒服の男たちが戸惑う気配があった。その戸惑いの一瞬がイクスたちを救った。キャンピングカーに加速の猶予を与え、タイヤが土埃をあげて回りだす。
車の正面にも黒服の男たちがいたが、イクスは構わず人垣の中に突っ込んだ。
迫りくる大型車に黒服の男たちが逃げ惑う。慌てる襲撃者たちを尻目に、扉を開けっ放しのままキャンピングカーが進む。
ゲイスの怒声を聞きながらハンドルをさばいて黒服の男たちを振り切るイクス。銃弾が来ないことを確認してから、レイラが慎重に車のドアを閉めた。

黒いドレスの少女は深々と頭を下げて礼を言った。
「助けていただいて、ありがとうございました。本当に……みなさんに助けてもらっていなかったら、どうなっていたことか……」
打ち抜かれた少女の足には包帯が巻いてある。手当を終えたエレノアナが薬箱に消毒液や包帯をしまい込んだ。
「無事でよかったです。えっと、あなたは……」
エレノアナもその少女に見覚えがあったのだろう。戸惑ったように首を傾げる。
イクスとレイラも同じ思いで黒いドレスの少女を見た。精巧な作りをした人形を思わせる、華奢な少女だ。その顔立ちは間違いなく屋敷でイクスたちを襲った少女と同じものだった。
しかし弱々しくはにかむ表情からは、前に感じた威圧感が消え失せている。鮮やかで妖艶な笑みを浮かべる少女であったはずだが、今の彼女は吹けば飛んで行ってしまいそうなほどに頼りない。その代わりに、穏やかな木漏れ日のような優しさが紫の瞳からあふれ出ていた。
「私は……そうですね。ティアと呼んでください」
やはり少女は不思議な言い回しで名を名乗った。
「ティア……じゃあ、君はやっぱり、ロードの屋敷で襲ってきた“ティア”なんだな？」
「あの時は、ごめんなさい。“ティア”のせいでみんなを傷付けてしまった……」
ティアは陰りを含んだ表情で謝った。
「あなた……ううん。あなたたち、って言った方がいいのかな。あなたたちって、双子ってわけじゃなさそうだね」
戸惑いがちに言ったレイラがちらりとエレノアナを見る。双子と言えば、確かに思い浮かぶのは二人の少女に分裂していたエレノアナのことだ。エレノアナは一時期、エレナとノアナという別個の人間に分かたれていた。マテリアル研究に巻き込まれて二人の人間に分裂してしまったエレノアナが居るくらいなら、複数の心を宿してしまった人間が居てもおかしくはないのかもしれない。
たとえば、一つの体で複数の心を持つような存在とか。
「多重人格……」
「はい」
ティアはイクスの呟きに迷わず頷いた。
「この“ティア”の体の中には、複数の人間の心が住み着いているんです。ティアは私たちに名前をくれなかったから、みんなティアって名乗ることにしてますけど」
レイラが眉をひそめた。
「そうなったのは、マテリアルにされかけたせいなのかな」
「……いいえ」
ティアは微笑んだ。涙は流していないのに、深く悲しんでいることがわかるような切ない微笑みだった。
「私たちは生まれつき、こうなんです。物心ついたときにはもう、心の中に色々な人格が住んでいて……代わりばんこで表に出て遊んでいました。今は、随分と寂しくなってしまったんですけど……」
「寂しくなった、って？」
イクスが尋ねるが、ティアは曖昧にほほ笑んだまま答えなかった。

「でも、みなさんにお会いできてよかった」
　ゲイスから逃げながら、イクスたちを探していたのだとティアは語った。どういうことかとイクスたちが尋ねると、言い出しづらそうに目を伏せる。
「それが……あの子……タヌタくん、でしたよね。彼がさっきの人たち……ゲイスたちに連れ去られてしまったんです」
「えっ！？タヌタくんが！？」
　エレノアナが真っ先に驚いたおかげでイクスは声を出さずに済んだ。
　タヌタと別れたのは昨日のことだ。そのわずかな時間の間に何があったのかと疑問を抱くイクスたち。ティアは肩身が狭そうに、さらに俯いた。
「ごめんなさい……たぶん、私のせいです……。“私たち”がタヌタくんを見逃したから……それで、何かあると思い込んだゲイスが私を呼び出す餌としてタヌタくんを攫ったんです」
「何かあるって……そっか。あなた、マテリアルを集めてるんだっけ。それで唯一見逃したのがタヌタくんだったってこと？」
　レイラが尋ねると、ティアは困った顔をする。
「集めてるってわけじゃあないんですけど……。でも、結果的にはそうなるのかな。マテリアルをお金で買うような人たちが、マテリアルを持ち続けていることが……私は我慢ならなかったから」
「だから、ジェノサイド社に警戒されていたんですね」
「……ええ。そうです」
　ティアは眉尻を下げてエレノアナに頷いた。
「でもあのクズ男に狙われた理由、それだけじゃないんでしょ？」
「……」
　レイラの問いかけはティアの胸に鋭く刺さったようだった。目を閉じ、深い葛藤を見せるティア。目を閉じてじっとしていると生気の乏しい色白の頬が際立ち、まるで等身大の人形のようだ。
「彼らが狙っていたのは、私の持っていたマテリアルです」
「あの黒いマテリアルのことよね？」
「そう……あれは人の心を操る力を持つ、危険なマテリアルなんです。わがままな子だから、扱いは難しいけど。その気になれば他人を思うがままに操ることだってできるんです」
　ロードの屋敷で使用人たちの意識をまとめて刈り取ったマテリアルの恐ろしさはイクスにも理解できた。
　心を縛る、とあの時のティアは言っていたが、身動き一つできずに意識を奪われそうになった恐怖をまだイクスは覚えている。イクスもレイラも立ち上がることすらできなかったのだ。何より、あの呪いのような“音”を長時間聞いていたら心が壊れてしまいそうだった。
「ティアは、あのマテリアルと心を通わせているように見えましたけど……？」
「さあ……。“私”でいるときは、あの子、言うこと聞きませんから」
　ぎょっとするような冷えた声色がティアの口から飛び出た。表情を変えることなく、淡々と少女は語る。
「可哀そうな子ですよ。マテリアルになる前から虐げられて、独りぼっちで。助けてくれる人もいなくって。泣いてるうちに心がどす黒く染まってしまった可哀そうな子」

――だから、あの子なんて大っ嫌い。
吐き捨てるように呟くティア。その紫の瞳には強い侮蔑が宿っていた。

――お願いします。タヌタくんを助けてもらえませんか。
ティアは辛そうに唇を噛み締めてイクスたちに頭を下げた。タヌタは前にイクスとレイラが訪れた、街外れの施設に連れていかれたらしい。
頼まれずともイクスたちは元よりそのつもりだった。ティアが面識のないはずのタヌタを気にかけていることに驚きつつも、三人は彼女のお願いに快く頷いた。
今はレイラがハンドルを握り、車を施設に向かわせている。エレノアナは先ほどまで何かとティアの世話を焼いていたが、二人分のココアを置いてレイラの様子を見に行った。マグカップを持っていったからレイラの分の飲み物でも届けに行ったのだろう。
残されたティアとイクスの二人の間に気まずげな沈黙が落ちる。
イクスが適当な話題を探していると、ティアの幼い顔立ちが気になった。両手でマグカップを握りしめる少女は子どもと言っても差し支えのないくらいの年齢に見える。そんな子が一人でジェノサイド社から逃げ回っていることにイクスは疑念を抱いた。
「ティアはどうして一人で旅をしているんだ？」
「それは……なんとなく、流れで……ですかね……」
ティアは言葉を濁らせた。
「そういうイクスさんたちは、どうして旅を？」
あまり話したくない事情があるのだろう。ティアは詳しく話すことなく、イクスに問い返した。
「“流れで”、かぁ。俺たちも流れで、かなぁ」
“流れで”という言葉が言い得て妙で、イクスは苦笑する。自分がマテリアルを人間に戻す旅なんかに出るとは、ほんの少し前までは思ってもいなかったのだ。
「？」
「笑ってごめん。旅に出る前のことを思い出して」
「旅に出る前のこと、ですか」
「ああ。エレナとノアナ……エレノアナに会う前のことを、ちょっと」
「そうですか……」
ティアは曖昧に笑った。
少しばかりの沈黙が流れた後、おずおずとティアがイクスに声をかける。
「あの……タヌタくんを人間に戻したのはあなたたち……ですよね？」
ティアは半信半疑な様子だった。
イクスはマテリアルの存在を知ってからほどなくして、マテリアルを人間に戻す方法であるキュアのことも知った。しかしティアはそうではなかったのだろう。
ティアがいつから一人で旅を続けているのかはわからないが、その間ずっと、マテリアルを人間に戻せるとは知らずに過ごしてきたのだ。マテリアルになってしまった人間をさっぱり元に戻せると聞いても、すぐには信じられないだろう。
「ああ。マテリアルになってしまった人間を元に戻す方法があるんだ」
「それは私にもできますか？」
「このキュアを使えばできる。一つしかないから、ティアにあげることはできないけど……」

　イクスはキュアを取り出し、ティアに差し出した。ティアは受け取らずに、鍵のようなそのアイテムをじっと凝視する。
「キュアを使いたい人が居るのか？」
　イクスがそんな質問を投げかけたのは、ティアがマテリアルを集めていることを思い出したからだ。
「たしか、ティアは探しているマテリアルがあるんだよな？」
「はい。大切な人が他人に利用されているのは嫌だったので。だから、みんなを集めようと思って……」
「みんな？」
　ティアが探しているマテリアルは一つではないらしい。疑問に思ったイクスが問いかけると、ティアは口を閉ざした。また曖昧に笑ってごまかそうとした少女は、うまく笑えずに口元を引きつらせる。
　あまり喋りたい話ではないらしい。
「言いたくないなら、良いんだが……」
「……詳しく話したら、私に協力してもらえますか？」
「マテリアルになった人を元に戻したい、ということなら喜んで。俺たちはそのために旅に出たんだから」
　安心させようとイクスは笑みを浮かべる。そんなイクスを見て、ティアは眩しそうに目を細めた。
「……多角的な性格の持ち主からは良質なマテリアルが生まれるという話を聞いたことはありますか？」
「確か、前に会ったジェノサイド社の幹部がそんなことを言っていたような……まさか」
　嫌な予感がイクスを襲う。
　そういえば、少女は自分の心中に住む人格たちについて、“今は、随分と寂しくなってしまった”と言っていた。
　一人の中に複数の心を持つティア。彼女をマテリアルにしたら、いったいどんな形になるのだろうか。
「多重人格も多角的な性格って言えそうでしょう？だからティアもマテリアルの材料として、とある男に狙われたんです。」
「ゲイスか」
　考えるまでもない。ゲイスの狙いは、ティアの持っている漆黒のマテリアルだけではなかったのだ。ゲイスとはじめて出会った時、あの男はレイラとエレノアナを狙っていた。今から考えれば、二人をマテリアルにして売り飛ばそうと目論んでいたのだろう。
　人をマテリアルに変えて、それを売りさばきながらも平然としていられる男の神経が信じられない。
　イクスはふつふつと怒りが沸き上がってくるのを感じた。
「あの男がティアも狙っていたのか」
「バカな人なんです。“ティア”をマテリアルに変えれば、ある会社の幹部にしてやるってそそのかされて。お金をたくさん積まれて。その気になったゲイスに“ティア”は捕まってしまいました」
　自分のことでもあるはずなのに、ティアは他人事であるかのように説明する。
「そして“ティア”は醜い石の姿に変えられてしまいました。しかし、“ティア”の複雑な心をすべ

てマテリアルにするのは難しかったようです。“ティア”のうちの何人かはマテリアルになることを免れ、こうして、“ティア”の体も石にならずに残っています」
「あの漆黒のマテリアルもティアの一人なのか？」
「そうですよ？」
　ティアは何故かくすくすと笑った。
「あの子は私たちの中で一番わがままで、悪い子なんです。みんなあの子が大嫌い」
「自分のことなんだろう……？」
「どうでしょうね。感覚的には、腐れ縁みたいな感じです。離れたいのに離れられない隣人。でも、同じところに住んでるから、嫌いでも、ある程度協力はしなくちゃいけない。だからあの子がマテリアルに変えられたとき、私は正直清々したんです。これで、あの子の顔をもう見なくて済む、って。……ふふ、自分と同じ顔なんですけど」
　ティアは笑い続けるが、まったく楽しそうには見えなかった。自虐的な笑みが痛々しい。嫌いだ、と言う度にティア自身が傷付いているかのようだった。
「清々したはずなのに……なんでか、あの子を放っておけなかった。石になって、もう戻らないって思ったら、なんででしょうね」
　ティアは笑みを消してうつむいた。
「……涙が止まりませんでした」
「ティア……」
「あんな泣き虫、消えちゃえ。どっか行っちゃえばいいって思ってたのに。あの子ったら、マテリアルになってまで泣くんです。寂しいから行かないで、って。私を置いていかないで、って」
　イクスはティアの持っていた漆黒のマテリアルが奏でる“音”を思い出す。悲痛な叫びのような“音”だった。辺り構わず喚き散らすように暴力的で、世界をすべて呪うかのように強いマテリアルだ。
　エレノアナは漆黒のマテリアルが泣いていると言っていた。あの歪んだ“音”はひょっとして、“ティア”の泣き声だったのだろうか。
「あの子が可哀そうになって……私は何度もあの子を壊そうと思いました」
「え……」
「だって、戻らないって思ってたから。一生、石になったまま力だけを利用されて、苦しむくらいだったら終わらせてあげようって。あの子も私が壊そうとしても嫌がらなかった。だから壊そうと思えばいつだって壊せたんです。でも壊せなかった……」
「生まれたときからずっと一緒に居るんだろう？家族みたいなものじゃないか。壊せるわけないさ」
「……あなたが思うような、単純な話ではないです。私たちの関係はもっと複雑で……あの子は本当は、壊された方が幸せなんです。人間に戻ったって、あの子は幸せになれないんだから」
　ティアは自分の考えを譲るつもりはないようだった。しかし、“でも……”と弱々しく呟く。
「でも……私の我儘を言うなら、あの子を私たちのところに帰してあげたいんです。あの子は一人だとずっと泣き続けてしまうから。あの子の笑顔を見ることなくお別れするのは、私も嫌なんです。お願いします、イクスさん。あの子を助けるために、あなたたちの力を貸してはも

らえませんか」
　ティアが深々と頭を下げる。迷うまでもない。イクスの答えは決まっていた。
「もちろんだ、ティア。俺たちはそのために旅してるんだから」
「あなたが嫌って言ったって、人間に戻すから。安心してちょーだい」
「あ、レイラさん」
　運転席からレイラが出てきていた。気付けばキャンピングカーは木々の影に停められていた。
「ついたわよ。一息ついたら、タヌタくんを助けに行きましょう。あと、“ティア”ちゃんたちもね」
　レイラは茶目っ気たっぷりにウィンクを飛ばした。

　敵地に忍び込む危険を考えると、武器のないエレノアナと怪我人であるティアを連れていくことはできなかった。
「イクスさんとレイラさんを待っていますから……絶対、帰ってきてくださいね」
　不安そうにしながらも、エレノアナは留守番を決めたようだった。ティアもその隣で控えめに頷く。
　だが、頷いた途端にティアは急に地面に崩れ落ちた。頭が痛むようで、苦しげにうめく少女の様子に三人は慌てた。
「ティアちゃん！？」
　エレノアナが隣にしゃがみこみ、少女の小さな肩を支える。
「……っさ……」
「ティアちゃん、大丈夫ですか！？」
「うるさいわ。“ちゃん”だなんて、気安く呼ばないでくださる？」
　凛とした言葉の響きは気高い女王のようだった。
　同じ人物から発された声のはずなのに、先ほどまでのティアとはまるで別人が喋っているように聞こえる。ギンッ、とエレノアナを睨みつける眼差しも、先ほどまでのティアのものであるとは思えない。
　人格が入れ替わったのだ。
　多重人格だと聞いていても、その変わりようにイクスは驚いてしまう。
「ティア……？まるで……別人じゃないか……」
「何を惚けたことを仰っているのかしら、黒い髪のお兄様。だからそう言っているでしょう？私たちは別の人間なの。たまたま同じ体を使っているだけ」
　しゃがんでいたティアが立ち上がると、尚更その雰囲気の違いが露わになる。伸びた背筋に艶やかな笑み。イクスはその立ち振る舞いに見覚えがある気がした。
「もしかして、君はロードの屋敷で会った“ティア”？」
「名を呼んでくださるのは嬉しいけど。そう何度も犬を呼びつけるように呼ばれるのも考えものね」
「犬って……」
「例えよ。まあ、あまりに気安いようでしたら、その喉笛、噛み切ってしまうかもしれないけど？」
「このティアちゃん……ティアさん？は物騒なんですね」

「だから、気安く呼ぶなと言っているでしょう」
　呆れたようにエレノアナを睨みながら、少し乱れた髪をかき上げて軽く整えるティア。
「私も行くわ」
「えっ……いや、その怪我じゃあ」
　ティアは止めようとするイクスを無視してキャンピングカーから降りた。足に負った怪我など感じさせない、しっかりとした足取りだった。
「おバカね。あなたたちも、二番目の私も。あの漆黒のマテリアルはティアの心なのよ。傍にこの体がない状態で元に戻したら、あの子の心が迷子になってしまうかもしれないじゃない」
「そ、それはそうかもしれないけど……だけど」
「二番目って今言ったけど……さっきまでいたティアが“二番目”の子ってことかな」
　慌てるイクスと対照的に、レイラは読めない笑みでティアを観察している。積極的に止める様子はなさそうだ。
「そうよ、あの子が二番目。頼りない次女でしょ。本人はしっかり者の長女のつもりだけど」
「じゃあ、あなたは何番目なのかしら？」
「五番目と呼ばれているわ」
「へぇ……じゃあ、三番目と四番目の子はマテリアルになったのね」
「そうねぇ……」
　ティアがくすりと笑う。
　あどけない表情に浮かぶ妖艶な表情にイクスは思わず背筋を震えさせた。敵意がないとわかっていても、五番目のティアはどこか不吉なものを感じさせた。
「死んでしまったわ。ずっと昔に」
「「「え？」」」
「さ、行きましょう。可愛いお魚さんが待っているわ」
　このティアは留守番をするつもりなどないらしい。イクスたちを置いて、勝手に森の奥へと歩きはじめてしまう。そう簡単には止められそうにない。
　あまりの傍若無人ぶりにイクスたちが唖然としていると、ティアが長い髪をたなびかせて振り向いた。
「何をぐずぐずしているの。置いていってしまうわよ」
「置いていくって……ティア、施設の場所わかるのか？」
「愚問ね、黒い髪のお兄様。私、ここから逃げ出したのよ？ついておいでなさい。地下牢に行くわ」
「地下牢……？」
　ティアはここにある施設でマテリアルにされたらしい。迷いない足取りは道を知っているからなのだろう。
「マテリアルを作る部屋の隣にある部屋から行けるのよ。攫ってきたマテリアルの材料はしばらくそこに閉じ込められるの。私のような半端にマテリアルになってしまった厄介者もね。ゲイスのことだもの。きっと、あの可愛いお魚さんもそこに居るわ」
　エレノアナとわかれたイクスたちは、ティアに連れられて再びマテリアル製造施設の奥深くへと向かった。

施設はどこか慌ただしい雰囲気に包まれていた。入口にあった閉鎖中を示す鎖はそのままだが、建物内に入るための扉の前には堂々と監視が立っており、施設の窓からは灯りすらもこぼれ出ている。敷地内では入口以外にも数人の警備員が物々しく辺りを見回っていた。
イクスたちは少し離れた茂みに隠れて様子を窺う。
「……なんか、探してる雰囲気だね」
レイラが小声で呟く。確かに、警備員たちは何かを探しているようにも見えた。
「私が来るとわかっているからでしょう。……それにしたって、予想以上の大捕り物ですけれども」
タヌタはティアをおびきだすためにゲイスたちに連れ去られたと言う。なら、ティアを捕らえるために警戒態勢を敷いていても不思議ではない。だがそう説明したティア自身が、不可解そうな顔をしていた。
「ティア。何か気になることがあるのか？」
「ええ……彼らは表立っては動けないはずだから、ここまではしないと踏んでいたのだけど。何か事情が変わったのかしら……」
「表立って動けないって、ゲイスたちのことか？」
「ゲイスだけではなく、この施設に居た者すべてよ。だって、ジェノサイド社は崩壊してしまったのでしょう？なのに、ここだけ正常に稼働していたらおかしいと思われてしまうわ。せっかく隠れていたのに、目立ってしまって仕方がない。それは彼らも歓迎しないでしょう」
「彼らって……もしかして、ゲイスたちはただのジェノサイド社の残党ではないのか？」
残党の割には妙に統率が取れているとゲイスたちを怪しく思い、ジェノサイド社を取り仕切っていたフィランダーのさらに背後に黒幕が居るのではと言っていたのはレイラだったか。傍で隠れているレイラを見ると、彼女の視線は施設の入口に向けられていた。
レイラの視線の先には円で囲まれたマークがある。遺伝子構造を象ったマークが施設の入口にひっそりと彫り込まれている。確かにあれは、ジェノサイド社では見たことのない模様だ。
「『ゲノム』」
ティアはぽつりと一言こぼした。
どういうことかとイクスとレイラが視線で問いかけると、ティアは説明を続けた。
「私も詳しくは知らないのだけど。フィランダーのことは知っていらして？」
「ああ……元々俺たちはフィランダーの居たジェノサイド本社に居たんだ」
「そう。あら？でも、あなた方がキュアを持っていると言うことは……」
ジェノサイド社が崩壊した理由は“事故”として報道されているが、ティアは何かに勘づいたように眉を上げた。探るようにレイラとイクスを見る。
「……いいえ。今はいいわ」
だがすぐに視線を施設に戻す。詮索しないことに決めたらしい。敵地の真ん前で説明することでもないので、イクスもほっと胸をなでおろす。エレノアナがマテリアルとして狙われていた話からはじめると、随分と長話になってしまう。
「フィランダーを知っているならば話は早いわね。彼は元々ゲノム社の幹部だったらしいわ」
「ゲノム……“遺伝子”、ね……」
レイラが再び入口のマークを見やる。ティアも頷いた。
「ええ、ゲノムのマークだと思うわ。フィランダーがここを作るとき、わざわざ彫らせたものだもの。きっと、ここをマテリアル研究の本拠地にするつもりだったのではないかしら」

「……研究基盤を作った後は、本社の方の研究所は用済みってことね。遅かれ早かれ、ジェノサイド本社自体も始末するつもりだったのかしら……」
　レイラは涼しい表情を作っていたが、怒りのようなものを目に宿している。レイラの父が始末されたのは、きっとここの研究所ができた後に違いない。キュアを開発していなかったとしても父が始末される運命にあったと思えば、レイラが心穏やかでいられないのも理解できた。
「さあ？何のためにフィランダーがジェノサイド社を隠れ蓑にしていたのかはわからないわ。でも、ジェノサイド社に隠しておきたかったものをたっぷりとここに隠したのは確かね。あの黒服の機動隊もその一つ。彼らはジェノサイド社の者ではないのよ。どこかにあるゲノムの根城から来たの」
「ゲイスもゲノムから来たのか？」
「……そうねぇ」
　イクスの問いかけにティアは少しだけ顔を曇らせた。
「彼はちょっとだけ特別なの。元々はジェノサイド社に所属していた、しがない平社員よ。別に大した取り得もないわ。そうね、大口を叩くことだけは昔から得意だったかしら？まあ、そんな男なのですけど。彼はある日、大失態を犯して解雇を宣告されたわ」
「解雇？でも、なんだか幹部になるとかなんとか言ってなかった？」
　レイラが疑問に思い、首をひねった。ティアはそんなレイラを見て薄く笑う。
「ええ。世紀の大逆転……と言うべきなのかしら。ゲイスは解雇されるはずだったのだけど、その寸でで、とても良いことを思いついたの。きっと、あの男の人生の中で最も優れた案だったのではないかしら」
　楽しそうにティアは笑う。侮蔑の色はない。だが、心底楽しんでいるわけでもなさそうだった。
「優れたマテリアルの材料を上層部に捧げる欲望と裏切りの計画。名誉と地位を求めてゲイスはこの施設で行われていた上層部の会議に飛び込んだの。マテリアルの材料……生贄を引き連れて。そこに居たのはジェノサイド社の者ではなく、ゲノムの者たちだったのだけど。そして、裏切られた生贄の子羊が……うふふ。ご存じのあの子よ」
「裏切られた……？」
　レイラはその一言が引っ掛かったように眉根を寄せた。
「待って、ティアとゲイスは前から知り合いだったの？」
「ふふふ。鋭いのね、赤い髪のお姉様。だけど、今はここまで。さあ、こちらへ」
　ティアは何故か施設から離れる方向へと進みだした。引き留めようとしたイクスの手をするりと抜けて、茂みの奥へと滑り込む。
「ティア、どこに行くんだ？」
「普通に入ったら、警備員たちに見つかってしまうでしょう？秘密の抜け道を教えてあげる。“私たち”がここから抜け出すときに使った道よ。ちょっと窮屈だけど、勘弁してちょうだいね」
　ティアはそれ以上の説明をするつもりはないようだった。

　ティアはイクスとレイラを下水道へと誘った。ここから地下牢へ侵入できるらしい。
「本当はゲノムの幹部たちが使う道らしいの。だから幹部以外は知らないわ。もちろん、ゲイスもね」

少女が説明した通り、敵と出会うこともなく三人は道を進む。突き当りに来たところでティアは足を止めた。目の前には地上へ向かう梯子が伸びている。
「ここよ。ここを上がればすぐ地下牢に出るわ」
「俺が最初に行く。レイラさん」
「うん、後ろの警戒は任せて。頼んだよイクスくん」
イクスが梯子を上りきると、出口はマンホールのようなもので蓋がされていた。音を立てないように蓋をずらし、空いた隙間から外の様子を窺う。
黒い廊下がぼんやりとした灯りに照らされている。ゲノム社の施設内で間違いなさそうだ。人の気配がないことを確認してからイクスは下水道から抜け出た。後からティアとレイラも続く。
長い廊下のような空間だった。壁にはずらりと空っぽの牢屋が並んでいる。ここが地下牢なのだろう。
奥の方には上階へ向かう階段が見えた。タヌタを閉じ込めているとしたら、あっちの方だろうか。イクスが階段へ向けて歩こうとすると、同じ方向から少年の声が聞こえた。
「誰か、そこにいるんですか？」
タヌタの声だ。
はっとなり、レイラとイクスはそちらへ駆け寄る。
「タヌタ！」
「タヌタくん！」
「イクスさんにレイラさん！？どうしてここに……」
「タヌタが攫われたって聞いて助けに来たんだ」
階段に最も近い牢屋の中にタヌタは座り込んでいた。あちこちに小さな擦り傷はあるが、元気そうに見えた。無事でよかったとイクスはほっと息をつく。
「ボクのことをいったい、誰から……？」
「私よ」
カツカツと靴音を立てながらティアが牢屋の前に立った。タヌタが驚いて目を見開く。
「あれ、あの時の女の子？」
「気安く“女の子”だなんて呼ばないでちょうだい。……ふぅん、思いのほか元気そうじゃない。安心したわ」
複雑そうにティアとタヌタが見つめあう。タヌタは敵であったはずの少女が何故ここにいるのか気になっているようだった。ティアの方はなんとも言えない表情でタヌタを見ていた。
二人の視線に割り込むようにレイラが牢屋の入口に近づき、手をかける。軽く引っ張ってみるレイラだが、当然のように鍵がかかっていた。
「とりあえずこの牢屋を開けないとね。うーん……爆破しちゃう？」
「レイラさん、それ中に居るタヌタは無事ですか？」
「もう、そんな危ないことしないってば！吹っ飛ばすのは鍵のところだけよ」
「意外と荒っぽいのね、お姉様は。でも困ったわね……あのマテリアルさえ奪われていなければことは簡単だったのだけど……」
ティアの言っているマテリアルとはあの漆黒のマテリアルのことだろう。この施設内にあるだろうかとイクスが考えていると、あ……とタヌタが声をあげた。
「タヌタ？どうかしたのか？」
「あ、あの……。えっと……」

　タヌタは何故か迷うような素振りを見せた。ちらりとティアを窺うように見上げる。
「あの……君にとって、あのマテリアルは大事なものなんだよね？」
「何かしら、急に」
「ねぇ、大事なもの、って思っていいんだよね？」
「……酷い質問をするのね。私にそれを答えさせるのは酷だわ。ええ。でも、ええ。あの子は私の大切な子だわ」
　ティアは不服そうに頷いた。
「……そっか」
　するとタヌタが立ち上がり、鉄格子まで近づいたかと思えば、突然その鉄格子を上りはじめた。両手を器用に使い、上へと上っていく。
　何事かと三人が見ていると、タヌタは何かを取って地面に降りてきた。
「じゃあ、これ。君に返すよ」
　タヌタが差し出したそれを見て、ティアがふらりと鉄格子に近づき手を伸ばす。
　タヌタはマテリアルを持っていた。禍々しいほどの黒一色に染まったマテリアル。ティアが持っていた時よりも少しくすんでしまっているようにも見えるが、ゲイスが奪ったマテリアルに間違いない。
「ど、どうしてこれを！？」
　ティアが驚いて声をあげる。信じられないものを見たかのように戦きながら、壊れ物に触れるような慎重さで少女はマテリアルを受け取った。
　タヌタはニッと笑う。
「盗んだ！」
「どうやって！？」
「このマテリアルを持ってたおじさんが一人で見張りに来たんだけど。そのまま寝ちゃったから、その隙に盗っちゃった。
　それで、咄嗟に鉄格子の上に隠して、おじさんを起こしてみたんだ。黒いドレスの女の子がマテリアルを持ってっちゃいましたよ、って。おじさんはそれを信じて、侵入者を探しに行っちゃった。怪しまれもしなかったから、隠さなくてももしかしたらバレなかったかもね」
　おじさんと言われているのはきっとゲイスのことだろう。油断した隙にタヌタにマテリアルを奪い返されていたらしい。
　盛大ないたずらが成功したように胸を張るタヌタにレイラが感心の声を漏らした。
「それで入口の方が慌ただしかったのね……ティアがもう侵入していると思ったから……」
「せっかく奪ったマテリアルを子どもにまた奪われるなんて、相変わらずのおまぬけさんね、あの男は……」
　ティアはため息を吐いて、少しだけうなだれた。
「まあいいわ。礼を言うわ、お魚さん」
「お礼はいいけど……お魚さんじゃなくて、タヌタって呼んでほしいなぁ。ボクもう魚じゃないよ」
「あら。でもあなたの心はお魚さんのままじゃない。さあ、少し待っていなさい。牢屋の鍵を取ってきてあげるわ」
　そう言って、ティアは階段を上っていた。
「待ってくれ、ティア！一人じゃあ危ない」
「お黙りなさいな、黒髪のお兄様。お気持ちは嬉しいけど、一人で十分よ。いえ、二人で十

分、と言うべきかしら？」
　イクスの制止を軽く受け流し、階段の上の部屋へと消えていくティア。無鉄砲にも思えるティアの行動が心配になり、イクスはため息を吐く。
「大丈夫かな……」
「まあまあ。なんか考えがあるみたいだし、私たちは大人しく待っていましょ」
　レイラが見越した通り、ティアは無事に地下牢に帰ってきた。無傷であることに安心するイクスだが、少女の隣に黒服の男が居ることに気付いて警戒を高めた。
　ゲノムの社員だろう。男は異様に無口だった。階段をふらふらと降りる男の手には鍵束が握られている。まるで何かに操られているかのような足取りだった。
　——操られている？
　イクスはティアを見る。
　その視線だけで、ティアはイクスが正解に至ったことに気付いたようだった。唇にうっすらと邪悪さを乗せて、妖艶に笑う。
「正解よ、黒い髪のお兄様。この子は今、私のお人形さんなの」
　レイラが進み出て、ティアの操る男から鍵束を受け取った。地下牢の鍵なのだろう。この束の中の一つが、タヌタの牢を開ける鍵になる。
「うまくいったみたいね。心を操るマテリアル……だっけ。前にティアに襲われたときは、ただ苦しいだけだったけど」
「本来はこういう使い方をするマテリアルなのよ。おぞましい“音”で人を虜にし、言いなりの傀儡にする。あの子がこんな力を持つようになるなんて、皮肉よね」
　二人の会話を聞いていたタヌタが首を傾げる。
「ヒニクって、どうして？」
「この子は傀儡……お人形さんのような人生を生きてきたの。そんな子が、人をお人形さんにしてしまう力を持った。それを皮肉と言わずに何と言うのかしら」
「お人形さんみたいな人生……だから、その子は泣いてたの？」
「あら。お魚さんにはあの子の泣き声が聞こえたのかしら？」
「うーん……。おじさんが寝てた時にね、マテリアルの“音”が聞こえたんだ。それが泣いているみたいだったから……。それで、おじさんと一緒に居るのが嫌なのかな、って思って盗っちゃったんだ。可哀そうだったから……」
「一緒に居るのはきっと、嫌ではないと思うわよ」
「そうなの？」
「一緒に居るのに、見てもらえないのが辛いだけ。可哀そうなのは違いないけれどもね」
　ティアは慈しむように漆黒のマテリアルを両手で包み込んだ。五番目のティアを名乗る彼女にしては珍しい、愛しいものを見るような優しい表情だった。
「ほんと……困った子」
　カチャン、と牢が開く音がした。レイラが目当ての鍵を見つけて、鉄格子の扉を開けたのだ。ティアが操ることをやめたらしく、鍵束を持ってきた男がバタリと地面に倒れる。
　タヌタは解放できた。できればここの施設を停止させ、マテリアルにされた人たちを元に戻したいところだが、ここはいったん戻るべきだろう。子どもであるタヌタを連れていてはあまり派手には動き回れない。
「レイラさん」
「ええ。二人とも、一回戻りましょう」

イクスたちが戻ろうとした、その時だった。
誰かが階段を下りてくる音が聞こえてくる。複数の足音が聞こえてくる中、何かにいら立っているようにガチャガチャと激しい足音が目立った。
イクスの警戒を強めさせたのは、漂ってきた匂いだ。吸い込むと喉に引っ掛かりそうな灰の匂い。イクスと同じく、その匂いに気付いたティアが途端に表情を変えた。険しい目で階段の方を睨みつける。
そしてその男はやってきた。
「ティアじゃねぇか……はは！戻ってきてたんだな！！手間ぁ、かけさせやがって」
サイズ違いの黒いヘルメットを揺らしながらゲイスが笑う。口元にくゆらせていたタバコを捨て、足で踏みつぶした。じゅっ、と地面と靴裏に挟まれたタバコが音を立ててへし曲がる。
ゲイスは相変わらず手下のようにぞろぞろと何人もの黒服の男を付き従えている。
怪我をしているティアとタヌタを守りながら奴らを相手にできるだろうか。イクスはホルスターに手を伸ばしながら計算を巡らす。レイラと二人で時間稼ぎにしばらく徹すれば、ティアとタヌタは来た道から逃げられるだろう。そこからは、死に物狂いでなんとかするしかない。
厳しい戦いになると腹をくくり、構えたイクスだったが、そのイクスの横を悠然と黒いドレスがすり抜けた。ティアが凛と背筋を伸ばしてゲイスの真正面に立つ。
「……ばかな人」
ティアが哀れむようにゲイスに言う。
「私はあなたの“ティア”じゃないわ。私は五番目の――」
「知るかよ。お前のごっこ遊びはクサイんだよ！心の“お友達”に順番なんざつけて、あだ名みたいにして、何が楽しいんだか」
「……相変わらず、あなたの心に響く言葉はないのね」
ゲイスはティアが多重人格であることを理解していない様子だった。ティアが演技をして人格を使い分けていると信じているらしい。
もしそうだとしたら、ティアは天性の役者だと言えるだろう。だが、ゲイスの言葉に傷付いたように笑むティアの姿を見てしまうと、イクスはとても疑う気持ちにはなれなかった。
「私たちは本当に、違う魂を持っているのよ。何度も言っているのに、わからないのね。ティアの精神の複雑なあり方には縋り、マテリアルにしようとしたのに……」
「いいマテリアルが取れりゃ俺はなんでもいいんだよ！ははっ、昔から一人芝居が上手い奴だったからなぁ！もしかしたらと思ったら、本当に芝居の数だけマテリアルができやがった！！グズのお前が役に立つ日が来るとは思わなかったぜ！」
「お前……」
何故そこまで人の心を傷付けられるのか。イクスは低く唸る。
「ティアはお前の道具じゃない。一人の人間なんだぞ。それを、どうしてそんな風に言えるんだ……！」
「はぁーーー？人間だぁ？何もしらねぇやつが何言ってんだ。部外者はすっこんでろ、って……お？」
心底馬鹿にしきった声をあげるゲイス。イクスに視線をよこすと、そこではじめて見覚えのある青年であることに気付いたらしい。
ゲイスはにやりと下卑た笑みを浮かべた。
「誰かと思えば、綺麗なねーちゃんに囲まれてた兄ちゃんじゃねぇか！！あの緑の綺麗な髪の女はどうしたよ？そこのティアに乗り換えたのか？ははははは！」

　否定してやる優しさすら沸き上がらないような下衆の勘繰りだった。他人を馬鹿にしきった不愉快なゲイスの笑いにイクスは顔をしかめる。
「何がおかしいんだ……」
「いやぁ」
　ゲイスは嫌らしく笑い、ティアの持っている漆黒のマテリアルを指さした。
「心の一部が石くずになっちまった女にハマるなんざ、兄ちゃんも趣味が悪いと思ってなぁ」
「お前がティアをマテリアルに変えたんだろう……！！！」
「あ〜？なんだ、そんなことまで聞いてたのか。へへっ、ホントに物好きだな。まっ、そうじゃなくても、そいつは不気味で、使い道のねぇグズだよ。おいティア、よかったなぁ？お前みたいなグズを拾ってくれるやつがいて」
「ティアがグズなら、あなたはクズね。人としての心はないの？」
　レイラの声には確かな怒気が宿っていた。その手にはすでに銃が握られている。今にも飛び掛かりそうなレイラを止めたのは、ティアだった。
「いいのよ、赤い髪のお姉様。私は慣れているわ」
「慣れてりゃいいってもんじゃないでしょ！！！ティアも言われっぱなしでいるんじゃない！」
「いいの。……いいのよ、何を言っても無駄なのだから。わかりあえない人というものが、この世界には存在するの」
　視線をそらさずに真っ直ぐにゲイスを睨みつけているティア。しかしその瞳は深い悲しみに揺れていた。漆黒のマテリアルを握りしめる両手は痛みにこらえているようにも見える。
「仕方がないのよ……」
「やっとわかったのか、ティア！俺の手をわずらわせやがって……。お前が逃げ出したせいで俺は大恥かいたんだぞ！！ほら、とっととこっちに来い！」
　諦めたように呟いたティアにゲイスは嬉しそうに手を叩いた。
「今度こそ、お前を完全なマテリアルにしてやるよ！お前だって、石になった方が役に立てるんだ。嬉しいだろ？お前が完全なマテリアルになったら、ひひっ、どんな強いマテリアルになるんだろうな？」
「そう、そんなに楽しみにしていたの」
　ティアが一歩前に出る。まさか自ら捕まるつもりだろうか。イクスとレイラが緊張して見守っていると、ティアは毅然とした態度で腕を伸ばした。漆黒のマテリアルを持った手がゲイスの前に突き出される。
「でも残念。あなたが完全なマテリアルになったティアを見る日はないわ。――やりましょう、“ティア”」
　ティアはゲイスを睨みつけたまま言い放った。その目は怒りで燃えているように見えた。
「あなたはもう、昔みたいに無力なんかじゃない」
　黒いドレスが風を受けて翻る。パリッ、と小さく何かがはじけるような音がした。雷のような光がティアの体に纏わり付き、少女を神秘的な存在に変えていく。
　恐ろしくも美しい魔女のような佇まいでティアがゲイスたちの前に立ちふさがった。
　遠くから呪わしい叫びの嵐が聞こえてきた。漆黒のマテリアルが妖しく光り、壮絶な“音”を奏ではじめる。
　聞いているだけで苦しくなるような“音”にイクスは思わず胸を抑えた。崩れ落ちてしまいそうになるのを必死で耐えながら、ティアから目を離すまいと顔を上げ続ける。

だがティアの可憐な唇から吐かれたその言葉が聞こえてきた途端、イクスは己の耳を疑った。
「その力を存分に見せて差し上げなさい。――あなたの大事なお父様にね」

「ゲイスがティアの父親だって！？」
イクスは思わず驚きの声をあげた。
華奢な黒いドレスの少女とずんぐりとした体型の男を見比べる。似ているとこを見つける方が難しく、親子と言われてもにわかには信じがたかった。
だがそれ以上に信じがたい事実に気付き、イクスは言葉にできないほどの衝撃に襲われた。
「お前……自分の娘をマテリアルにしたのか！？」
金のために自分の子どもをマテリアルの素材にする人間が居ることはレイラから聞いてはいた。だがイクスはその話をどこか遠い話として聞いていた。実際に自分の娘を金と地位のために差し出した男を今、目の前にして、イクスは自分の世界が揺らぐような驚きを感じた。
家族の間には切っても切れない縁がある。少なくとも、イクスはそう思っている。時に暖かく、時にまどろっこしいような見えない絆がある。
それをこの男はどうして、容易く断ち切ってしまえるのだろうか。
「だから部外者は黙ってろってんだ！！テメェのガキをどうしようが、テメェの勝手だろうが！」
「そんな、身勝手な……ぐっ」
急に“音”の重苦しさが増し、イクスは顔をしかめる。
「ごめんなさい。少し、苦しいわよ。でも、すぐ終わるから……」
嵐の“音”がする。切なくも苦しい“音”に混じる、激しく風を切る嵐の音は確かに誰かが泣き叫んでいるようにも聞こえた。
漆黒のマテリアルが奏でる“音”を聞いていると魂が下の方へ、下の方へと引っ張られる感覚がした。大きさを増していく“音”にイクスはついに片膝をついた。レイラとタヌタもすぐそばで体勢を崩す。
ゲイスの後ろに居た黒服たちも同じ苦しみに苛まれているようだった。イクスたちよりも聞こえている“音”が強いのか、それとも精神力の問題なのか、バタバタと意識を失い倒れていく。
そんな中、不思議とゲイスだけは平然とその場に立っていた。突然倒れはじめた黒服の男たちに驚き慌てているものの、苦しんでいる様子はない。
「お、おい！？お前ら、なにふざけてんだ！起きろ、おい！起きろってんだろ！！！」
「……そう。本当に、あなたの心にはこの子の声が響かないのね」
ティアの言う通り、ゲイスには漆黒のマテリアルが奏でる“音”が聞こえていないようだった。ゲイスにとって、ティアのマテリアルは文字通り“ただの石”なのだろう。
ティアのもの静かな声が悲しげに響いた。
「ティア！！！テメェが何かしたのか！！！！また余計なことしやがって！！！！」
「あ――」
ゲイスがティアに向けて手を振り上げた。殴られると理解した瞬間、ティアは全身を強張らせた。避けようともせず、自分を庇おうとする動きすら見せず、茫然と振り上げられた手を見ている。

止めようと立ち上がろうとするイクスだが、まだ鳴りやまない漆黒のマテリアルの“音”が全身に重く纏わり付き、足を踏み出すことすらままならない。
このままでは――。
「ティア……！」
ティアが殴り飛ばされる未来を想像して叫ぶイクス。
だが、ゲイスの手が振り下ろされる寸前で、ティアの前に飛び込んできたものがあった。
それは小柄な影で、ティアの代わりにゲイスの手に殴られると、勢いよく吹き飛んだ。牢屋の鉄格子にぶつかり、崩れ落ちて、苦しそうにせき込む。
タヌタだ。タヌタがティアを庇ったようだった。殴り飛ばされた頬はすでに赤く腫れている。
「テメッ、このガキ！！！邪魔すんじゃねぇ！！」
自分の邪魔をしたのが捕まっていたはずの少年だと気付くと、途端にゲイスはいら立ったようだった。大声でタヌタに怒鳴りつけるが、当のタヌタ自身は飄々と立ち上がる。
「女の子に手をあげる男はダサイんだよ、おじさん」
「んだとコラ！！！！！」
ゲイスが顔を真っ赤にして怒り出す。
今にも暴れだしそうなそんな父親の様子に気付いていない様子で、ティアは茫然とタヌタの元に駆け寄った。
「あなた、どうして……」
「だって、泣いてたから……」
タヌタはちょっとだけ困ったように眉尻を下げた。
「え……」
タヌタに言われて、はじめて気付いたようにティアの目からひとしずくの涙が零れ落ちる。ティアは自分の手のひらに落ちた涙を、ありえないものを見るかのように凝視した。
「私……え？」
「大丈夫。ボクが君を守るから」
動揺するティアを背中に庇い、タヌタがゲイスを睨みつける。
「どうして……？私、あなたのおじい様に酷いことをしたのに……それに、マテリアルだったあなたにも……」
「あっ、そんなこともあったっけ。でも、男は女の子を死んでも守るものだから。そんな細かいことは気にしないよ」
胸を張って言い放つタヌタ。だが、すぐにむずかゆそうに頬を染めて、照れたように笑った。
「お父様の受け売りだけどね」
「いいお父様ねぇ。そこだけは」
「よくやったな、タヌタ。でも、タヌタだけにいい恰好をさせるわけにはいかないかな」
レイラとイクスも立ち上がり、ティアを庇うようにゲイスと対峙する。
漆黒のマテリアルの“音”は止んでいた。黒服の男たちは全員気を失っており、残る敵はゲイスだけだ。容赦をするつもりはない。
「お、おいおい……俺のケツにはやべぇ人がついてるんだ……俺に手を出したらその人が黙っちゃいねぇぞ！」
劣勢を悟ったゲイスがたじろぎ、後ろににじり下がる。逃走の気配を見せたゲイスの真横を

狙ってレイラが引き金を引いた。
　ゲイスの頬を銃弾が掠めていく。
「ヒッ！？」
「あらあら。その”やべぇ人”って、今すぐ駆けつけてくれるのかなぁ？」
「誰が来ようと、同じことだ。ティアは連れて行かせない」
「ひゅー、ひゅー！イクスくん、痺れるぅ！」
「茶化さないでくださいよ、レイラさん……」
　イクスを茶化しながらもレイラは獰猛な笑みを浮かべている。戦えそうにもないゲイス相手だが、容赦をするつもりはないらしい。いつもなら非戦闘員に手をあげるようなレイラではないのだが、今回ばかりは腹に据えかねているということだろう。
　イクスとしても同意見だ。己の欲望のためだけにマテリアルを作ってきたゲイスを見逃してやるつもりはない。
　レイラとイクスが意気込んだところで、その声は飛び込んでいた。
「いいなぁ」
　はじめ、イクスはそれが誰の声なのかわからなかった。ただ、反射的にうすら寒いものを感じて、身を震わせた。
「タヌタくんは楽しそうでいいなぁ。そっかぁ、タヌタのおじいちゃんは死んじゃったもんね。もう嫌われることもなくて、いいなぁ」
　幼い口調で、誰かが悪意を吐き出した。誰がそんなことを、とイクスは顔を強張らせる。振り向くと、ティアが驚いたように自分の口に手を当てていた。
　パリッ、と静電気のような音が鳴る。
「ティア……？」
　イクスが思わず声をかけると、ティアは慌てて首を振った。
「ち、違うわ！今のは私じゃなくて……で、でもあの子はマテリアルになってるはずなのに、どうして……」
　ティアが動揺した様子で自分の手の中のマテリアルを見下ろす。暗雲を閉じ込めたように、暗い闇がマテリアルの中で渦巻いていた。
　心臓のようにどくりと漆黒のマテリアルが胎動する。黒い雷のような光がマテリアルを覆い、暴れ回る。ティアの手のひらの上で荒れ狂っていた光はやがて腕を駆けのぼり、少女の全身を駆け巡った。
「あ……あああああああああああ！！！！？」
　悲鳴をあげるティアの体に雷が次から次へと入り込んでいく。光がいくつも重なり眩しさを増し、やがてはティアの全身を黒く塗りつぶした。
「ティア！！！！」
　イクスが手を伸ばすが、何かに弾かれたように吹き飛ばされてしまう。光はますます強さを増し、その場に居る者すべての視界を黒く塗りつぶした。
「まさか……マテリアルが暴走している！？」
　レイラの驚きの声がイクスの耳に飛び込んだ。
『パパも死んだら、ティアのこと大事にしてくれる？タヌタのおじいちゃんみたいに』
　くすくすとあどけない声が嘲るように笑う。悪意を孕んだ笑い声を聞きながら、イクスの意識は闇に飲まれていった。

小鳥のさえずりのような“音”が聞こえてくる。揺れる水面が奏でる美しい旋律。澄んだ湖の底から太陽を眺めるような、暖かな気持ちにイクスは包まれていた。
金色に光る何かがイクスに手を伸ばす。
「イクスくん！！」
何だろう、とイクスが手を伸ばすと、金色に光る何かがイクスの手を掴み返す。
すると青色の光が現れ、同じようにイクスの手をそっと掴んだ。
「イクス様……起きてください……」
揺れる水面の下でイクスはぼんやりとその二つの光を見上げていた。両手を取られ、上へと引っ張られる。
なんだか前にも同じようなことがあった気がしたが、うまく思い出せない。
金色の光と青色の光は寝ぼけるイクスを見て、楽しそうに笑った。
「「もう、イクスさん！！起きてください！！！！」」
重なった二つの声は、エレノアナのものによく似ていた。二つの色がイクスを沈んでいた湖の底から勢いよく引っ張り上げる。
水面から顔を出す寸前で、イクスは目を覚ます。
とてもいい夢を見ていたような気がしたが、目覚めた瞬間に忘れてしまった。少しだけ残念な気持ちでイクスは目を開けた。
「イクスさん！！！！」
すると、目の前にエレノアナの顔があった。蜂蜜のような金色と海のような青を混ぜ合わせた、澄んだ緑色の目が潤んでいる。いつかエレナとノアナの二人と見た奇跡の光景、“グリーンフラッシュ”に良く似ていた。
綺麗だ、とイクスはぼんやりする頭で考えた。
「き……」
「イクスさん！！！よかった！！！！」
幸か不幸か、イクスの口が思ったままのことを喋りだす前に、エレノアナがイクスに飛びついた。心底安堵したような様子のエレノアナにようやく、只事ではない何かが起きたことにイクスは気が付いた。
「あれ、俺は……あっ！ティアは！？それに、レイラさんとタヌタは……！」
雪崩のように、気を失う前に起きた出来事を思い出す。ティアが漆黒のマテリアルに飲み込まれてしまったはずだ。迸る眩しい光に飲み込まれて意識を失ってしまったイクスだが、一緒に居た他の仲間は無事だろうかと上半身を起こして首を回す。
そこはまだ、ゲノム社の施設の地下牢の中だった。マテリアルに飲み込まれる前のティアに昏倒させられていた黒服の男たちはまだ気絶している。
「おっはよー、イクスくん。私よりお寝坊さんだなんて、珍しいじゃない」
レイラはすでに目覚めていた。その隣でタヌタがほっとした顔をした。
「よかった、イクスさん。目が覚めたんですね」
どうやら目を覚ましたのはイクスが最後だったらしい。まだ少しぼんやりとする頭を抱えながら立ち上がるイクス。
「いったい、何が……」
「マテリアルの“音”に当てられたのよ、私たち。様子がおかしいことに気付いたエレノアナが迎えに来てくれなかったら危なかったかもね」

「エレノアナが……」
　目が合うとエレノアナがにっこりと笑う。何故かエレノアナに久しぶりに会ったような安心感があった。
「……ありがとう。助かったよ」
「すごいことになってたので、イクスさんたちが無事か気になって……追いかけてきちゃいました」
「すごいこと？」
「起きたらティアも、ゲイスもいなくなっちゃってさ。外で何か起きてるのかも……行ける、イクスくん？」
　レイラに問いかけられて頷くイクス。
「はい。行きましょう！」
　じゃあ、とエレノアナが施設内に続く階段を指さした。
「あそこから出ましょう。そうすれば、わかると思います」
　階段の麓まで来た時点で、イクスは違和感に気付いた。風が流れている。冷えた風が階段を沿って、地下牢へと流れ込んでいるようだった。
　妙な予感を感じながら階段を上ると、そこにあるはずだった壁や天井がない。施設を覆っていた黒い壁はなくなり、代わりに暗雲がたちこめる夜空が広がっていた。
　今にも雨が降り出しそうな空には奇妙な物体が浮いている。何かの建物だろうか。真っ黒い外壁はどこかで見たような気もするが、はっきりしたことはわからない。あちこちを何か輝く石のようなものに侵食されていて、全体像がはっきりしないからだ。石化は今も続いているようで、建物らしきシルエットが刻々と形を変えていく。
　何か別の生き物に生まれ変わろうとしているかのようだ。
　激しい稲光が時折走るその物体は、今にもはち切れそうな緊張感があった。巨大な爆弾が宙に浮いているような不吉な予感にイクスは襲われる。
「あれは、一体……」
　茫然とイクスが呟くと、レイラが悔しそうに答えた。
「たぶん、マテリアルだと思う。暴走してるけどね」
「マテリアル……じゃあ、あれはティアが！？」
「たぶんね。ここにあったゲノム社の施設を飲み込んで、丸ごとマテリアルに取り込もうとしているみたいね……」
　マテリアルが施設を飲み込みつくしたらどうなるのかはレイラにもわからないらしい。マテリアルの暴走自体、稀なのだ。だが、あそこまで強力な力を持つティアのマテリアルが暴れ出せばとてつもない被害が出ることだけは確かだった。街の真上にマテリアルの化け物は浮いており、街に被害が出る可能性も大いにあった。
　宙に浮かぶマテリアルの化け物に対して、イクスたちが何かできるかもわからない。だが、イクスたちはティアの元に向かうことに決めた。
「私も今回は行きますよ！もしかしたら、できることがあるかもしれない」
「ボクも……一緒に行っていいですか？」
　イクスは少し悩んだが、エレノアナとタヌタに頷いた。
「わかった。だけど危なくなったらすぐに逃げてくれ」
「「はい！」」
　さっそく向かおうとするイクスたちにレイラが声をかける。

「先に行っててくれる？後で追いかけるから」
「レイラさん？一緒に行かないんですか？」
「うん、ちょっと取ってきたいものがあって。私は一回車に戻るわ」
　何を取りに行くのかと問いかけると、レイラは少し困った顔をした。
「ティアのマテリアルは強いでしょ？だから、念のためね……」
　レイラが言葉を濁した理由は気になるが、時間がない。きっと、レイラのことだから必要なものなのだろう。後で追いかけると彼女が言ったのだ。レイラは必ず追いかけてくる。
　イクスたちはレイラと一旦わかれて、先にティアのマテリアルの元へ向かうことにした。

　街で一番高いビルをイクスたちは上っていた。宙に浮く巨大なマテリアルに届くかはわからない。だが、少しでも近い場所に向かおうとイクスたちは階段を駆け上がった。
　屋上まで出ると、黒い施設の壁が視界に飛び込む。施設の壁の材質を青色のマテリアルが蝕んでいる。建物の壁を食らったマテリアルは先端の方から少しずつ色を澱ませ、漆黒へと染まりつつあった。すべてが侵食されるまで、もうそんなに猶予はなさそうだ。
　イクスたちが近くで見ようと屋上の縁まで行くと、稲光が行く手を阻む。暗雲と雷がマテリアルの化け物を守るように空に渦巻いていた。

HARMONIX PART2-5『涙の解決』

「これが、ティアなのか……？」
　イクスは愕然と呟く。
「ティアちゃんですよ……また、泣いてる……。お父さんに、“置いてかないで”って……」
　エレノアナにはマテリアルになったティアの声が聞こえているようだった。轟轟と強い風が吹いている。これがティアの泣き叫ぶ声だとしたら、少女は今どんな思いで施設を食らいつくそうとしているのだろうか。
「エレノアナさんには、あの子の声がはっきりと聞こえるんですね……」
　そう言うタヌタもどこか痛ましそうな顔で耳を抑えていた。エレノアナほどはっきりとではないが、ティアの声が聞こえているらしい。
　宙に浮くマテリアルに近づいてきたのはイクスたちだけではなかった。黒一色に塗りつぶされたヘリコプターが遠巻きに何台も飛び回っている。ヘリコプターの側面には施設の入口と同じ、遺伝子のような模様が描かれていた。
　屋上の縁から見下ろすと、地面もゲノム社で取り囲まれている。埋め尽くすほどではないが、近づこうとする一般市民を追いやれる程度の人数の黒服たちがマテリアルの真下を陣取っていた。
「ゲノム社の機動隊か。かなりの厳戒態勢だな」
「施設の外にもこんなにゲノムの人たちが居たんですね……」
　エレノアナがどこか不安そうに空を見上げている。
「ティアを捕まえるために別の部隊が居たのかもしれない。ティアの確保を重要視しているなら、ゲイス一人には任せないだろうし……」
　イクスは前にレイラと施設内に侵入した時のことを振り返りつつ、答える。次期幹部を自負しているゲイスだが、実際はさほど評価はされていなさそうだった。ティアがゲノム社にとって重要であるなら、別に動いている部隊があっても不思議ではない。
「なりふり構わず、って感じですね。ティアをそんなに捕まえたいのかなぁ」
　鳴り響くヘリコプターの駆動音にタヌタも不安そうに空を見上げていた。
「“多角的な性格”か……」
　イクスはこっそりとエレノアナを見た。かつてジェノサイド社の幹部であったフィランダーも随分とエレノアナに執着していた。エレノアナの持つ二面性に目を付けていて、彼女を連れて逃げたイクスをわざわざ自ら追いかけにくるほどだ。優れたマテリアルになりうる素材は本当に貴重なのだろう。それを思えば、多重の人格を持つティアにゲノム社が執着を示すのも理解はできた。
　マテリアルが施設を飲み込む、という明らかな異常事態を前にしても機動隊が動く様子はない。むしろ、マテリアルが完全に施設を取り込むまで待っているように見えた。
「どうにかあれを止められれば良いんだが……どうすればいいのか」
　マテリアルは空中に浮いており、近づくには飛行手段が必要だった。激しい雷雨が取り巻いているせいで、飛行手段があったとしても易々とは接近できなかっただろう。
　だから、イクスたちはそれを眺めていることしかできなかった。
　ふと、風の気配が変わる。雷の轟きが響いた。激しい雷が降り注ぎ、目を開けていられないほどの風が吹き乱れる。飛ばされそうになったエレノアナとタヌタをなんとか捕まえるイクス。二人を抱え込みながら、傍にある手すりにしがみついた。

宙に浮かぶマテリアルから黒い光があふれている。目を細めて見上げると、施設の侵食が完全に終わっていた。施設の壁はガラスのような材質に変わり、血脈を思わせる模様が浮き出ている。
どくり、と闇が蠢いた。血脈のような模様の中を稲妻のように黒い影が走り抜けていく。影が走り去った跡は血のような赤色に残った。箱のような形をしていた施設がぐんぐんと縦に伸び、その形を変えていく。上の方は暗雲に消え、全貌が見えなくなってしまう。下の方はつららのように伸び、ワニの顎のような形に姿を変えた。
余ったパーツを捨てるように、施設だったモノの一部が剥がれ落ちる。左右対称に剥がれ落ちた青いマテリアルは形を変え、翼のようなものに姿を変えた。血脈のような模様が再び蠢き、その色を赤に変える。赤くなった部分から黒い染みがあふれだし、青かったマテリアルをあっという間に黒く染め上げた。
施設の窓だったところが真っ赤に染まる。
ぎょろり。
赤い目玉がそこに現れた。施設にあった窓の数だけ、禍々しい赤い瞳が眼を開く。
それが合図であったかのように、ティアのマテリアルであったものは漆黒の光に全身を包まれた。いっそう強い風が吹きすさぶ。
黒い光が晴れると、そこには一匹の禍々しい化け物が浮いていた。
黒く艶やかな鱗に、鋭い牙。太い蛇のような巨体がうねると暗雲がそれに付き従い、雷を迸らせる。顔に当たる部分には目が存在せず、代わりに胴体から首にかけて無数の赤い瞳が生えそろっていた。額からは黒くて大きな結晶体がトサカのように突き出ている。
マテリアルを製造していた施設はティアのマテリアルに飲み込まれ、おぞましい姿をした黒い龍の姿に変わっていた。
「ティア……」
イクスの呟きが聞こえたのだろうか。無数の赤い瞳がイクスに向けられた。憎悪を孕んだ視線に恐ろしいものを感じて、イクスは身を震わせる。
だが、ティアであったこの黒龍が襲い掛かってくるのならば、立ち向かわなければならない。イクスはホルスターから銃を抜き放った。それを止めたのはエレノアナだ。
「待ってくださいイクスさん！！まだティアちゃんの心は残っています！！形は変わってしまったけど、あれはティアちゃんです！！」
「まだ人間の心が残っているのか……！」
この瞬間を待っていたとばかりにゲノム社のヘリコプターが動き出した。六台のヘリコプターが、八面体を描くような陣形でマテリアルを取り囲む。機体の鼻先に取り付けられている円形のパーツが青白い光を帯びた。
バチッ、と大気を焼き切るほどの高圧の電流が発生する。ヘリコプターから流れる電流は線形を描いて互いの機体の鼻先に向かい、ものの数秒で黒龍を囲う八面体の電気檻が生まれた。やはりゲノム社はティアを生け捕りにするつもりらしい。
「ティアちゃん、危ない！！！」
黒龍を弱らせるために更に放たれた電流を見てエレノアナが悲鳴をあげる。逃げ場のない檻の中で、六方から黒龍を狙う雷撃。黒龍が動く前に青白い雷がその黒い鱗にぶつかる。
人間が食らえば消し飛びかねないほどの電圧だ。だが、その程度では黒龍にダメージを与えることはできない様子だった。
何も起きなかったかのように黒龍は平然と滞空している。胴体から生えた目だけが鬱陶しそうに周囲のヘリコプターを睨みつけた。

ほんの少し身じろぎをした、その程度の軽い動作で黒龍が身をひねる。すると、長い尾が鞭のようにしなり、二台のヘリコプターを鋭く打ちつけた。取り囲んでいた電気檻を尾が通過したが、当たったことに気付いた素振りすらない。
尾に打ち付けられた機体はへし曲がり、墜落していく。落下したヘリコプターからの電流が止まり、黒龍を捕らえるための檻は呆気なく瓦解した。
不利を悟ったのだろうか。ゲノム社のヘリコプターは一度引こうとするが、黒龍の動きの方が素早かった。正面でホバリングしている機体に狙いを定め、口を開く。ヘリコプターの方へと飛んでいき、そのまま機体の半分を食いちぎりながら更に上空へと昇った。
それを見たイクスは鮫が獲物を食いちぎる様を思い出した。素早く獲物に食らいつき、一撃で致命傷を与える。大量の出血をする代わりにヘリコプターはもくもくと煙をあげながら落下していった。食いちぎられた残骸も捨てられて地面へと落ちていった。
ゲノム社への追撃はそれだけでは終わらなかった。黒龍が飛び回る軌跡に合わせて紫電が散る。無作為に放たれたように見えた雷だったが、狙いすましたように残りの三台のヘリコプターへと飛んでいった。自然発生し、空から地面へと向かうような雷と遜色ない速度で、黒龍の雷撃はヘリコプターに直撃した。回避すらできずにヘリコプターは音を立てて爆散する。
ゲノム社のヘリコプターが一掃された空で、あざ笑うようにうねる黒龍。動く度に紫の雷が弾け、街のあちこちへと飛んで行った。
余裕を見せる黒龍にゲノム社は捕らえることを諦めたのだろうか。どこからともなく、真っ黒に塗装された、細長い機体が現れて黒龍のすぐ傍を駆け抜けていく。過ぎ去り際、置き土産のようにミサイル弾が黒龍に撃ち込まれた。通り過ぎる時に聞こえた、蜂の威嚇音のような低い嘶き。姿かたちをはっきりと捉えることはできなかったが、あれは戦闘機に違いない。
しかし、空中戦に特化した軍用兵器でも黒龍に傷を付けることは叶わなかった。黒龍の巨体が蛇のようにするりとミサイル弾を避け、ぐるりとその場でとぐろを巻いた。
黒龍が首をもたげると、額に埋め込まれた漆黒の結晶体が妖しい光を放った。禍々しい“音”が流れ出す。この世の憎悪をすべて煮詰めたような、おぞましい叫び声のような“音”だった。より破壊的な“音”に変わっていたが、あの漆黒のマテリアルが奏でていた“音”と同じものだ。
途端に襲い掛かる苦痛。魂を嵐に横殴りにされたような苦しみにイクスは胸を押さえて崩れ落ちる。戦闘機のパイロットもその“音”を聞いてしまったのだろう。ふらふらと危うい軌道を描いたかと思うと、そのまま制御を失って墜落していった。
「マテリアルの力も残ってるのか！？」
黒龍の体で振るわれる物理的な破壊力。そして心を壊すおぞましい“音”。加えて相手は空を自在に動き回ることができて、あれほどの巨体にも関わらず攻撃を当てることすら難しい。
あんなものをどうやって止めればいいのかとイクスは途方に暮れる。
「このままじゃ、ティアが……街を壊しちゃう……！」
空中に敵は居なくなったと言うのに、雷を落とし続ける黒龍を見てタヌタが焦ったように叫ぶ。“音”は止んだが、街の被害は広まる一方だ。
黒龍は憎悪に飲み込まれているようだった。理知的にゲノム社の戦力を削っているが、街の人に対する遠慮はない。黒龍が落とした雷はゲノム社のヘリコプターだけでなく、街中に降り注いでいる。雷に打ち付けられたビルは破片を地面に落下させ、その下に居た人々はパニックになって逃げ惑っていた。
街の人のために、そして何よりティア自身のためにもティアの暴走を止めなければならな

い。だが止めるための手立てが思いつかない。
　イクスが悩んでいると、ふと黒龍の額から生える黒結晶が目に入った。
「……もしかして、額のあれってマテリアルか？それなら……」
「イクスさん？何か思いついたんですか？」
　もしあれがマテリアルなら、イクスたちにもできることはある。だが、そのためにはどうにかしてあの黒龍の頭に近づく必要があった。
「あのマテリアルにキュアを使えれば、ティアを人間に戻せるかもしれない……そうすれば暴走も収まるんじゃないか？」
　イクスは黒龍の額にある漆黒の結晶体を睨みつけた。黒く塗りつぶされて光を失った瞳のような黒結晶だ。目玉のような形に変わっているが、ティアが持っていた漆黒のマテリアルと同じものに見える。
「確かにそれならティアちゃんを元に戻せるかもしれませんね……！」
「うん……ただ、どう近づくかって問題は残ってるんだよな……」
　手をこまねていると、聞き慣れてしまった声が聞こえてきた。
「テメェ！！！何しやがる！！！押すんじゃねぇ、危ねぇだろうが！？」
　酒に焼けた声。ゲイスだ。イクスたちの居る屋上にやってきたゲイスはやはり黒服の男たちを後ろに従えているようだった。だが、いつもと違う点が一つあった。いつもならば悠々と肩をいからせて歩いているゲイスが、引っ立てられるように歩かされている。
　罪人を連行するようにゲイスを連れているのは神経質そうなスーツの男だ。首元まできっちりとネクタイを締めた男はイクスたちを見つけるなり、不機嫌そうな顔をした。
　イクスは男の顔にぼんやりと見覚えがあることに気付く。レイラと侵入した際に施設でゲイスと話していた男だ。イクスと接触はしているが、不意打ちを食らわせて気絶させたため、イクスの顔は知らないはずだ。
「何故一般人がここに居る。即刻立ち退け」
　男が不機嫌になったのはやはり気絶させられた恨みではなく、想定外の場所に一般人が居ることに対してだった。
「……ここで何をするつもりだ？」
「フン。我々は治安部隊だ。緊急事態が起きたと連絡を受けて、市民の安全確保のために動いている」
　黒龍――ティアを傷付けるつもりだろうか。素直に場所を明け渡していいものか迷うイクス。すると、ゲイスがイクスに気付いて大声をあげた。
「あーーーーー！！テメェ、あのグズに入れ込んでる野郎じゃねぇか！こんなとこまで来やがったのか！」
「何……！？半加工素材の知り合いか……」
　にわかにゲノム社の者たちが殺気立った。しまった、とイクスは内心舌打ちをする。戦うには場所が悪すぎる。隠れるところのない開けた場所で、エレノアナとタヌタを庇いながら戦うのは流石に厳しい。
「お前たちの邪魔はしないさ……ここをどけばいいんだろう？」
「あの素材と知り合いと言う割には随分と聞き分けがいいな……まあいい。どうせまたゲイスの早とちりか何かだろう。貴様がこちらに手を出さないのなら、放っておいてやる」
　イクスはエレノアナとタヌタを連れて大人しく屋上の端に寄る。貯水ポンプの傍に近づき、ホルスターから抜き放ったままだった銃を構えてゲノム社の出方を窺った。

屋上の縁へと引き立てられながら、ゲイスが喚く。
「おい、どうせまた早とちりってどういう意味だ！！そいつはなぁ！！グズのティアと一緒に俺のマテリアルを――」
「今、お前の泣き言に構っている暇はない。次期幹部だと言うのならば、責を果たせ。あの化け物を制御しろ」
「無茶言ってんじゃねぇ！！あんなのに近づけるかよ！」
どうやらゲノム社はゲイスを使って黒龍となったティアを制御しようとしているようだった。うまく行くとは思えない策だが、もう他に打つ手がないのだろう。
「お前の命令は聞くように躾けてきたのだろう。とっとと行け！」
「テメッ、侵入者に寝かしつけられてたくせにでけぇ口叩いてんじゃねぇ！ふざけんな！」
「貴様……っ！！！」
スーツの男は屈辱に顔を赤くした。ゲイスを屋上の縁へと力いっぱい蹴り出す。
「つべこべ言わずにとっとと行け！！！」
「ヒィッ！？」
放り出されたゲイスのすぐ傍に紫電が落ちる。落雷というよりは、小さな隕石が落ちてきたような衝撃だった。雷が屋上に突き刺さり、煙をあげながらアスファルトを割る。
自分の隣に空いた大穴にゲイスはさっと顔色を悪くした。しかし、ゲイスの存在に気付いた黒龍もぴたりと動きを止めた。憎悪に染まっている瞳が困惑に揺れている、ようにも見える。
黒龍からの攻撃が止んだことにゲイスも気付いた。
「なんだ……？まさか、ビビってんのか……？」
ゲイスが恐る恐る屋上の縁に沿って伸びる手すりに近づいた。手すりを掴み乗り出すと、黒龍が震えて距離を取ろうとする。その反応を見たゲイスがニタリと笑った。
「おいグズ！！！！どこに行こうとしてんだ！！！！」
ゲイスに怒鳴りつけられた黒龍は暴れもせずにただ震えている。調子に乗ったゲイスは笑いながら更に言い募った。
「まだわかんねぇのか！どこに行ったって、化け物のテメェに行き場所なんかねぇんだよ！！！」
恐ろしい黒龍の形に姿を変えたティア。しかし、ゲイスにさげすまれてきた傷が癒えて消え去ったわけではない。ゲイスなど簡単に消し炭にしてしまえる力を得てもなお、ティアはゲイスの言葉に心を縛られていた。
「ティアちゃん……」
エレノアナが震えながらイクスの服に縋った。エレノアナにはきっと、ティアの泣き声が聞こえているのだろう。
「泣かないで、ティアちゃん……」
「テメェは化け物だ！テメェみたいな化け物はどこに行ったって害にしかならねぇ、って何べん言ったらわかるんだ！ああん！？」
「やめて……！ティアちゃんはただ、お父さんに見てもらいたいだけだったのに、どうしてあなたが……！あなたが見てくれなかったら、どうしたらいいのかわからないよ……！」
エレノアナが震える声を張り上げる。しかし、その言葉すらゲイスには届かないようだった。
罵倒を続けるゲイスに、ようやく黒龍が動きを見せた。額の黒結晶を光らせ、“音”が流れ出す。泣きわめくような嵐の“音”に、苦しさを覚えてイクスは体勢を崩した。先ほどのように崩

れ落ちるほどの衝撃はない。ただ、息苦しい。
　抗いがたい喉の渇きを覚えて、イクスは喉元を抑えた。“音”はさめざめと降りしきる雨のように響いている。ティアが泣いているのだ。飢えたティアの心が痛切な叫びをあげている。
　ゲノム社の者たちもイクスと同じように苦しみはじめる。“音”で攻撃されることに慣れていないのか、しばらくすると全員が意識を失った。ただ一人、ゲイスだけが相も変わらずティアを罵り続けている。
　ここまで来ても、ティアの言葉はゲイスには響かないのか。
　イクスは愕然として拳を握りしめる。頬からは自然と涙が伝っていた。
「……そっか、ティアはボクと同じなんだね」
　ぽつりとタヌタが呟く。辛そうに顔を歪めながら、タヌタは潤んでいた自分の目元をごしごしと拭いた。
「タヌタ……？」
「ボクも、パパに一緒に居て欲しかった。大事にされたかった。マテリアルになれば大切にされるんだったら、それで良いと思った……見てもらえればそれでよかったんだ……」
「大人しく石になってろ！！テメェの価値はそれだけだ！！！！！」
　ゲイスの罵倒を聞いて、タヌタが強く首を振る。すべてを振り切るように声を張り上げた。
「でも、それは間違いだった……間違いだったんだよ、ティア！！！！どれだけ大事にされたって、本当の自分を見てもらえないのはやっぱり辛いままなんだ！！！！」
『……うるさい』
　あどけない少女の声が響いた。声帯が大気を震わせるのとは違う、不思議な響きを持った声が頭上から降り注ぐ。地下牢でティアのマテリアルが暴走する前に聞こえた声だ。マテリアルにされてしまった“ティア”の声なのだろう。
『わかったように言わないで……本当のティアなんて知らないくせに……』
　悪意にまみれた声色。だが、それが泣いているように聞こえるのはなぜなのか。
『ティアはね、タヌタと違って悪い子だから、ずーーーっとね。ずーーーーーーっと悪いこと考えてたんだよ』
　くすくすと笑う声が響く。
　黒龍がゆっくりと胴体を持ち上げると、幾つもの赤い瞳が獲物を狙うような目つきでゲイスを睨んだ。
『パパなんて死んじゃえ、って』
「ヒッ！？」
　憎悪に煮えたぎる無数の瞳に睨みつけられたゲイスは途端に口を閉ざし、ひきつった悲鳴を上げる。明確な殺意を浴びて、ゲイスはすぐに逃げ出そうとした。だが、腰が抜けてその場に倒れこんでしまう。目のないはずの黒龍の頭部も鎌首をもたげ、無様に座り込むゲイスをじっと見つめた。
「ば、化け物……！ち、近づくんじゃねぇ……、こっち来んな、オイ、来るな！！！！」
　至近距離まで近づいた黒龍の顎を見たゲイスは恐怖に顔を引きつらせていた。
「ティア、やめるんだ！！！」
「ティアちゃんダメだよ！！！！それじゃあ何も変わらない！！！」
　イクスとエレノアナが制止の声をあげる。しかしティアは止まらなかった。
　黒龍の口が大きく開き、無数の鋭い牙が露わになる。黒龍の口の中は不思議と黒く染まっておらず、澄んだ水色のマテリアルの牙が鋭利に立ち並んでいた。

「やめろ……やめてくれえええええ！！誰か助けてくれえええええええ！！！！！」
　ゲイスを飲み込もうとしていたティアが、何故か動きを止めた。ゲイスは目から滂沱の涙を流していて、ティアが動きを止めたことに気付いていない様子だった。
「誰か！！おい、誰か助けてくれよ……！なあ、誰でもいいから、こいつをやっつけてくれ……！このままじゃ死んじまう、死んじまうよぉ！！」
　泣き崩れながら助けを乞うゲイス。
『パパ……』
　あどけない少女の声で誰かが悲しげに呟いた。ティアの声だろうか。ゲイスを追い詰めたのに、先ほどゲイスに罵られていた時よりも苦しそうな声だった。
「ティア、ダメだよ」
　動きを止めたティアの元にタヌタが走ってきて、両手を広げた。ゲイスを小さな背に庇い、悲しげな目で黒龍となったティアを見つめている。
「誰かを傷付けたら、傷付くのは自分なんだ。……だから、ダメだよ」
　ゲイスを傷付けようとしているティアが抱えた、深い悲しみを見通すようにタヌタが言う。言葉を向けられた黒龍は、慄くように全身を震わせた。
『……うるさい』
「ティア……」
『うるさい！！！いい子ぶらないでよ！！タヌタだってパパに捨てられたくせに！！いらない子のくせに！！！！マテリアルじゃなきゃお爺ちゃんにだって愛されないくせに！！！！！』
「！」
　“二番目”でも“五番目”でもないティアの声が響く。痛烈に人の心を傷付けるためだけの言葉がタヌタに向けられる。タヌタははっきりと、傷付いた顔をした。
『私と同じなのに！！！なんで！！！！なんでタヌタはお爺ちゃんに撫でてもらえるの！！なんで会いたかったって言ってもらえるの！？どうしてタヌタはいいのに私はダメなの！！！！！』
　それはまるで子どもの駄々のようだった。どうしようもないことを諦めきれずに泣きわめく子どもの我儘だ。無理にでも自分の欲求を通そうとして、大人を困らせる小さな子どもがそこに居た。
　だが、ティアにはその我儘に困ってくれる大人は居なかった。
『どうして誰もティアのことを見てくれないの！！！！！』
　世界を呪うように、ティアは叫んだ。叫び声に“音”が宿り、暗く重苦しい気持ちがイクスの胸を埋め尽くす。
　屋上から飛び立つ黒龍。その額に埋まる漆黒のマテリアルが黒い光を放ち、呪いの“音”を奏でている。
『もういい！！！こんな世界、全部壊れちゃえ！！！！』
「ティアちゃん！！そんなことをしたって、何にもならない！！！お願い、戻ってきて！！私たちはあなたに会いに来たんだよ！！他のティアちゃんたちに頼まれて、あなたに！あなたを本当の姿に戻すために！！！」
　黒龍が浮かぶ空へと手を伸ばすエレノアナ。だがその返答は泣き叫ぶティアの心が奏でる“音”だけだった。嵐にように激しく“音”がイクスとエレノアナの心を打ちつける。“五番目”のティアが襲ってきたときとは違う、手加減のない破壊の声色。

ティアはこの街に居る人間の心をすべて壊すつもりのようだった。
「どうしよう、このままじゃ街の人たちが……それに、ティアちゃんが……」
「クッ……あのマテリアルに近づければ、キュアでティアを人間に戻せるんだが……」
「じゃあ、近づけるように、ティアの動きを止めればいいのね？」
“音”に耐えながら歯を食いしばるイクスに悠然とした声がかけられた。
「あー、もう。相っ変わらずきついわね、あの子の“音”。こっちまで滅入ってきちゃう」
「レイラさん！！」
「やっほー、イクスくんお困りかな？レイラちゃんのお出ましですよー？」
ティアの“音”に少し苦しそうにしながら、レイラは軽やかに手を振った。宣言通り追いついてきたらしい。その手には小さな小箱が握られてきた。
「レイラさん、それは？」
「秘密兵器。念のため持ってきたけど……やっぱ使うことになりそうね」
レイラは困ったように笑いながら、躊躇なくその小箱を開けた。暖かな光が箱から溢れ、レイラの手元を包む。
なんとなく、キュアの光のようだとイクスは思った。
光が消えると、小箱も消えていた。代わりに、妙な形をした弓矢のようなものがレイラの胸に抱えられている。三日月を描くようにくりぬかれた木には細かな装飾が施されており、何本もの糸が三日月を串刺すように縦に張られていた。三日月の先端には糸と同じ方向に一本の柱が伸び、張られた糸を囲い込んでいるかのようだった。
ピン、とレイラの指が一本の糸を弾く。すると、赤いネイルが塗られた指の先で優美な“音”が躍った。その“音”の美しさにイクスの心が震える。
「“音”に対抗するには……“音”で、ってね」
「レイラさん……それは、マテリアルですか？」
「――かつて……この世界には“楽器”と呼ばれるものがあった……」
レイラはイクスの問いかけに答えずに、目を伏せて語りだした。
「原初のマテリアル。“音”を自在に操り、人の心をも操る道具。それが“楽器”。これはそのうちの一つ。糸を爪弾き、雨どいを滴る水音を手繰る安らぎの楽器、“ハープ”」
もう一度、レイラの指が“ハープ”と呼ばれたその物体をつま弾いた。確かに、水面が“音”を奏でるようになれば、こんな“音”になるのかもしれない。
「あなたの心、つま弾いて進ぜましょう」
レイラがハープを膝に乗せ、何かを描きだす意図を持って“音”を奏ではじめる。糸が揺れる度に大気が水面のように揺れ、波紋が収まる前に次の糸がつま弾かれる。幾つもの波紋が重なり、追いかけあうようにあちこちに広がり、やがて一つの集合体として“音”を作り出した。
淡い光を纏わせながらハープの上を踊るレイラの指先にイクスは魅了される。人が、その手でマテリアルの“音”を奏でている。まるで奇跡のような光景にイクスはひたすら魅入っていた。

遠くで、ティアの呪いの“音”が流れているのは聞こえていた。しかし、レイラの奏でる“音”を聞いていると、ティアの“音”による苦しみは薄れ、胸を暖かな安堵が包み込む。
まるで、優しい誰かに包み込まれているかのような心地だった。大気を揺らす糸の波紋がイクスを安らかな眠りへと誘う。
「――イクスくん。イクスくんまで寝ちゃダメだって」
レイラの声にイクスははっと我に返った。
ティアの“音”も、レイラの“音”もすでに止まっていた。美しい“音”がなくなってしまったことにイクスは寂しさのようなものを覚える。
だが心は未だレイラの奏でた“音”を覚えていて、その名残の美しさに打ち震えていた。
黒龍に変わったティアもレイラの“音”を聞いて、眠気に誘われたらしい。ふらふらと逃げるように遠くへと飛んで行ったが、やがて力尽きて地面へと落下していった。
「た、倒したん……ですか？」
イクスが恐る恐る尋ねると、ハープを奏で終えたレイラが首を振った。
「眠らせただけよ。ハープは眠りを誘うだけ。攻撃的な楽器じゃないのよ」
説明するレイラの手元で、弦が張られた“楽器”が光を放ちながら砕け散った。
エレノアナが驚いて声をあげる。
「ええ！？壊れちゃった……」
「パパが一番最初に作ったマテリアルがこれでね。研究初期のものだから、一回使うと壊れちゃうのよ」
「レイラさん、ひょっとしてそれって……」
イクスは前にレイラから聞いたマテリアルプロトのことを思い出した。レイラの父が亡くなったレイラの母を想って作った、言わばレイラの両親の形見のようなものだったはずだ。
イクスの視線を察したレイラがくすりと笑い、人差し指を唇に当てた。黙っていろということらしい。
「行きましょう。早くいかないと、ゲノム社のやつらに先を越されちゃう」
街にはゲノム社の者たちが集まっていた。今はティアの呪いの“音”やレイラの奏でた“音”に混乱している様子だが、ティアを確保できるチャンスに気付けば、ティアの落下点に向かうはずだ。その前にティアを人間に戻す必要があった。
「あっ、忘れてた。行く前に一つやることがあったわね」
「やること？いったい……あっ」
イクスが眺めている前でレイラがツカツカと屋上の縁まで歩いていく。その先には黒龍の襲撃ですっかり萎縮してしまったゲイスが居た。
「な……な、なんだよ姉ちゃん……へ、へへっ、俺になんか用か――ぐふっ！？」
レイラは何も言わずに足を振り上げた。迷いのない蹴りがゲイスの下あごに炸裂する。ぱたりと意識を失ったゲイスには目もくれず、パン！とレイラは手を叩いて笑った。
「さ、行きましょ！」
「レイラさん……」
レイラの容赦のなさに苦笑するイクス。
「行ってください、ボクは街に残ります」
タヌタが情報端末を片手にイクスたちを見送った。
「タヌタ……その」

大丈夫か？そう聞こうとしてイクスは言葉に迷う。ティアに向けられた言葉はタヌタを深く傷付けたはずだ。
だが、タヌタは気にしていない風に笑った。
「ボクは大丈夫です。それより、ティアのところに行ってあげてください。あのままだと、ティアがもっと傷付いてしまうから……」
「タヌタはどうするんだ？」
「ボクは時間を稼ぎます。おじい様がボクに残してくれたものを使えば、たぶん、できると思います……だから、どうか、みなさんご無事で！」
ロードが持っていた伝手を使い、この街の自警団と協力してゲノム社員たちの妨害をしてくれるらしい。イクスたちはタヌタにこの場を任せ、ティアの元へと向かう。
タヌタはティアが落ちた方角を睨み据えながら、情報端末で誰かと連絡を取りはじめる。その厳しい眼差しは少しだけロードの厳めしい眼差しに似ていた。

落下した黒龍は街外れの森の中で静かに横たわっていた。無数にあった赤い目がすべて閉じており、黒龍の巨体が呼吸をする度にゆっくりと上下する。レイラの“音”を聞いて深く寝入っているようだ。
額の部分には変わらずに漆黒のマテリアルがきらめいていた。あそこにキュアを差し込めば、ティアを人間に戻せるはずだ。
「私はここでゲノムの奴らが来ないか見張ってるから、イクスくんとエレノアナちゃんで行ってきて」
「わかりました、お願いします」
見張りにレイラを置いて、イクスとエレノアナは傷付けないようにそっと黒龍の体を登る。頭部にたどり着くと、額からそびえ立つ漆黒のマテリアルが見えた。近づいて見てみると、思っていたよりも大きい。人間が両手で抱き着いて少し余るくらいの大きさだ。
妖しげに脈打つ、黒水晶のようなその不思議な石の前でイクスは膝をついた。そして懐から取り出したキュアを掲げる。
マテリアルになっているティアが人間に戻れば、暴走も収まるはずだ。意を決して、キュアを漆黒のマテリアルに差し込む。鍵を回す要領でひねると、白い光とともに位相幾何学的な文様が現れ、マテリアルを包み込む。
しかし、イクスの手は妙な引っ掛かりのようなものを感じていた。タヌタを元に戻せなかった時と同じ感覚だ。嫌な予感を感じながらも待っていると、光が収まる。
そこには何事もなかったかのように漆黒のマテリアルが脈打っていた。やはり、と思いながらもイクスは動揺を抑えきれずに舌打ちをする。
「クソッ……また壊れたのか！？なんでこんなときに……！」
「タヌタくんから聞いたんですけど……」
エレノアナが静かに口を開いた。
「人間に戻りたくない気持ちが強いと、キュアは使えないみたいなんです。それで、タヌタくんに最初にキュアを使ったときに何も起こらなかったみたい」
「人間に戻りたくない……！？」
そんな、これでは八方塞がりだ。イクスの心をじわじわと絶望が蝕む。せっかくレイラがティアを眠らせてくれたのに、そのティアが人間に戻りたくないと言う。
「説得しないと……ダメなんだと思います」

「だけど……ティアが話を聞いてくれるか？それにレイラさんのマテリアルは壊れたから、二度は眠らせられない」
「はい。だから、寝ているティアちゃんとお話しに行きましょう」
「……寝ているティアと？」
　どう言う意味かとイクスが問いかけると、エレノアナは覚悟を決めたような表情でイクスを見つめた。その瞳に強い光が宿っているのを見て、惹きこまれそうになる。
「エレノアナ？」
「イクスさん、私を信じてくれますか」
　エレノアナは何かをしようとしていた。それが何かはわからないが、イクスは迷わずに頷いた。
　エレノアナはどんな状況でも諦めない強さを持っている。どんな理不尽でも、どんな不条理でも。この少女は、自分が傷付くのも恐れずに立ち向かっていってしまう。信じない、とイクスが言ったらエレノアナは一人でも立ち向かっていくだろう。そんなことはさせられない。
「信じるよ。君のやりたいことなら、俺もついていく」
　はじめから、そうだった。イクスをこの旅に引っ張り出してくれたのはエレノアナだ。今更、ついていかないなんて選択肢はない。
「イクスさん……ありがとうございます。じゃあ、一緒に行きましょう。――ティアちゃんの心の中へ」
「そんなことができるのか？」
　驚くイクスにエレノアナは頷いた。
「人は、人と繋がりたいと願うでしょう？どんなに閉ざされた心でも、誰かが心に触れてくれるのを待っている。心の奥底に繋がる“道”が必ずあるんです。その道を辿ります」
「心の“道”……」
　そういえば、エレノアナはマテリアルにされた人間の声が聞こえると言っていた。また、タヌタもティアの“音”が鳴り響く中で動くことができた。マテリアルにされたことのある人間は、元に戻っても何かしらの力を持っているのかもしれない。
　イクスが納得していると、エレノアナは何かを思い出したかのように小さく笑った。
「実はさっき、イクスさんたちを地下牢で起こした時に気付いたんですよ」
「え？」
「イクスさんたちはティアちゃんのマテリアルの“音”に心を操られて、無理矢理眠らされてたんです。それを起こすために、必死に呼びかけてたら、いつの間にか心の中にお邪魔しちゃっていました」
　悪戯な笑みを浮かべてエレノアナがイクスの手を引っ張る。エレノアナが漆黒のマテリアルに手をかざすと、光があふれはじめる。
　金色の光と青色の光がエレノアナの胸元からあふれ、翼のように広がった。その光をイクスはどこかで見た気がした。
「エレナ？ノアナ？」
　二色の光に包まれながら、イクスは懐かしい双子の名前を呼ぶ。二人に手を引っ張られた気がして、イクスは前に足を踏み出し光の奥へと進んでいった。
　道のように真っ直ぐ光が伸びていく。光の奥には暗い闇が見えた。淀む雲のように視界を閉ざす心の闇。
　あの闇の奥でティアが待っている。

HARMONIX PART2-6『未来へのリベレイト』

光の道は無限に続いていくようにも思えた。ぼんやりと足を進めていたイクスだが、はっ、と我に返る。
気付いたらエレノアナが消えていた。二色の光も、黒龍となったティアも消え、漆黒に塗りつぶされた世界で一人きりだった。
「ここは……いったい？」
道があるのかすらわからない暗闇の中、遠くの方に光が見える。あそこに向かえば何かわかるだろうか。だが、こんなに暗くては足元が見えない。地面に穴が開いていても気付けないだろう。イクスが逡巡していると、明るい声がイクスを呼んだ。
「何してるの、イクスくん！！早く行かないと！！」
暗闇の空間すらも明るく感じはじめるような、朗らかな少女の声だった。
「……ノアナ？」
金色の髪の少女がイクスの傍に現れた。蜂蜜のようにとろける瞳にイクスを映し、満面の笑みを咲かせる。
「正解！！えへへ、イクスくんだーーー！」
ノアナは嬉しそうにイクスに飛びついた。わっ、と体勢を崩しながらもなんとかノアナを受け止める。そんなノアナを別の少女が嗜めた。
「ダメよ、ノアナ。イクス様にご迷惑をかけたら……」
「エレナ……」
青色の髪の少女、エレナはイクスが名を呼ぶと嬉しそうにはにかんだ。深海のように深い瞳にイクスをしっかりと映してから、一礼をする。
「お久しぶりです、イクス様。またお会いできて嬉しいです」
「あ、ずるいエレナ！私も、私もまた会えて嬉しいよ！！イクスくんは？」
「嬉しいに決まってるじゃないか……いや、会ってないわけじゃないんだけど。でもこうやってエレナとノアナに会えるのも嬉しいよ」
ノアナとエレナはかつてマテリアルにされかけたエレノアナが双子にわかれてしまった時の姿だ。そのエレノアナとは毎日顔を合わせているのだから、厳密に言えばこれは“再会”ではない。だがそれでもイクスはノアナとエレナと再び会えたことが嬉しかった。
「私たちも同じ気持ち！いつも会ってるのに“久しぶり”って、ちょっと不思議だけどね」
「二人になって、イクス様への感謝と敬愛もいつもの二倍ですよ」
「あーーー！エレナ、それ私が考えたセリフ！エレノアナになった時に私が言ったやつじゃん！」
「考えたのはエレノアナだから、わたくしたちでしょう？独り占めはダメよ、ノアナ」
「そういうこと言うのは私の担当！勝手に盗っちゃダメ！っていうか、意味逆！！エレノアナになって二人の気持ちが合わさって二倍だね、ってあの時は言ったの！」
「あら、二人になってしまっても、イクス様への想いは半減しないでしょう？」
「うっ、それはそうかも……そっか。じゃあやっぱり二倍であってるね」
光のない空間に居ると言うのに、イクスはつい和んでしまう。相変わらずこの二人は仲が良い。エレナとノアナは“エレノアナ”でありながら、“エレナ”と“ノアナ”でもある。不思議な感覚はするが、当然の事実であるようにするりとイクスは納得してしまう。
一つだけ不思議なことがあるとすれば、ティアの心の中で二人に再会することができた理由

だろうか。
「ところで、二人は何でここに居るんだ？エレノアナと一緒にティアの心の中に入ったんだと思ったんだが……」
　イクスが問いかけると、エレナとノアナは無邪気に笑った。
「だって心の中だよイクスくん！当然、私たちの出番だよね！」
「だって心の中ですもの、イクス様。当然、わたくしたちがご案内いたしますわ」
　どうやら二人の中ではこの再会は当然のものらしかった。
「……エレノアナって、実は心が二つに分かれたままとか、ない……よな？」
「ないよ？キュアを使ったから元通りになったじゃん」
「ありませんよ？エレノアナはティアちゃんのように多重人格ではありませんもの」
「そうか……」
　女性の心は神秘だと言うが、こういうことだろうか。イクスは首を傾げながらも、ひとまず双子との再会を喜ぶことにした。
　はっ、とエレナとノアナが急に手を叩いた。流石双子と言うべきか、二人は寸分狂わず同じタイミングで何かに気付いたようだった。
「エレナ、こうしちゃいられないんだった！」
「そうでしたね、ノアナ。イクス様、では参りましょう」
　双子がイクスの手を片方ずつ取って引っ張る。ノアナはグイグイと。エレナはしずしずと。だがどちらも有無を言わさない様子でイクスをどこかへ連れて行こうとする。向かっている先は遥か遠くに見える光のようだ。
「どこに行くんだ？」
「ティアちゃんの心の奥だよ、イクスくん！」
「この道の果てに泣いているティアちゃんが居ます。少しだけ遠いですけど……」
「頑張って歩こうね！」
「わかった。道案内は頼むよ」
　イクスが頼むと双子は嬉しそうに破顔し、元気よく頷いた。

　イクスたちは暗闇の道を歩き続け、光の門にたどり着いた。門の中に足を踏み入れた途端に、パッと周りの景色が変わる。
　思っていたよりも暗い場所に出た。涼しい風が吹く、満月の夜だ。辺りを見回すと、どうにも見覚えのある場所のように見える。見覚えのあるものを探すイクスの目に赤いサルビアの花畑が飛び込んできた。
「ここは……ロードの屋敷か？」
「正解よ、黒い髪のお兄様。もちろん、私の記憶の中のものであって、本物ではないのですけれど」
「――ティア！」
「こんばんは。いい夜ね」
　白髪の髪と紫の瞳の少女がイクスに声をかけた。強い意思を感じさせる大人びた表情を浮かべているこのティアは“五番目”のティアだろう。
　ロードの屋敷の庭には灰色の石像がいくつか点在している。そのうちの一つに気だるげに寄りかかり、腕を組んだ体勢でティアはイクスを睨みつけた。
「レディの心に土足で踏み入るなんて不躾な方なのね」

「え！？す、すまない。……でも、ティアを助けるにはこれしかないと思ったんだ」
「あら、別に責めてるわけではないのよ？ただ、会って間もない女のために、こんなところまで来るなんて。よっぽどのお人よしか、ただのバカね」
「そ、そうかな？」
　どこか不機嫌そうなティアにイクスは弱り果てた。確かに、心の中を見られていい気分はしないのかもしれない。そう思ったイクスにノアナがこっそり耳打ちした。
「ティアちゃんはありがとうって言いたいのにうまく言えないだけだから、大丈夫だよ！」
「聞こえているわよ、黄色い蝶々さん。勝手なことは言わないでくださるかしら。感謝をしていることは……そうね。否定はしないけれど」
「私たちは蝶々なんだ？」
「だって、そうでしょう？表と裏ではなく、左右が異なる蝶だなんて珍しいこと。左右の大きさが異なっていたら不格好でしょうけど、あなたたちは美しいシンメトリーなのね。私たちなんかよりも余程の希少種じゃない」
「私たち珍しいんだって、エレナ」
「普通だと思うわ、ノアナ」
「ねー！」
「あらあら、仲の良いことね。私たちも見習わなくてはならないのかしら」
　どうでも良さそうにティアが言った。
「それで？助けに来たと聞こえた気がするけれど。何をしに来たのかしら。今更あの子を救うなんて、私は無理だと思うわよ」
「マテリアルを人間に戻すには本人の意思が必要なんだ。だから説得しに来た」
「説得ねぇ……まあ、頑張ってみればよろしいのではなくて？あの子はあの中よ」
　ティアがロードの屋敷を示す。現実世界にある屋敷もひっそりとしていたが、ここはそれ以上に人の気配がない。屋敷にある窓はすべて黒いカーテンで閉ざされていて、異様な雰囲気を醸し出していた。
「ロードの屋敷に、ティアが……」
「――タヌタとティアは少しだけ似ているでしょう？」
　ティアは石像に背を預け、どこでもない場所を眺めていた。
「マテリアルとして望まれた者同士、というだけですけれど。でも、あの子がタヌタと自分を同一視するには十分だった。勝手に、自分と同じような存在だと思ってしまったのね」
「それは……でも」
「ええ。望まれた意味はまったく違うのにね」
　確かにロードははじめ、タヌタが人間に戻ることを望んでいないかのような言動を取っていた。しかし、とイクスは目を伏せる。それは、ゲイスが己の地位のためにティアをマテリアルに変えたこととはまったく別の話だ。ロードの言動の裏には、ゲイスとは異なり、いつもタヌタへの深い思いやりがあった。
「だけど、それでもあの子は縋りたかったの。自分が父親に愛される可能性にね。だからあの子にとってタヌタとロードの屋敷は切望の象徴なのよ」
「それは、君にとっても？」
　イクスはつい問いかけてしまう。今まで話してきた三人のティアたちは違う人格だと本人たちが言っていた。なら、物事の捉え方もそれぞれで異なるのではないだろうか。
「私たちを別の人間として扱ってくださるのね。嬉しいわ、素敵なお兄様」
　機嫌を良くしたティアが口元に手を当てて上品に笑う。

「私は切望できるほど、夢見がちではないわ。言ったでしょう、わかりあえない人というものがこの世界にはあるのよ。今更、あの男が意見を翻したところで、私は受け入れられないでしょうし……」
　ティアは言葉を区切った。
「……でも、いつまでも諦めないあの子がたまに、少しだけ、羨ましいわ」
　ティアは“あの子には内緒”だと言い、イクスの背をそっと押した。屋敷に入るためのドアがひとりでに開く。中は見通せないほどの暗闇が広がっており、ランタンの光が一つだけゆらゆらとイクスを待っているかのように揺れていた。
「さあ、どうぞ奥へ。あの子が待っているわ。無理にとは言いませんけれど……あの子を連れ帰って頂けたら嬉しいわ」
「必ず連れて帰るよ、約束する」
「うふふ、百年に一度の王子様が、あなたであることを願うわ」
　イクスたちは五番目のティアに見送られ、屋敷の中へと踏み込む。あまりの暗さに双子はぎゅっとイクスにしがみついてきた。ティアの心の入口にあった闇は平気だったが、この薄暗さは苦手らしい。
　屋敷の内装は記憶にあるものと随分変わっていた。ずっと奥まで豪奢な宮殿のような廊下が続いていて、左右の壁にはドアらしきものが一つもない。灯りの消えたキャンドルだけがずらりと闇の奥まで続いていた。その最奥でランタンの光が揺れている。
　廊下の奥からは微かに風の音が流れてきていた。よく耳を澄ませると、それが誰かの泣き声であることがわかる。不気味な光景だったが、イクスはただもの悲しい気持ちになった。
　泣き声に混じって流れる“音”のせいだ。漆黒のマテリアルが奏でていた嵐の“音”ではない。優しい“音”が螺旋を描いて、眠るように深い暗闇へと落ちていく。誰かの指がたどたどしく、“音”を一つずつ奏でているかのような、美しくも切ない旋律だった。何か美しいものを抱えながらも、すべてが諦めになだれていくような“音”。これがティアの本当の“音”なのだろうか。
「……綺麗な音だね、イクスくん」
「……悲しい音ですね、イクス様」
「ああ……」
　それ以外、イクスはなんと言えばいいのかわからなかった。代わりに廊下の奥から返答が返った。
「ティアのマテリアルの“音”ですよ。黒く濁る前は、こんな“音”だったんです」
　廊下の奥でランタンが揺れる。足音もなく、先ほどわかれたばかりの少女が現れた。その表情は穏やかだが、どこか弱々しい。“二番目”のティアだ。
「イクスさん。約束、守ってくれたんですね。あの子を助けてくれるって……」
　ティアは深々と頭を下げた。
「それが俺たちの旅の目的だから」
「誰かに気にかけてもらえるって嬉しいんですね。それが、どんな理由であれ……。あの子が欲しがっていたのは、これだったのかも」
　ティアは胸の奥に生まれた何かを噛み締めるように瞳を閉じた。その表情はいつも通り、はにかむ様な曖昧な笑みを浮かべている。しかし、どこか困惑のようなものが笑顔の奥に見え隠れしていた。

「では、こちらへどうぞ。ここから先は光がないから……私についてきてください」
　ティアの持つランタンの灯りに導かれて、イクスたちは廊下を奥へ、奥へと進んでいく。廊下はやがて石畳の階段に変わり、一同は地下へと降りて行った。塔を下っていくように、螺旋の階段をぐるぐると下る。ひんやりとした冷気が底から吹き上げ、冥府への入口に向かっているかのようだった。
　何も言わずにエレナとノアナがイクスにしがみ付く。イクスの腕を掴んだ二人の手のひらの体温に、イクス自身もどこか救われていた。
「ここです」
　階段の一番下には木造の錆びた扉があった。ティアが扉を押すと、蝶番が悲鳴を上げる。中は巨大な広間となっており、大きな木の箱が等間隔に並んでいる。どこかに灯り取り用の窓があるのだろうか。上を見上げるとどこからか白い月光が地下に差し込んでいた。
　広間の奥にはまた木造の扉が一つある。泣き声と“音”はそこから流れ込んできているようだった。
「あの奥のドアが、あの子の居るところに繋がっています」
「ティアちゃん、ここって……何？」
　ノアナが不安そうにティアに尋ねた。
「何……ううん。説明が難しいですね。強いて言うなら、“墓地”でしょうか？」
「お墓……」
　等間隔に並ぶ箱の一つにティアが近づき、イクスたちを手招いた。中を恐る恐る覗き込むと、イクスたちを案内しているティアと同じ顔の少女が箱の中で眠っている。敷き詰められた黒い薔薇に埋もれる少女はおとぎ話の姫のようにも見えた。
「心が死んでしまった“ティア”はここで眠っているんです」
「三番目と四番目のティアちゃんは亡くなってしまったと聞きました……ここにいらっしゃるのですね」
　エレナにティアが頷き返す。
「よく覚えていますね。……あの子が一回ね。普通になろうと思った時があったんです。多重人格じゃない、ただの普通の女の子になろうって……」
「……多重人格じゃなくなったら、今私たちの前に居るティアはどうなっちゃうの？」
「死にますよ。人格が居なくなるって、そういうことですから。“自分を殺す”ってシャレになりませんよね。
　それで、あの子が普通になりたいがために、たくさんの私たちが死にました。だから私はあの子が嫌い。私が居たら、自分が普通になれないんだって泣きじゃくるあの子が大嫌い。自分だけ棚に上げて“普通”になろうだなんて、許せない」
　激しい感情を語りながらも、ティアは穏やかなに微笑んだままだ。感情と表情の乖離にイクスは少し薄ら寒いものを感じた。
「私だって、平穏に、普通に生きたいのに。たまたま最初に生まれた人格だからって、あの子はいつも自分ことばっかり。だから、あの子なんて消えちゃえばいいのにってずっと願ってました」
「だけど、俺たちにマテリアルになったティアのことを助けてくれって言ったのは君だった」
「……妹みたいなものだからかもしれませんね。結局、あの子を見捨てることができなかった。ほんとに、困っちゃいますよね」

沈黙が落ちた。ティアは何かを思い出すかのように目を閉じている。
やがて目を開けたティアはにっこりと笑って、イクスたちを奥の扉へと導いた。
「さあ、イクスさんたちは、あの子を人間に戻してあげてください。お願いします。その後は、私がなんとかします」
「その後？どういうことだ？」
「あの子がマテリアルから人間に戻っても、すべて解決するわけじゃあないから……ゲイスとのしがらみがなくなるわけでも、あの子の……ううん。私たちの心の傷がなくなってしまうわけではないから。
でも、あの子が立ち上がれないなら、今度は私がちゃんと助けてあげなきゃなって今は思っています。生まれた順番は二番目ですけど、私の方がどう考えてもお姉ちゃんですからね！私がしっかりしないと！」
ティアは澄んだ瞳に強い決意を宿して、イクスたちを見送った。

広間の奥にあった扉を抜けた途端、イクスは煙っぽさを感じて顔をしかめた。空気が灰でざらついている。無数の吸い殻と、タバコが燃え尽きた後の灰が木板を張り巡らせた床の上に散らばっている。
先ほどまで居た地下広間とはまったく異なる光景が広がっていた。フローリングを床に敷き詰めた、薄汚れた小さな部屋の中にイクスたちは居た。ベッド一つ以外には家具の類はなく、閉め切られた窓を覆う黒いカーテンだけが揺れていた。
足元は灰まみれだ。タバコの吸い殻のようにも見えるが、それだけではこの灰の量は説明できそうにない。何か大きなものが燃え尽きてしまった後のようにも見えた。
窓が閉め切られた煙ったい部屋の隅で、一人の少女が膝を抱いて座り込んでいる。少女――ティアは声を押し殺して、一人きりで泣いていた。
「おい、グズ！！！テメェのせいだぞ！！！！」
前触れもなく、部屋中に怒声が鳴り響いた。部屋の隅でうずくまるティアの肩がびくりと揺れる。
「俺の人生はテメェのせいで滅茶苦茶だ！テメェが普通じゃねぇから！何にもうまく行きやしねぇ！！」
「お前の人生がうまく行ってないことにティアは関係ないだろう。うまく行くための努力を、お前がしてるとは思えない」
ゲイスの怒声に、イクスは思わず言い返した。
「おかげで俺は一生笑いもんだ！テメェみたいなグズが生まれたから、死ぬまで笑いもんだ！！なんで、テメェはそうなんだよ！！」
しかしゲイスはイクスの言葉を黙殺した。聞こえてもいない様子だ。イクスが戸惑っていると、部屋の隅からぽつりと少女が呟いた。
「……無駄だよ。それ、本物じゃないから」
あどけないその声が合図だったようにゲイスの怒声が止む。ゲイスは部屋に一つしかないベッドに横たわっているようだった。シーツからは枯れ木のような腕が覗いていて、イクスはぎょっとする。シーツをめくると憤怒の表情のゲイスが天井を睨みつけていた。その顔は先ほど会ったゲイスの顔と変わらない。腕だけが年齢を重ねてしまったかのように細く、弱々しいものになっていた。
「タヌタのお爺ちゃんは最後にタヌタに優しかったから。だからね、パパも死ぬ前にはティア

に優しくしてくれるかなって思ったんだ」
　ティアが顔も上げないままに語る。イクスたちに言い聞かせていると言うよりは、独り言を漏らしているようだった。
「でも、想像もできなかった。夢の中だけでも、私に優しくしてくれるパパに会いたかったのに。何も思いつかないの。何も」
　年老いたゲイスの姿も想像できず、ゲイスの優しい言葉すらも思いつかない。腕だけがロードと同じように年老いた、歪な幻覚がベッドに横たえられていた。
「ティアは頑張っていい子にしてたんだよ。マテリアルにされたときも、本当は怖かったけど我慢したの。ティアが必要だって言ってくれたから。でも、マテリアルになってもパパは全然褒めてくれなかった。いつもみたいに殴ったり蹴ったりするだけで、ティアのことを全然見てくれないの。
　タヌタはいいな。マテリアルになってお爺ちゃんに大事にされて。最後は人間の方が良いって言ってもらえて。なんでティアはダメなんだろう」
　ティアがゆっくりと顔を上げた。
「ねえ、お兄ちゃん。どうしてタヌタは良くて、ティアはダメなの？」
「ティア……」
　少女は目元に涙の跡を残したまま、イクスに問いかけた。紫の瞳は涙も枯れて、暗く淀んでいる。殴られたのか、頬は赤く腫れていた。よく見れば服の裾から青あざや火傷の跡も覗いている。
「わかんないよ、誰か教えてよ……」
　傷と、罵声と、涙。それだけがティアの世界だった。
　イクスはどう答えていいかわからずに黙り込んだ。エレナとノアナも何も言うことができなかった。
　しかし不意に双子は互いに目配せしあい、何かを決意したように頷きあった。
「「ティアちゃん」」
　部屋の隅でうずくまるティアの傍に座り込み、双子は少女の手を片方ずつ取った。左手をエレナが、右手をノアナが。優しく両手で包み込むようにティアの手を握る。
「私たちもね、どうしようもないって思ってるのに、諦めきれないことってあるよ」
「ティアちゃんのお話とは違いますけど、でも、わたくしたちもどうしようもないことを、どうにかしたくて苦しくなることがあります」
「私たち、ママとパパにまた会いたいって思ってももう会えないんだ」
「仕方ないとわかっています。もう、乗り越えたつもりではいるんです。でも、それでもふとした瞬間に、二度と会えないことがもの悲しい時がある」
　ふと、“音”が聞こえた。ティアの“音”ではない。木々のさざめき、少しだけもの悲しい夕焼けの湖畔を思わせるこの穏やかな“音”はエレナとノアナのものだ。言葉よりも雄弁に、優しい気配が部屋を包み込む。
「でもね、悲しいことばっかり考えたら前に進めなくなっちゃうかなって私たち思ったんだ」
「悲しいこと、辛いと思っていることを忘れる必要はありません。自分の気持ちに嘘はつけませんから。でも、ずっと同じ場所に居る必要もないでしょう？」
「私たちは、引っ張ってくれる人が居たからそうやって考えられたんだ」
「こんなわたくしたちでも、良いと言ってくださる方が居たから、少しずつでも笑える未来の方へ歩き出そうと思えたんです」
「一人じゃ、立ち上がるのも大変だもんね」

「転んだ時は、誰かの手が必要でしょう？」
　言いながら、エレナとノアナはイクスの方を見た。視線を受けて、え？とイクスは目を見開く。そんな大層なことをした覚えはなかった。そんなイクスの反応がわかっていたように双子がくすくすと笑う。
「……ティアにはそんな人いないもん。ティアを助けてくれる人なんて……」
「じゃあ、問題です！どうして私たちはここに居るんでしょう！」
　ノアナが元気よく手をあげてティアに尋ねた。
「え……それは……どうして？」
　はっ、と気付いたようにティアが目を丸くした。心底不思議そうな顔をする。
　してやったりとばかりにノアナが満面の笑みを浮かべた。
「正解は、ティアちゃんに会うためでーす！」
「ティアに……？なんで？」
「泣いてる子を放ってはおけませんから。ね、イクス様？」
　イクスは迷わずに頷いた。怖がらせないようにそっとティアに近づき、少女の真正面にしゃがみ込む。そのままイクスはコツンと自分の額をティアの額に当てた。ティアの紫の瞳が眼前に広がる。
　エレナとノアナとは違い、イクスは“音”を奏でることができない。だが、ティアを放っておけないと思っているこの想いが少しでも伝わるようにと願った。少なくとも、ティアを泣かせたまま帰ることはできない。
　涙と困惑で揺れる少女の目から視線をそらさずに、イクスは笑った。
「昔さ。俺が泣いてる時、母さんがよくこうやってくれてたんだ」
　ためらいがちに手を伸ばすイクス。そっと伸ばした手をティアの頭の上に置いた。下手に触ると髪をくしゃくしゃにしてしまいそうで、遠慮がちな手つきでティアを撫でる。
「何も聞かないでさ。ずっと泣き止むまでこうしてくれた。だから、えっと……」
　イクスが見つめるティアの瞳がくしゃりと歪んだ。
　ティアはしばらく泣いていた。押し殺していた声が少しずつ大きくなって、今まで堪えていたものをすべて吐き出すように泣いた。
　しばらくしてからイクスたちから少し離れ、目元をこすりながらためらいがちに口を開いた。
「お姉ちゃんたちが言ってることはちゃんとはわかんないよ……でも、ねえ……ティアは消えなくてもいい？人間に戻って、皆にまた会いに行っても……いいかな？」
「「「勿論！」」」
　イクスたちは声を揃えて頷いた。イクスはティアと目線を合わせて、少女の背中を押すように穏やかに見つめた。
「他の“ティア”たちも待ってるよ。君のことを頼んだ、って二人にも言われたからさ」
「え……でも、ティアは酷いことしたのに？みんな、ティアのことは嫌いって言ってたのに……」
「それでも、ティアに会いたいってさ。ちゃんとティアのことを待ってる人は居るんだよ。ちゃんと、謝りにいかないとな？」
「うん……！」
　ティアが嬉しそうに破顔する。だが、すぐに顔を曇らせた。

「た……タヌタにも会いに行って……いい、かな。タヌタにも酷いこと、言っちゃったから、もう会いたくないって言うかな……」
「タヌタもティアのことを心配してたよ。戻ったら、タヌタにも謝りに行けばいいさ」
「――そっか」
　何かを噛み締めるようにティアが目を伏せる。少女がそれからゆっくりと顔を上げると、その表情には溌剌とした希望が宿っていた。
「ティア、頑張るよ！」
　ティアが笑顔を浮かべると、夢から覚めるように部屋を白い光が包みはじめた。天井がなくなり、壁がなくなり、灰もどこかへ消えてしまう。朝日のように柔らかな光がティアを照らし出した。
　ティアの目元に残っていた涙の跡を辿るように、新しい涙が一つ零れ落ちた。キラキラと輝きながら光に消えていく涙は、宝石のようにティアを美しく見せた。
　ゆっくりとイクスの意識も遠ざかり――

HARMONIX PART2-7『絆のカタチ』

　ティアのマテリアルが暴走してから数日が経った。ティアは無事に人間の姿に戻り、ティアのマテリアルに取り込まれていたゲノムの施設も共に解放された。攫われてマテリアルにされた人々も人間の姿に戻っており、今は一時的にロードの屋敷で保護されている。身元がわかり次第、家族の元に帰していく予定らしい。
　既に売られてしまったマテリアルの行方はタヌタを中心にして、ロードの屋敷の者たちが探している。ゲノム社の社員たちは自警団に捕らえられた一部以外、気付けば行方を眩ませていた。ティアの父親であるゲイスもそのうちの一人だ。二度と街には近づいてこないだろうが、もし今度顔を合わせたら捕まえてやる、と意気込んでいたのはティアだ。ティアはマテリアルになってしまった他の人格を探しつつ、タヌタたちの手伝いをすることに決めたらしい。今はロードの屋敷にひとまず身を寄せている。
　そのティアに迎えられて、イクスたちはロードの屋敷を訪れていた。ロードの葬式に呼ばれたのだ。葬式には多くの人々が参列し、屋敷裏の墓前に無数の花が捧げられた。幼いながらも喪主を取り仕切るタヌタの周りはひっきりなしに挨拶にくる人々が訪れ、ロードの交友関係の広さが垣間見えた。
　一言だけ挨拶して帰ろうとしたイクスたちを引き留めたのはティアと屋敷の使用人たちだ。タヌタが話したいと言っていたから、人の流れが落ち着くまで待っていてほしいとのことだった。
　タヌタが来るまでの時間を潰すためにイクスたちはロードが良く釣りをしていた湖に向かっていた。
「えええええっ！？エレナとノアナってエレノアナなの！？」
　ティアが驚愕の声をあげた。そんなティアを見て、イクスも驚く。
「気付いてなかったのか！？」
「誰だろうってずっと思ってた……えー！？マテリアルになった時に合体しちゃったの？」
「いや、逆だよ。元々エレノアナ一人だったのが、マテリアルにされかけた時に二人にわかれたんだ」
「ええ……そんなことあるんだ、びっくり……」
「だから多重人格くらい、気にしなくて大丈夫ですよ、ティアちゃん！」
「う、うん……なんか説得力あるね……」
　エレノアナの笑顔の勢いに押されるようにティアは頷いた。
　ティアの心の中から戻ると、イクスはエレノアナの笑顔に出迎えられた。エレノアナはちゃんと、エレノアナのままだった。しかしエレナとノアナとしてティアの心の中に潜った記憶もしっかりと残っているらしい。
「それで、ティアちゃんはタヌタくんと仲直りできたんですか？」
　エレノアナがティアに問いかけると、ティアはふにゃりと顔を笑みの形に崩れさせた。それだけで答えがわかるというものだ。見ているイクスたちの口元にも笑みが浮かぶ。
「うん……！ごめんね、って言ったら気にしてないよ、って。そしたらね、タヌタがね、お友達になろうって……ティア、はじめてお友達ができちゃった……」
「よかったな」
「うん！イクスお兄ちゃんありがとう！エレノアナお姉ちゃん、レイラお姉ちゃんも！」
「あら、私は何もしてないけど？」
　名を呼ばれて、意外そうにレイラが目を瞬かせた。

「ティアを止めてくれたのはレイラお姉ちゃんでしょ？あの“音”、すっごい綺麗だった！！」
「そう言ってくれると嬉しいわね」
「レイラさん、そう言えば……」
　イクスはレイラをこっそりと呼び寄せた。エレノアナとティアから少し離れて、小声で尋ねる。
「あれって、前に言っていたマテリアルプロトですよね、レイラさんのお父さんが作ったって言う……壊れちゃったけど、よかったんですか？」
「いいのよ。使える物をずっと取っといてもしょうがないし。あそこで使うのがベストだったと思うわ」
「でも……」
　マテリアルプロトはレイラの母親の形見のようなものだったはずだ。ティアを止めるために必要だったのは事実だが、形見を壊してしまう形になってしまった。明るく振舞うレイラが本当に気にしていないのか、探るように見るイクス。
「いーの、いーの！形見なんかなくたって、私はパパとママの娘なんだから。……良くも悪くもね」
　レイラは何かを追憶するように目を伏せた。胸の奥で何かが痛んでいるような横顔だったが、不思議と陰りはない。
「パパがマテリアルを作っちゃったって言う事実はずっとついて回るんだと思う。それが、私とパパとママの繋がり、みたいなもので、形見とかなくても、そっからは逃げらんない気がしてさ。逃げる気もないけどね。私はマテリアルにされた人を助けに行ってもいいし、行かなくてもいい。でも……」
「レイラさんの父が関わっていようと、関わっていなかろうと、マテリアルにされた人を放っておけるレイラさんじゃあないですもんね」
「そういうこと！」
「あいたた……」
　レイラに背中を叩かれて、よろめくイクス。何かが吹っ切れたようなレイラの明るい態度に苦笑する。障害も困難も丸ごと跳ねのけていくこの強引な前向きさこそレイラらしい。本当に形見のことは引きずっていないようだ。
「……何もしなくてもいいの？」
　少し先を歩いていたティアが振り向いて、迷子の子どものような目でレイラを見つめた。話を聞いていたらしい。同じく振り向いたエレノアナは楽しそうにしている。レイラの母親の形見の話までは聞こえなかったようだ。
「ティアのパパは悪いことをたくさんしてるよ。だから、ティアは、ティアが止めなきゃって思って……」
「止めてもいいけど、絶対にティアが止めなきゃいけないって訳でもないと私は思うわ。だって、人生に“絶対”なんて、本当はないもの」
「“絶対”なんてない……」
「これをやっときゃ正解、みたいなのはないってこと！自分のやりたいことくらい、自分で決めないとね」
「ティアのやりたいことかぁ……」
　ティアは悩む様子を見せた。

「うーん……もっと、強くなりたい、かな。……パパが怖くなくなるくらいには強くなりたい」
「龍になった時のティアはすごい強かったけど……」
「あれはマテリアルになってたからだもん！あれは違うの！」
　イクスの言葉に頬を膨らませるティア。だが、ティアは街全体を呪うほど、強力な“音”を奏でるマテリアルになるような少女だ。まだ幼いところはあるが、弱い心を持っているとは考えにくい。
　イクスの考えを余所に、ティアは不安そうに呟く。
「……ティアは弱いティアから変われるかなぁ」
「変えたいと思ったなら、変えられるわ。もうその一歩をティアは踏み出しているでしょ？」
「そっか……うん。今までのティアじゃないティアになりたい。変わりたいよ」
「それでよろしい！」
　レイラの自信に満ち溢れた笑みにつられて、ティアも嬉しそうに笑顔を浮かべる。あどけない少女らしい、無邪気な笑みだった。

　イクスたちが湖に辿り着いてしばらくすると、タヌタが大きく手を振りながら駆けてきた。
「イクスさーーーん！エレノアナさん！！レイラさん！！！」
　息を切らせてイクスたちの前まで走ってくるタヌタ。急いできたのか、額にうっすら汗が浮いている。
「ごめんなさい！中々抜け出せなくてお待たせしてしまいました！」
「すごい人でしたね！」
　エレノアナの言葉を聞いてタヌタは苦笑した。
「ボクもびっくりしました……おじい様は色んな人とお友達だったみたいで。おじい様のこと、あんまり知らなかったんだなぁって」
　ロードはジェノサイド社とマテリアルの取引ができるような立場の人間だったのだ。晩年になって人を遠ざけていたが、元々知り合いは多いだろう。それを一人で引き継ぐことになったタヌタにはこれから様々な思惑を持った人間が寄ってくるかもしれない。
「大変だな……」
「大丈夫です、イクスさん！お屋敷のみんなも居ますし！」
「ねえ、タヌタ。そう言えばタヌタのパパは来たの？」
　ティアが尋ねると、ちょっとだけ残念そうな顔でタヌタは首を振った。
「ううん。お父様は来なかったよ。そうじゃないかなって思ってたけど……」
「きっと……なんか理由があったんだよ」
　尋ねたティアの方が悲しそうな顔をしているのを見て、タヌタが仕方なさそうに口元を緩める。
「うん……ありがとうティア」
「タヌタに会いたくなかったわけじゃないと思うから！そこは勘違いしないよーに！！」
　腰に手を当てて、強く主張するティアにタヌタはようやく満面の笑顔を浮かべた。
「そうだね。ティアが言うなら、そんな気がしてきた！」
「ま、傍に居ない方が良いことってありますよねぇ」
「え？」

ふとティアの声色が変わり、タヌタが驚きの声をあげる。曖昧な笑みを浮かべたかと思うと、ティアはすぐに無邪気な笑い声をあげた。
「……って、二番目のティアが言った！」
「なんだぁ、びっくりした！また別のティアが話してたのかぁ」
「えへへ、最近よく茶々入れてくるんだよねー！特に二番目がすっごいうるさいの！手を洗えー、とか！ドレスの裾が乱れてるーとか！五番目も見てるだけで止めてくれないし！」
「ティア、ややこしいからみんなに名前つけようよ……誰が誰だかボクよくわかんない……」
「名前かぁ。考えてみる！」
「すっかり仲良しね」
レイラが面白いものを見るような目でタヌタとティアを眺めていた。タヌタもティアの心に住む複数の人格を受け止めているように見えた。二人で話に夢中になっていたことに気付いたタヌタとティアが揃って照れたような顔をするのが微笑ましい。
ぺこりとタヌタがイクスたちに頭を下げた。それを見て、ティアも一緒に頭を下げる。
「改めて、ありがとうございました！！おじい様のことも、街のことも。それに……ティアのことも」
「あ、ありがとうございました！！」
「俺たちは、俺たちのしたいことをしただけだよ」
大したことをした覚えはなかった。だが、誰かの役に立てたという事実がイクスの胸にじんわりと広がる。思ったままの言葉を口にすると、レイラがニヤリと笑った。
「うちのイクスくんはキザねー」
「レイラさん！？」
「そういうところもかっこいいですよね！」
「エレノアナまで！？」
エレノアナにまで否定されず、なんだか裏切られたような衝撃をイクスは受けた。慌てて仲間二人を見比べるイクスを見て、レイラとエレノアナが楽しそうに笑う。
「勘弁してくれ……二人にからかわれたら敵わないよ……」
「からかってるつもりじゃないんだけど、ねー？エレノアナちゃん！」
「ねー、レイラさん！」
「いいなー！イクスさんたち仲良しだ！！」
「ボクたちも仲良し……だよ？」
「……え？」
「え、ええ！？仲良し、じゃない……？」
タヌタの発言にティアが不思議そうな顔をした。それを見て、タヌタがショックを受けたようによろめく。涙を目に浮かべてふるふるしているタヌタに今度はティアが慌てた。
「な、仲良し！！仲良しだよ！！！タヌタがいいなら、ティアも仲良しがいい！」
「よ、よかったぁ……嫌われちゃったかなって思った……」
「嫌いになんてならないよ！！むしろ、そのティアみたいなのと……」
ごにょごにょと呟くティア。言葉にならない何かを吐き出した後、ううん、と気持ちを切り替えるように首を振った。
「そうじゃないね。ティアは、タヌタのお手伝いするって決めたから。だから、えっと、これからもよろしくお願いします！」
「こ、こちらこそお願いします！！」

ぎこちなくお辞儀をしあう二人を見てイクスたちも穏やかな気持ちになった。
それからいくつか言葉を交わして、イクスたちは出立することにした。わかれの挨拶をして、帰り路につく。
山の向こうに太陽が沈みゆき、木々や木陰を赤く染めていた。ふと、強い追い風が吹き、イクスたちの髪や服を乱す。
「バイバイ、イクスさん、エレノアナさん、レイラさん。――バイバイ、パパ……」
風に乗ってティアの声が聞こえたような気がしてイクスは振り返る。離れたところでタヌタとティアが笑顔で手を振っていた。もうティアは大丈夫だろう。二人の笑顔が眩しくてイクスは目を細める。
イクスも軽く手を振り返し、レイラとエレノアナと並んで二人に背を向けて歩き出した。

To be continued….

©TatshMusicCircle.2020

原作&監修:Tatsh

小説:Takatano Takuma

イラスト:藤村都矢

Assistant Staff:LiK-K

https://ameblo.jp/tatshblog